指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集

ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査報告書

MINAMI SAKODA SITE

南迫田遺跡Ⅱ

１９９８年３月

指宿市教育委員会

序　文

本書は，鹿児島県指宿市十二町字野村に所在する南迫田遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

ふるさと農道緊急整備事業に伴う，平成７年度，および平成９年度の調査によって，縄文時代から近世に至る遺物・遺構群が検出されました。

弥生時代においては，ピット群や土坑，多量の土器片が見つかり，付近に集落の中心の存在をうかがわせる成果が上がりました。また，中世から近世にかけての同一方向に敷設された道跡が複数発見され，当該地が長い期間にわたって生活に欠かせぬルートの一つであったことが判りました。さらに，近世では，椀形鍛冶滓や石組遺構の発見があり，付近に鍛冶場があった可能性が示唆されるようになりました。

南迫田遺跡の成果から弥生時代，そして中・近世の生活の一端が明らかになり，地域の歴史を考える上で興味深い成果を得ることができました。

本書が皆様に活用され，将来に守り伝えられるべき遺跡の保存に役立てられることを願ってやみません。この調査にご指導，ご協力を頂きました関係各位，ならびに地元の皆様に対し心から感謝申し上げ，序文にかえさせて頂きます。

平成10年３月

指宿市教育委員会

教育長　山下　隼雄

例　言

1．本書は，平成７年８月６日から平成８年３月31日，並びに平成９年10月11日から12月27日まで実施した鹿児島県指宿市十二町字野村に所在する南迫田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査に伴う調査費・報告書作成費は次のとおりである。平成７年度の調査費は，1,500千円（県：77%，市：23%）で，平成９年度の調査費・報告書作成費は5,500千円（県：77%，市：23%）である。

3．調査は，指宿市教育委員会が実施し，主に鎌田洋昭が担当した。
各調査の原図・製図作成者については，目次に記す。編集は下山　覚が担当し，執筆は，下山　覚，中摩浩太郎，渡部徹也，鎌田洋昭が分担して行なった。実測は，陶磁器類は下山が，弥生土器等は中摩・渡部が，石器類は鎌田が実測を行なった。製図作業において，清　秀子，竹下珠代の協力を得た。出土遺物写真の撮影は，中摩・渡部が行った。

4．文章の執筆は，下記のとおりである。
下山　覚：第Ⅳ章　第３・４層出土遺物　陶磁器，第Ⅴ章　第２節
渡部徹也：第Ⅳ章　第11層出土遺物　土器，第Ⅱ章　第２節
鎌田洋昭：第Ⅰ章　第1節，第Ⅱ章　第Ⅲ章，第Ⅳ章　第11層・第３・４層出土遺物石器，第Ⅴ章　遺構

5．本書のレベルはすべて絶対高である。また，図中に用いている座標値は，国土座標系第Ⅸ系に準ずる。

6．本書の層位・遺物の色調名，破片形状表記基準，含有物の占有面積表記基準は，「標準土色帖」1990年版に基づく。

7．遺物観察表，遺物実測図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡Ⅲ」（1992）に準ずる。観察表の特殊な表記については，下記の通りである。
土器残存･法量【口:口縁部径，肩:肩部最大径，胴:胴部最大径，底:底部径】
色調【外:外面，内:内面，肉:器肉】
混和材【カ:角閃石，セ:石英，白:白色粒，黒:黒色粒，赤:赤色粒，金：金雲母】
調整【内:内面，外:外面，口唇: 口唇部，突:突帯部，底:底面，脚内:脚台内面，脚端:脚台接地面】

8．南迫田遺跡から出土した遺物の取上げ番号の中で，〔Ｓ－番号・Ｐ－番号〕となっている資料は，第４層中で検出された礫がまとまって出土した礫分布内から取上げられたものである。

9．平成９年度に実施した発掘調査に伴い，近世陶磁器・輸入陶磁器，鍛冶関連遺物について下記の先生より指導を頂いた。記して感謝します。
渡辺芳郎（鹿児島大学文学部助教授）　　上田　耕（ミュージアム知覧学芸員）
宮下貴浩（金峰町教育委員会）

10．発掘調査に伴い，基本測量・遺物取り上げ・土層断面図・遺構平面図等の作図については，（株）埋蔵文化財サポートシステムに業務委託し，指宿市教育委員会で加筆・修正を行い，記録保存した。

11．調査で得たすべての成果については，指宿市考古博物館「時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ」でこれを保存・活用している。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　発掘調査に至る経緯 …… 3
　第１節　発掘調査起因から発掘調査への経緯 …… 3
　第２節　発掘調査の組織 …… 3
第３章　発掘調査 …… 4
　第１節　発掘調査区の設定 …… 4
　第２節　発掘調査区の層位 …… 5
　第３節　出土遺構と遺物 …… 10
　　(1)　遺　構 …… 10
　　①　弥生時代の遺構 …… 10
　　ａ．ピット …… 10
　　ｂ．土坑 …… 10
　　②　中世～近世の遺構 …… 23
　　ａ．道跡 …… 23
　　ｂ．溝状遺構 …… 25
　　ｃ．礫分布 …… 25
　　(2)　遺　物 …… 33
　　ａ．第11・13層出土遺物 …… 33
　　ｂ．第３・４層出土遺物 …… 36
第４章　発掘調査成果のまとめ …… 72
　第１節　南迫田遺跡における遺構について …… 72
　第２節　南迫田遺跡出土の陶磁器について …… 73

挿　図　目　次

Fig. 1　調査地点位置図（S=1/5,000） …… 1
Fig. 2　周知の遺跡の範囲と調査地点（S＝1/5,000）（原図・トレース：渡部） …… 2
Fig. 3　トレンチ配置図（S=1/400）（原図・トレース：同上） …… 4
Fig. 4　調査地点の層位模式柱状図（原図・トレース：鎌田） …… 5
Fig. 5　層位断面図①（1/40）（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：渡部） …… 7，8
Fig. 6　層位断面図②（S=1/40）（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：中摩） …… 9
Fig. 7　弥生時代ピット配置図（S=1/40）（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：中摩） …… 11,12
Fig. 8　弥生時代ピット平面図・断面図①（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 13
Fig. 9　弥生時代ピット平面図・断面図②（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 14
Fig. 10　弥生時代ピット平面図・断面図③（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 15
Fig. 11　弥生時代ピット平面図・断面図④（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 16
Fig. 12　弥生時代ピット平面図・断面図⑤（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 17
Fig. 13　弥生時代ピット平面図・断面図⑥（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 18
Fig. 14　弥生時代ピット平面図・断面図⑦（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 19
Fig. 15　弥生時代土坑平面図・断面図（S=１/20）（原図：同上，トレース：同上） …… 20
Fig. 16　中世～近世道跡平面図・断面図（S=1/100・１/40）
（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：渡部） …… 21,22
Fig. 17　中世～近世道跡検出状況図（S=1/300）（原図：同上，トレース：同上） …… 23
Fig. 18　近世溝状遺構平面図・断面図（S=1/100・1/40）（原図：同上，トレース：同上） …… 27,28

Fig. 19　近世礫分布状況図　(S=1/200・1/40)（原図：同上，トレース：同上）…… 29
Fig. 20　第11・13層出土遺物分布図（S=1/150）（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：竹下，鎌田）30
Fig. 21　第４層出土遺物分布図（S=1/150）（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：竹下，渡部）……31
Fig. 22　第３層出土遺物分布図（S=1/150）（原図：埋蔵文化財サポートシステム，トレース：竹下，中摩）……32
Fig. 23　第11層出土遺物①（S=1/2）（原図・トレース：渡部）…… 33
Fig. 24　第13層出土遺物（S=1/1）（原図・トレース：鎌田）…… 33
Fig. 25　第11層出土遺物②（S=1/4）（原図・トレース：中摩，渡部）…… 35
Fig. 26　第11層出土遺物③（S=1/4）（原図・トレース：同上）…… 36
Fig. 27　第11層出土遺物④（S=1/2，1/1）（原図・トレース：中摩，渡部，鎌田）…… 37
Fig. 28　第3，4層出土遺物①（S=1/2）（原図・トレース：下山）…… 39
Fig. 29　第3，4層出土遺物②（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 40
Fig. 30　第3，4層出土遺物③（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 41
Fig. 31　第3，4層出土遺物④（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 43
Fig. 32　第3，4層出土遺物⑤（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 44
Fig. 33　第3，4層出土遺物⑥（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 45
Fig. 34　第3，4層出土遺物⑦（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 46
Fig. 35　第3，4層出土遺物⑧（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 47
Fig. 36　第3，4層出土遺物⑨（S=1/4）（原図・トレース：同上）…… 49
Fig. 37　第3，4層出土遺物⑩（S=1/4）（原図・トレース：同上）…… 50
Fig. 38　第3，4層出土遺物⑪（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 51
Fig. 39　第3，4層出土遺物⑫（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 52
Fig. 40　第3，4層出土遺物⑬（S=1/4）（原図・トレース：同上）…… 53
Fig. 41　第3，4層出土遺物⑭（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 55
Fig. 42　第3，4層出土遺物⑮（S=1/2）（原図・トレース：鎌田）…… 56
Fig. 43　第3，4層出土遺物⑯（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 57
Fig. 44　第3，4層出土遺物⑰（S=1/2，1/4）（原図・トレース：同上）…… 59
Fig. 45　第3，4層出土遺物⑱（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 60
Fig. 46　第3，4層出土遺物⑲（S=1/2）（原図・トレース：同上）…… 61

表　目　次

Tab. 1　弥生時代ピット法量表 …… 10
Tab. 2　道跡Ａ硬化面a-d土壌硬度測定データ表 …… 24
Tab. 3　道跡Ａ硬化面e-h土壌硬度測定データ表 …… 24
Tab. 4　道跡Ｂ硬化面i-l土壌硬度測定データ表 …… 24
Tab. 5　出土遺物観察表① …… 62
Tab. 6　出土遺物観察表② …… 63
Tab. 7　出土遺物観察表③ …… 64
Tab. 8　出土遺物観察表④ …… 65
Tab. 9　出土遺物観察表⑤ …… 66
Tab. 10　出土遺物観察表⑥ …… 67
Tab. 11　出土遺物観察表⑦ …… 68
Tab. 12　出土遺物観察表⑧ …… 69
Tab. 13　出土遺物観察表⑨ …… 70
Tab. 14　出土遺物観察表⑩ …… 71

写真図版目次

PL. 1　第３層出土の唐津系鉄絵鳥文碗　内面見込み写真 …… 74
PL. 2　調査区近景・層位断面写真 …… 75
PL. 3　礫分布検出状況写真 …… 76
PL. 4　道跡検出状況写真① …… 77
PL. 5　道跡検出状況写真② …… 78
PL. 6　弥生時代遺構検出・遺物出土状況写真 …… 79
PL. 7　出土遺物写真① …… 80
PL. 8　出土遺物写真② …… 81
PL. 9　出土遺物写真③ …… 82
PL. 10　出土遺物写真④ …… 83
PL. 11　出土遺物写真⑤ …… 84
PL. 12　出土遺物写真⑥ …… 85
PL. 13　出土遺物写真⑦ …… 86
PL. 14　出土遺物写真⑧ …… 87
PL. 15　出土遺物写真⑨ …… 88
PL. 16　出土遺物写真⑩ …… 89
PL. 17　出土遺物写真⑪ …… 90
PL. 18　出土遺物写真⑫ …… 91
PL. 19　出土遺物写真⑬ …… 92
PL. 20　出土遺物写真⑭ …… 93
PL. 21　出土遺物写真⑮ …… 94
PL. 22　出土遺物写真⑯ …… 95

■　第１章　遺跡の位置と環境[1]

指宿市は，九州本土薩摩半島の最南端に位置しており，地形的には山地，台地，平野，湖沼と大きく４つに分けられる。九州最大のカルデラ湖である池田湖は，今から約5,500年前に活動し，その火山噴出物は指宿地方の地形的形成の一大要因となっている。また，開聞町のあるトニコロイデ型の開聞岳は，その活動は有史以来，「日本三代実録」等に記載があり，降下した火山性噴出物は非常に固結し，広くこの地方を覆っている。開聞岳を起源とする火山灰は，黄コラ（縄文時代後期），暗紫コラ（弥生時代中期末），青コラ（７世紀最終四半世紀），紫コラ（西暦874年３月25日，西暦885年）が代表的であり，降下当時の集落が少なくとも被害にあったと考えられる。

南迫田遺跡は，指宿市十二町に位置している。遺跡は，池田湖の東側外輪山の山裾，海抜16～24m前後の火山性扇状地に位置している。平成５年度に実施した確認調査によって，開聞岳の噴出物である暗紫コラ・青コラ・紫コラなどが堆積し，縄文時代から近世までの複合遺跡であることが確認されている。[2]

南迫田遺跡周辺には，古墳時代の土器集中廃棄場や竪穴住居，溝状遺構などが検出された迫田遺跡，開聞岳の噴出物で埋没した円墳が発見された弥次ヶ湯古墳，古墳時代から中世までの複合遺跡である敷領遺跡があり，他に坂瀬ノ上遺跡，柳田遺跡などがある。

文責　鎌田洋昭

引用文献
（１）指宿市教育委員会「第１章 遺跡の立地と環境」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』1992を一部改変
（２）指宿市教育委員会『南迫田遺跡』1994

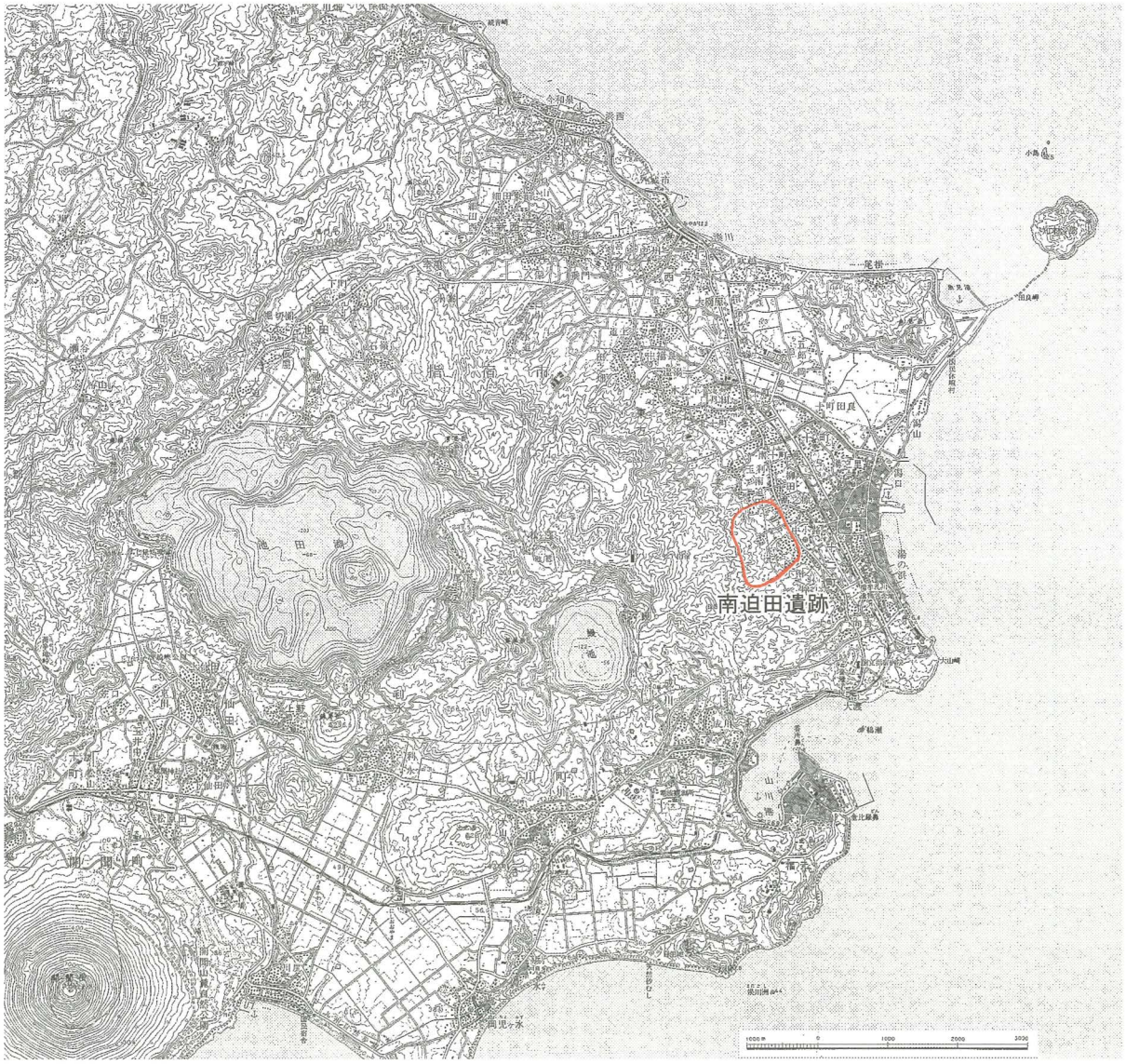


Fig.1　調査地点位置図（S=1/5,000）

Fig.2　周知の遺跡の範囲と調査地点（S=1/5,000）

■　第２章　発掘調査に至る経緯

第１節　発掘調査起因から発掘調査への経過

鹿児島耕地事務所の主体事業であるふるさと農道緊急整備事業に伴い，平成６年度に指宿教育委員会が分布調査を実施した。（確認調査にいたる経緯については，『南迫田遺跡』1994　指宿市教育委員会　を参照願いたい。）路線予定地内に10ヶ所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果，縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが分かった。その確認調査の結果に基づき，鹿児島耕地事務所，鹿児島県文化財課，指宿市耕地課，指宿市教育委員会での四者協議を行なった。一部設計変更を行い掘削する範囲の変更等で，農道予定地南端から北側へ約109ｍの約712㎡について，鹿児島耕地事務所と指宿市間で委託契約を締結し，指宿教育委員会が発掘調査を実施することとなった。当初，調査予定地を単年度に実施する予定であったが，用地買収の関係で，平成７年度に約197㎡，平成９年度に226㎡の調査対象地域を２ヵ年に分けて実施することとなった。なお，調査予定地であった北側約289㎡については，用地買収ができななかったため，発掘調査は実施していない。

文責　鎌田洋昭

第２節　発掘調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

平成７年度	発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教　育　長	中村　利廣
	発掘調査担当	指宿市教育委員会	社会教育課長	山澤　郁夫
			社会教育係長	尾辻　　隆
			派遣社会教育主事	塩入　俊實
			社会教育係主査	川畑　忠晴
			社会教育係主査	宮原　智子
			文化係長	下玉利　泉
			文化係主査	大久保正一
			文化係主事補	小原　　愛
	発掘調査員	文化係主事　下山　覚，同主事　中摩浩太郎，　同主事　渡部徹也，同主事補　鎌田洋昭		
	発掘調査作業員	浜崎いち子，井上ヒサ子，東 富子，林山イネ，竹下カツエ，吉元トシエ		
	整理作業員	徳留逸子，前田恵子，清秀子，新小田香代子，上高原信子		
平成９年度	発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教　育　長	山下　隼雄
	発掘調査担当	指宿市教育委員会	社会教育課長	室屋　昭男
			社会教育係長	尾辻　　隆
			派遣社会教育主事	原口　　洋
			社会教育係主査	川畑　忠晴
			社会教育係主査	宮原　智子
			文化係長	下玉利　泉
			文化係主査	小村　重志
			文化係主事	大道　裕子
	発掘調査員	文化係主査　下山　覚，同主事　中摩浩太郎，　同主事　渡部徹也，同主事　鎌田洋昭		
	発掘調査作業員	浜崎いち子，井上ヒサ子，東 富子，林山イネ，竹下カツエ，吉元トシエ		
	整理作業員	徳留逸子，前田恵子，清秀子，新小田香代子，上高原信子		

■　第３章　発掘調査

第１節　発掘調査区の設定

ふるさと農道予定路内において，平成７年度と平成９年度に発掘調査を実施した。平成７・９年度の調査区は，それぞれ隣接した状態で設定した。発掘調査区は，次のような理由から計画面積より面積が狭くなった。農道予定路の東側に共用中の市道が隣接し，安全性の確保に伴いそれに隣接する土手部分を残留するため。北西隣接地が畑地として利用しており，かつ，農道予定路の法面傾斜部分を掘削せずに残留するため。これらの理由から，調査区境界線を農道予定路の境界線から１ｍ前後手前に引いた状態で設定した。平成７年度は約120㎡，平成９年度は約170㎡である。

平成７年度は，地層堆積状況の把握のため，北端に東西の先行トレンチを設定した。全体的に第１層から第４層まで掘り下げ段階で北西半分のみに第５層の「紫コラ」が残存している部分を確認した。そのほぼ同一レベルにおいて第４層下部に硬化面がある道跡を検出している。調査区全体的には，一部道路部分を残しながら，第12層まで掘り下げた。先行トレンチで第13層まで堀り下げを行なった。

平成９年度は，平成７年度の調査結果に基づいて，発掘調査を実施した。地層堆積が北西方向から南東方向へ著しく傾斜堆積しているため，平成７年度と同様な調査方法をとった。調査区北西半分において，近世の鍛冶関連の遺物がまとまって出土し，記録作業に時間が必要となった。そのため，調査期間を考慮して，南東半分を先に第12層まで掘り下げた。

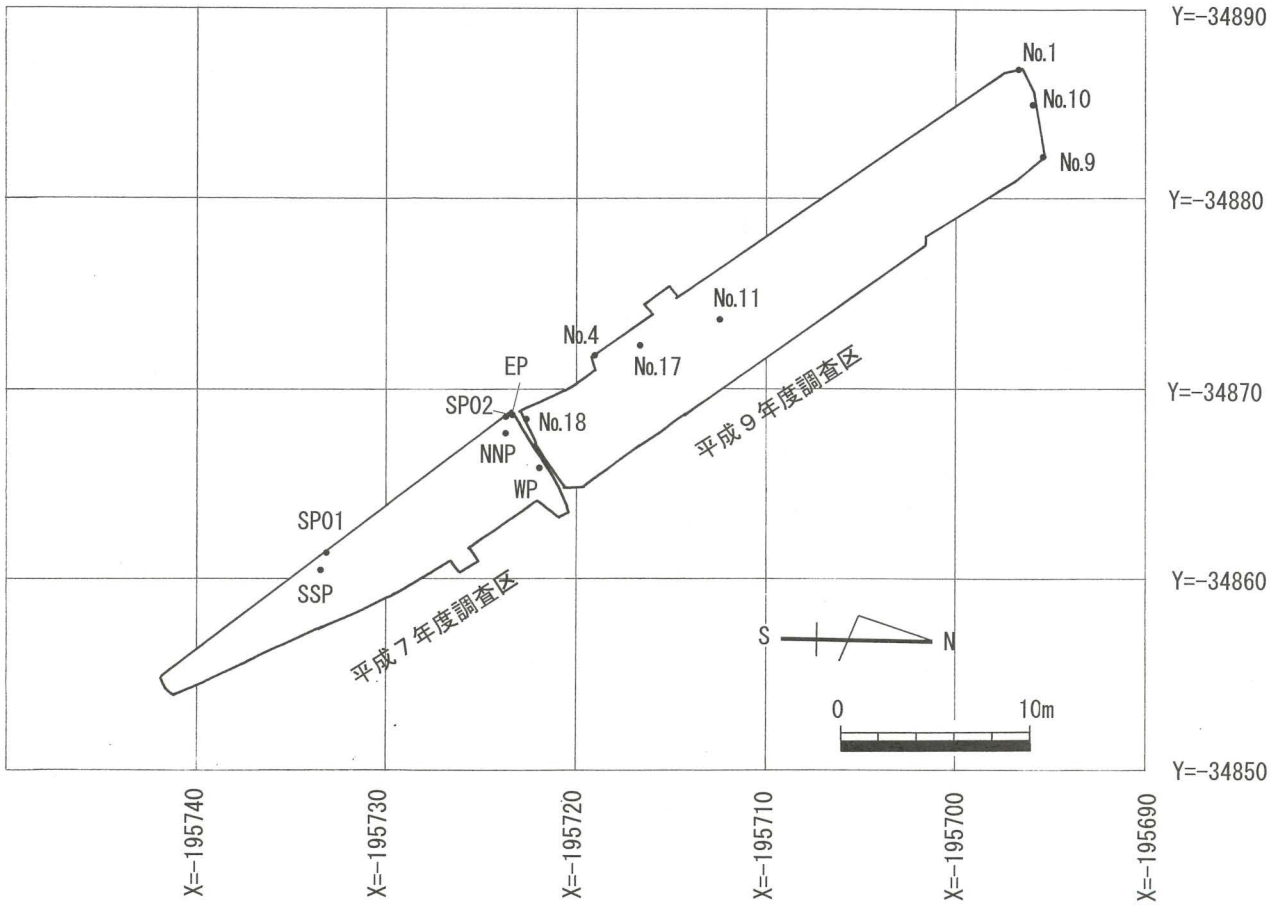


Fig.3　トレンチ配置図(S=1/400)

第２節　発掘調査区の層位

南迫田遺跡の発掘調査の結果，次のような層位を確認した。指宿市街地の基本層序ある橋牟礼川遺跡の基本層序と対比させながら説明する。

第１層：いわゆる耕作土である。近世陶磁器や軽石なとが混在している。

第２層：近代から現代の地層で，芋穴などがこの層から掘り込まれている。

第３層：黒色土壌で，近世陶磁器，輸入陶磁器などが出土している。橋牟礼川遺跡基本層序の第３層に対比できる。

第４層：黒褐色土壌で，近世陶磁器，輸入陶磁器，青磁，白磁等の遺物が出土している。また，平成９年度調査区北西部分において，鍛冶関連に伴うと考えられる碗形鉄滓，砥石，受熱した礫などが廃棄あるいは流れ込んだ状態で比較的まとまって出土している。４層は，若干の色調差からａ・ｂ・ｃ・ｄ層に細分が可能である。第４ａ層以外からはほとんど遺物は出土していない。遺物取上げ段階で４層と記載しているものは，第４ａ層出土のものである。橋牟礼川遺跡基本層序の第３～４層に対比が可能と考えられる。

第５層：開聞岳の火山性噴出物堆積層であり，通称「紫コラ」と呼称されているものである。『日本三代実録』の記載から，西暦874年３月25日に降下したものと判定されている。南迫田遺跡では，調査区の南西側半分確認され，東南側は中世以降の掘削により欠落している。橋牟礼川遺跡基本層序の第５層に対比できる。

第６層：橋牟礼川遺跡においては，奈良時代から平安時代の遺物包含層であるが，南迫田遺跡においては遺物は出土していない。橋牟礼川遺跡基本層序の第６層に対比できる。

第７層：開聞岳の火山性噴出物堆積層であり，通称「青コラ」と呼称されているものであり[1]，非常に固結している。７世紀４四半世紀以降に降下した火山性噴出物と比定されている。橋牟礼川遺跡基本層序の第７層に対する。第５層と同様で，調査区南西側のみで確認できる。

第８層：古墳時代の遺物包含層である。平成７年度調査区において，成川式土器を主体とする遺物が出土している。色調では明度差があり，ａ・ｂ層に細分が可能である。遺物は主に第８ａ層から出土している。橋牟川遺跡基本層序の第８～９層に対比する。

第９層：開聞岳の火山性噴出物堆積層であり，通称「暗紫コラ」と呼称されているものであり，スコリアが主に堆積している。弥生時代中期後半頃に噴出したと考えられている。堆積状況は良好で色調により上下２枚に細分が可能である。下層が上層と比較して黒味が強い。上層の上端部には，非常に固結した火山灰が認められるが，層厚は３㎝にも満たない。橋牟礼川遺跡基本層序の第11層に対比できる。

第10層：暗茶褐色土壌で，下部に移るにつれ明るさが強くなる。暗紫コラの直下層であることから，橋牟礼川遺跡基本層序の第12層に対比できると考えられるが，遺物は出土していない。

第11層：弥生時代中期後半の入来式土器を主体とする遺物包含層である。調査区全体で確認でき，当層まで掘削を行った範囲では散在の状態であるものの遺物が出土した。第12層上面において，当層を埋土のピットや土坑などの遺構が検出されている。これら遺構の掘り込み開始層位である。橋牟礼川遺跡基本層序の第12層に対比できる。なお，平成９年度は，弥生時代中期の遺物を第７層出土として取上げているが，南迫田遺跡の第11層に対比できるものである。

第12層：茶褐色土壌であり，明橙色のパミスが散在している。遺物は出土していない。

第13層：褐色土壌であり，小礫が混在している。南迫田遺跡においては，先行トレンチのみで確認された層序であり，２点の剥片が出土している。

文責　鎌田洋昭

引用文献
(1) 下山　覚「橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究第8号』人類史研究会　1992

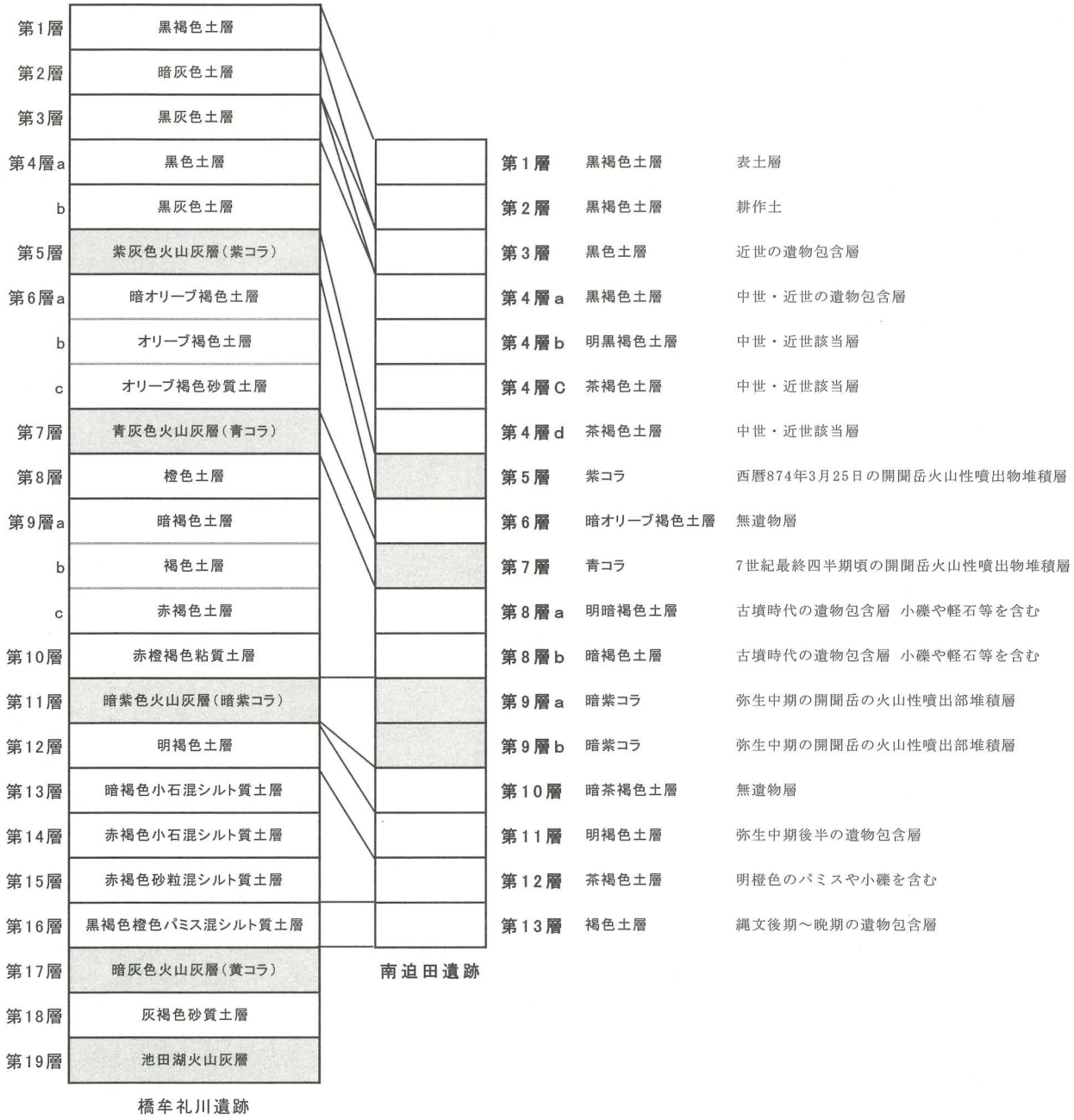


Fig.4　調査地点の層位模式柱状図

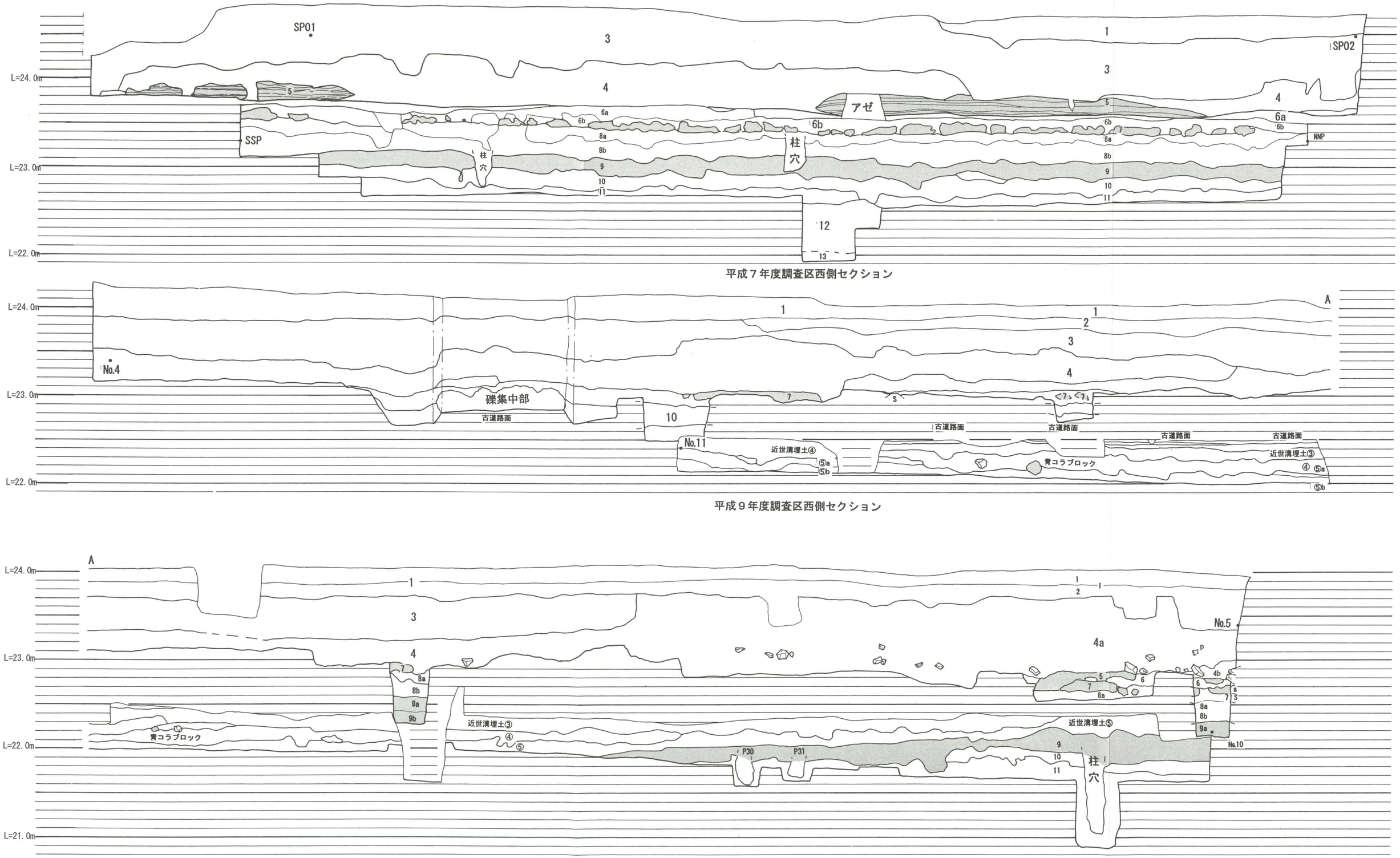


Fig.5　層位断面図①(S=1/40)

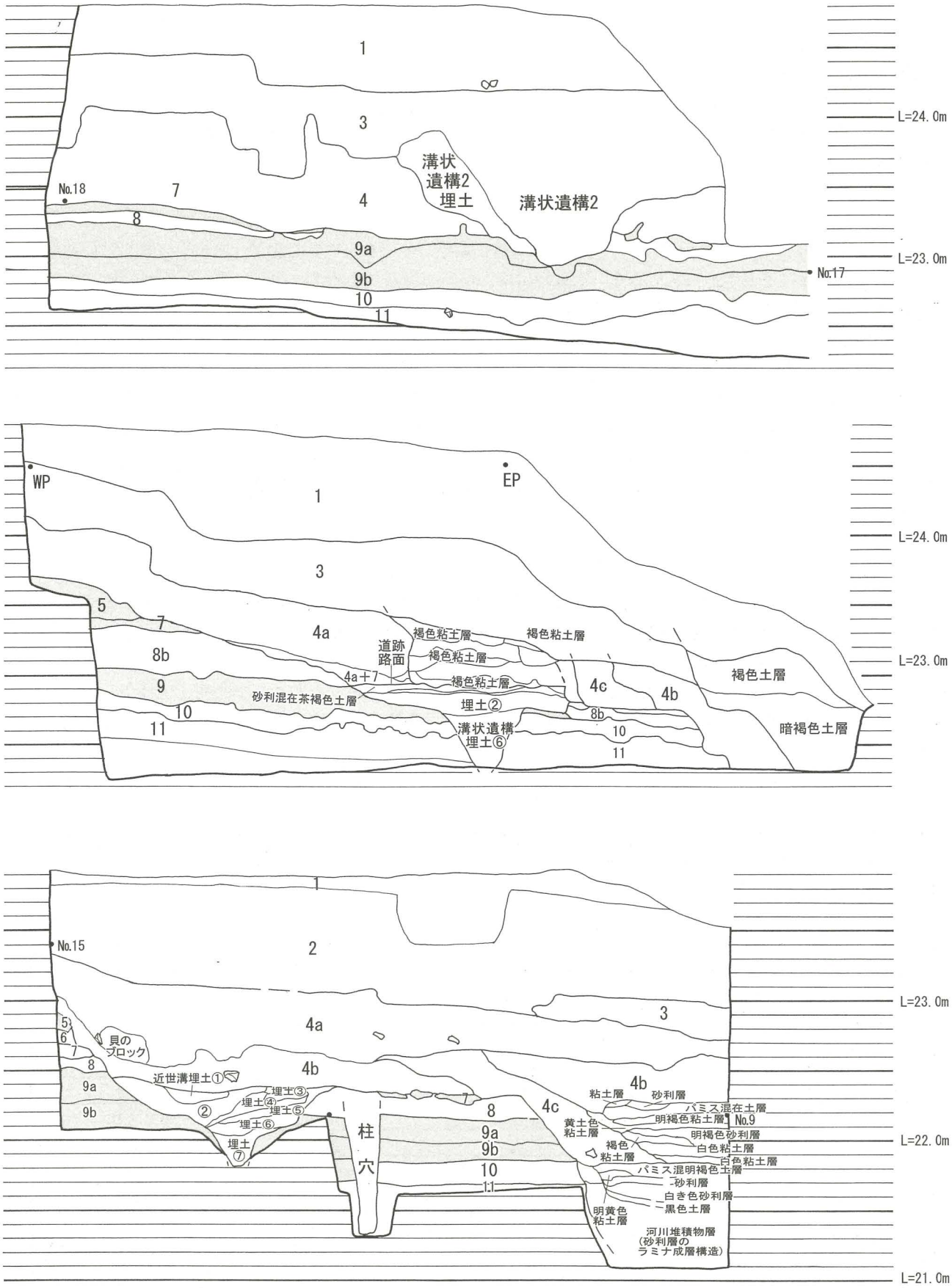


Fig.6　層位断面図②(S=1/40)

第３節　出土遺構と遺物

（1）　遺　　構

①　弥生時代の遺構

第11層は，弥生時代中期末に開聞岳から噴出した暗紫コラ（第９層）の下位層であり，包含している遺物から弥生時代中期の遺物包含層である。第12層上面において，第11層を基本的な埋土とする遺構を検出した。検出された遺構は，ピット51基，土坑１基である。各遺構ごとについて記す。

a．ピット（Fig７～14）

ピットは，Fig７で図示しているとおり，調査区全体に散在しているものの北側よりに多く分布している傾向にある。ピット法量は下表のとおりである。法量的には，検出面段階であるが，14×13.5cmから38×37cmの法量のものが多く，ほぼ円形を呈しているものが多い。検出面からピットの下場までの深さは，最深で109cmを測るが，概ね60cm前後と30cm前後にまとまるようである。検出したピットの大部分はプランを把握できなかったが，次のような１間×１間のプランを形成するもの，直線的に並ぶものが複数認められた。例えば，１間×１間のプランを形成するのは，ピット№27－28－29－31，ピット№36－40－41－42である。また，ピットが直線的に並ぶものとしては，ピット№９－10－15，ピット№11－12－13，ピット№20－24－48，ピット№43－34－39である。ピットの埋土には，上層の第9層である暗紫コラが主体的に入り込んでいるものや第11層が主体的に入り込んでいるものなど異なるものがある。このことから，ピットの埋没状況やピットを用いた構築物の時期差があることが考えられる。

b．土坑（Fig７・15）

土坑は，調査区中央部の東側よりで第12層上面で検出された。埋土は，第11層を主体としている。土坑の東側部分は，やや末細りしながら東壁へ続いている。そのため，土坑の全体的な法量は不明であるが，検出状況では，最大長１m77cm，最大幅１m40cmを測る。平面形態は，不整形な楕円形を呈しているものと考えられる。検出面から土坑の下場までの深さは，最深で22cmを測る。本来の掘削面が第11層であることを考慮した場合，30cmを上回る深さがあったと考えられる。土坑の周辺や床面部分でピットや焼土などは検出されなかった。土坑の性格については不明である。

文責　鎌田洋昭

No.	長軸(cm)	短軸(cm)	最深(cm)	No.	長軸(cm)	短軸(cm)	最深(cm)	No.	長軸(cm)	短軸(cm)	最深(cm)
1	14.5	13.5	30.5	18	35	32	46	35	32	13＋α	21
2	21.5	17	41	19	20.5	19.5	30	36	15.5	14.5	21.5
3	30.5	24	43	20	29.5	29	24	37	29	24	61
4	38	37	31.5	21	18	10＋α	80.5	38	15.5	14.5	29
5	25.5	24.5	43	22	24	19.8	11	39	17.5	16.5	26.5
6	19.5	18.5	43	23	19	10＋α	37	40	24	8＋α	74.5
7	22.5	19.5	57.5	24	26.5	23.5	16.5	41	20.5	20	30
8	27	26.5	60	25	21.5	16.5	33	42	27	15	28.5
9	16	15	21.5	26	14	13.5	18.5	43	26.5	26	46
10	16	15.5	34	27	23.5	21.5	24	44	19＋α	9＋α	60.5
11	19.2	8＋α	20	28	18.5	17	19.5	45	21	14＋α	78
12	28.5	17.3	67	29	23	22	14	46	26	25.5	64＋α
13	25	23.5	34.5	30	23.5	16	24	47	24	15	60.5
14	24	23.5	33	31	22	18.5	22	48	23	14＋α	62
15	19.5	18	33.5	32	17.5	15	33	49	21.5	10＋α	62
16	19	15.5	28	33	24＋α	8＋α	40	50	20	9＋α	55.5
17	33	23.5	34	34	18	16	57.5	51	—	17＋α	109

Tab.1　弥生時代ピット法量表

Fig.7　弥生時代ピット配置図（S=1/40）

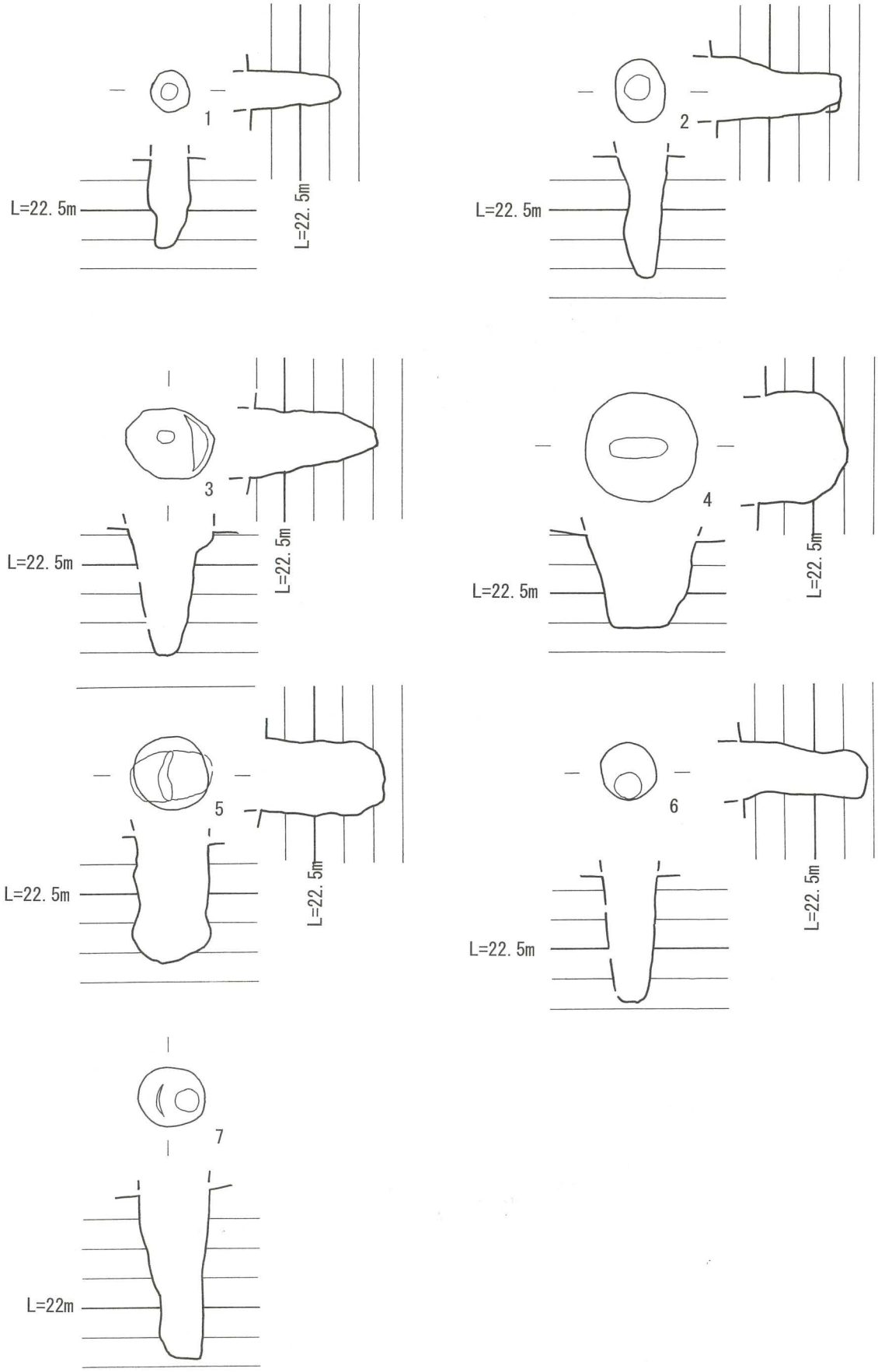


Fig.8　弥生時代ピット平面図・断面図①(S=1/20)

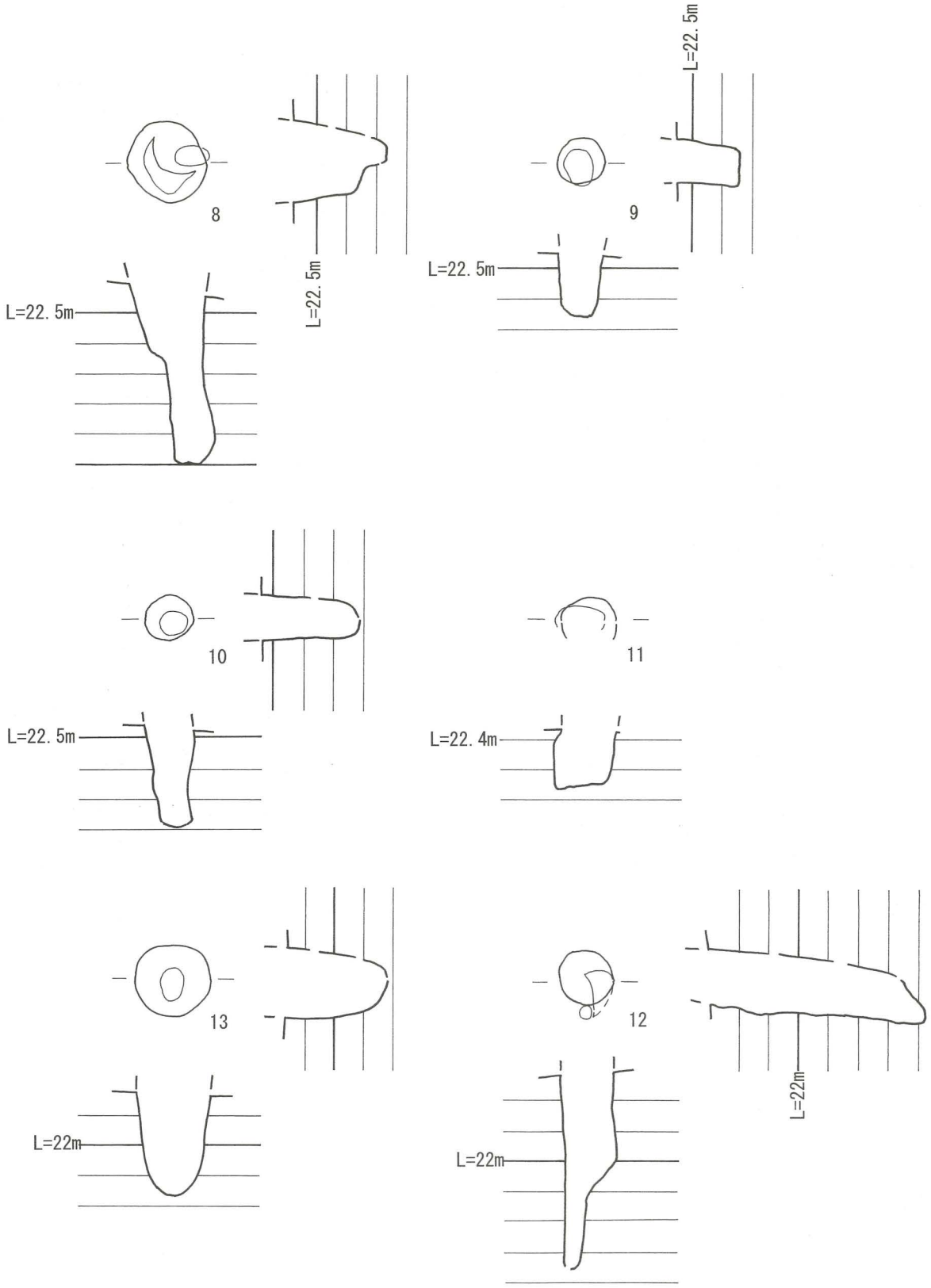


Fig.9　弥生時代ピット平面図・断面図②(S=1/20)

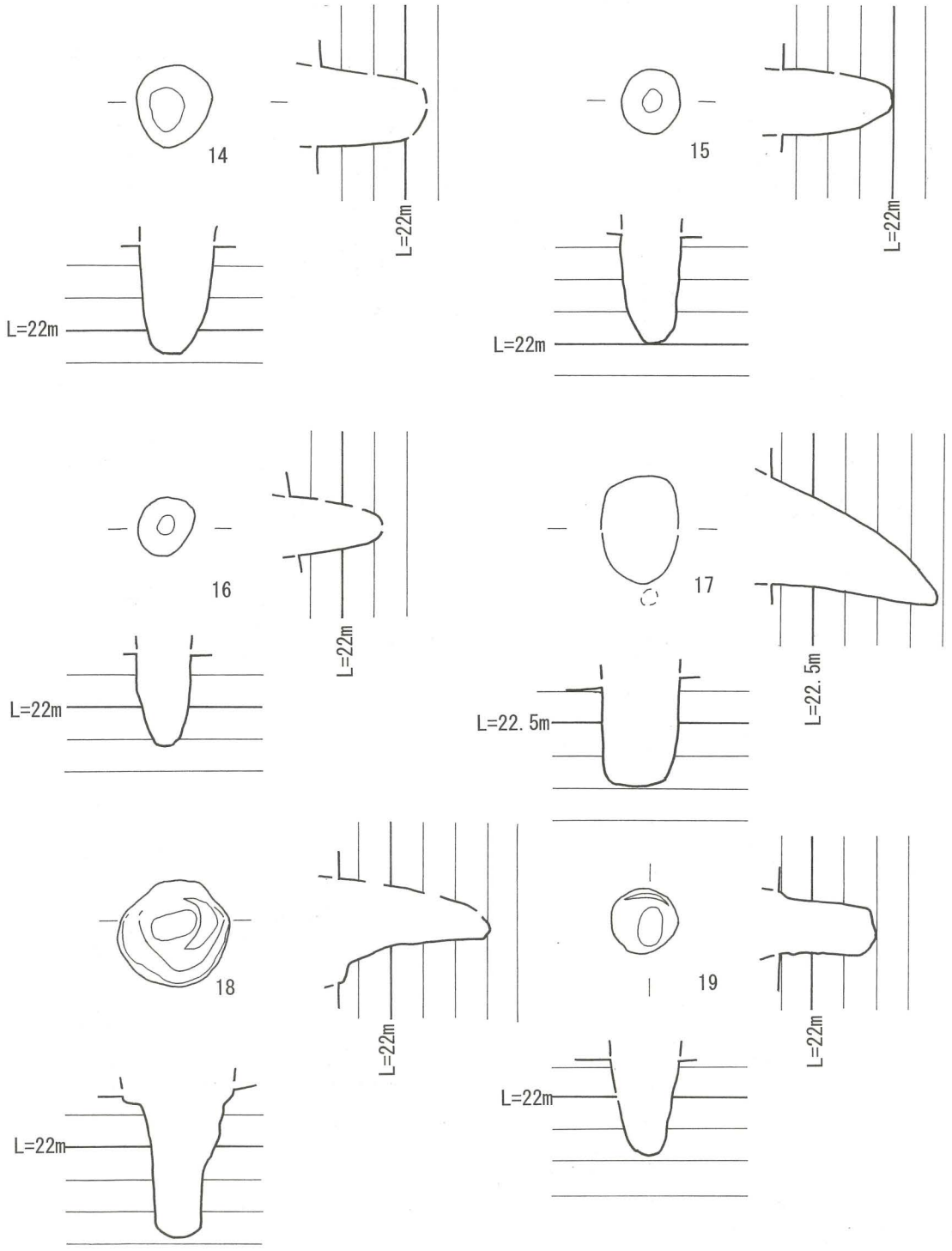


Fig.10　弥生時代ピット平面図・断面図③(S=1/20)

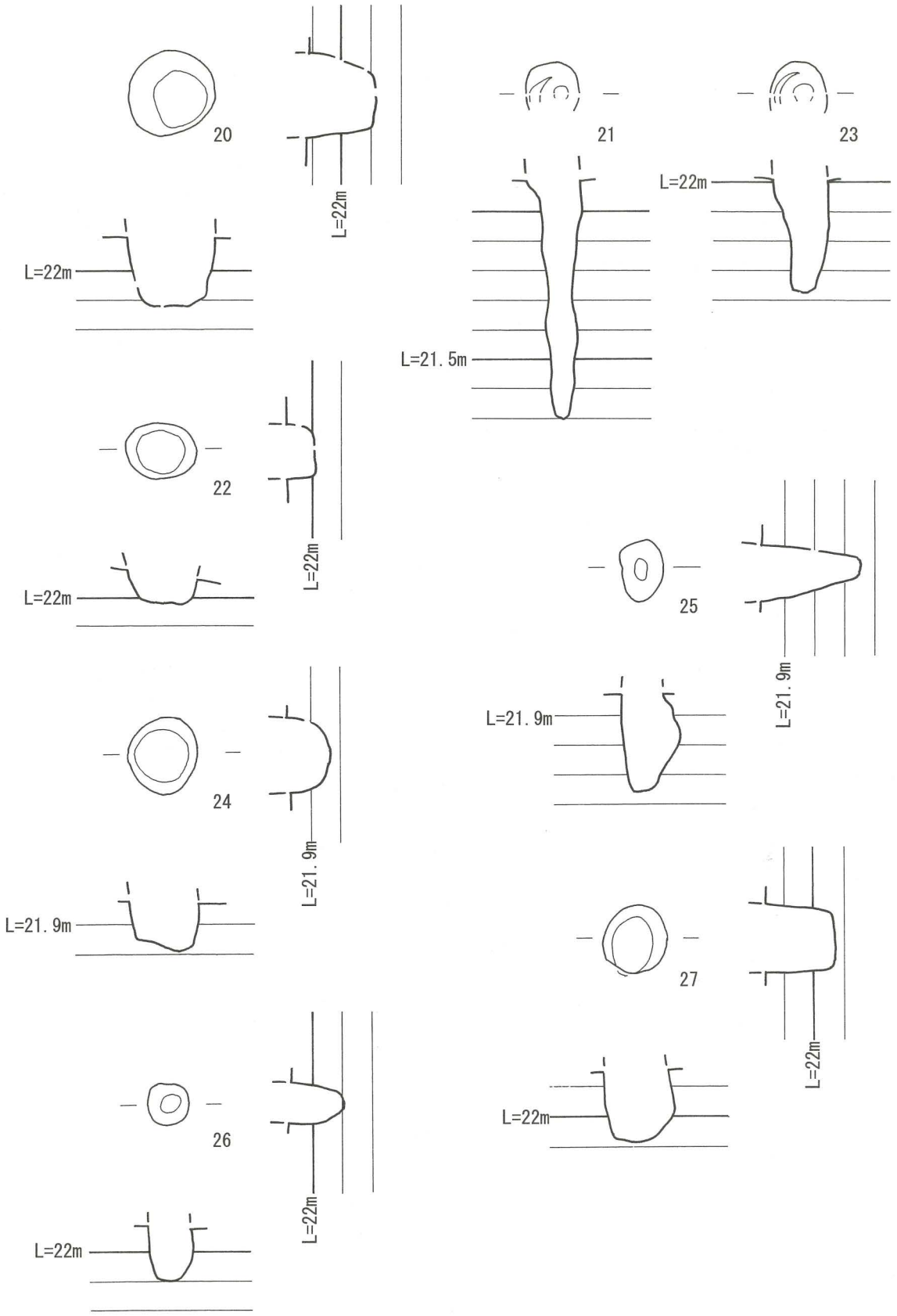


Fig.11　弥生時代ピット平面図・断面図④(S=1/20)

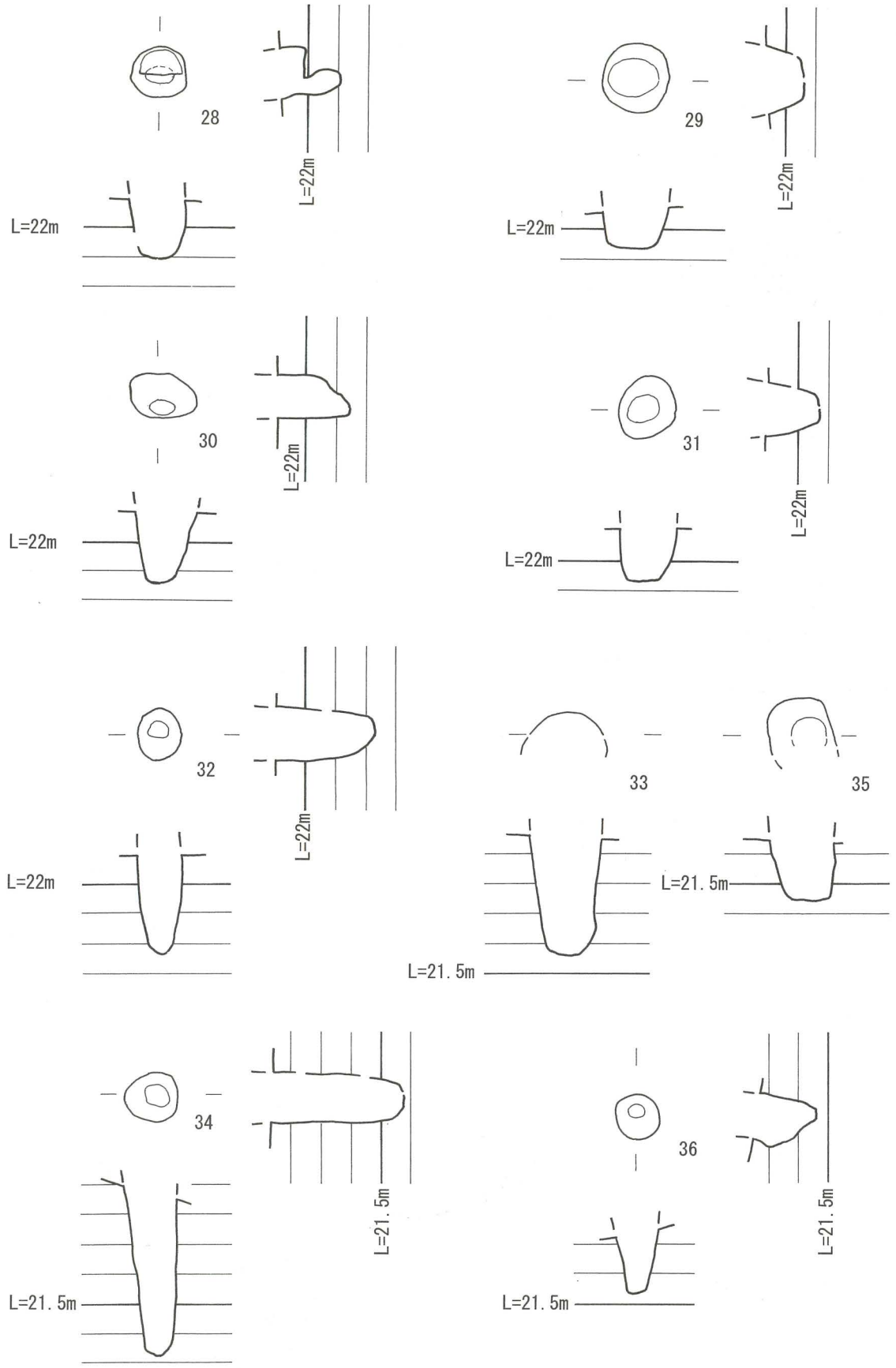


Fig.12　弥生時代ピット平面図・断面図⑤(S=1/20)

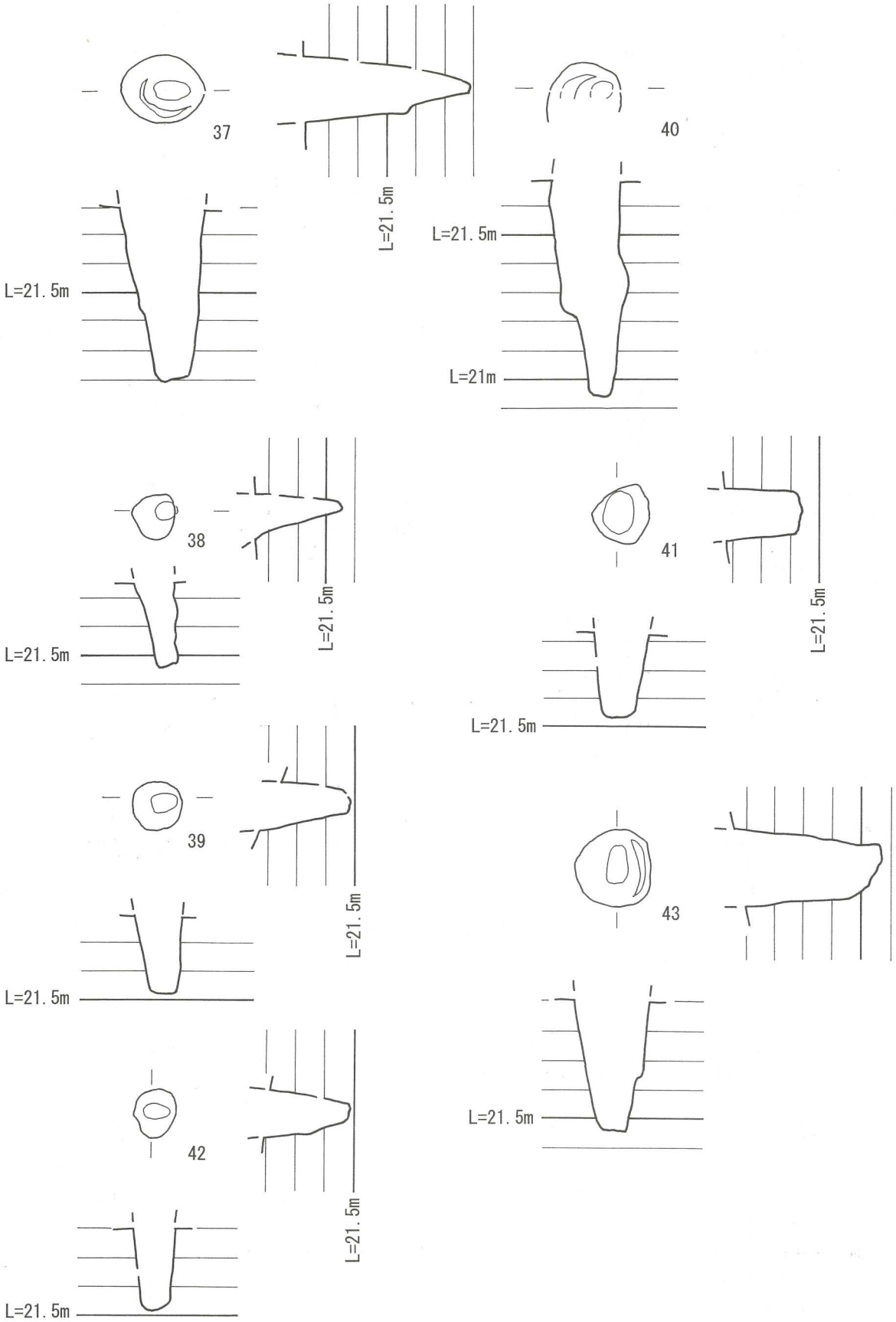


Fig.13　弥生時代ピット平面図・断面図⑥(S=1/20)

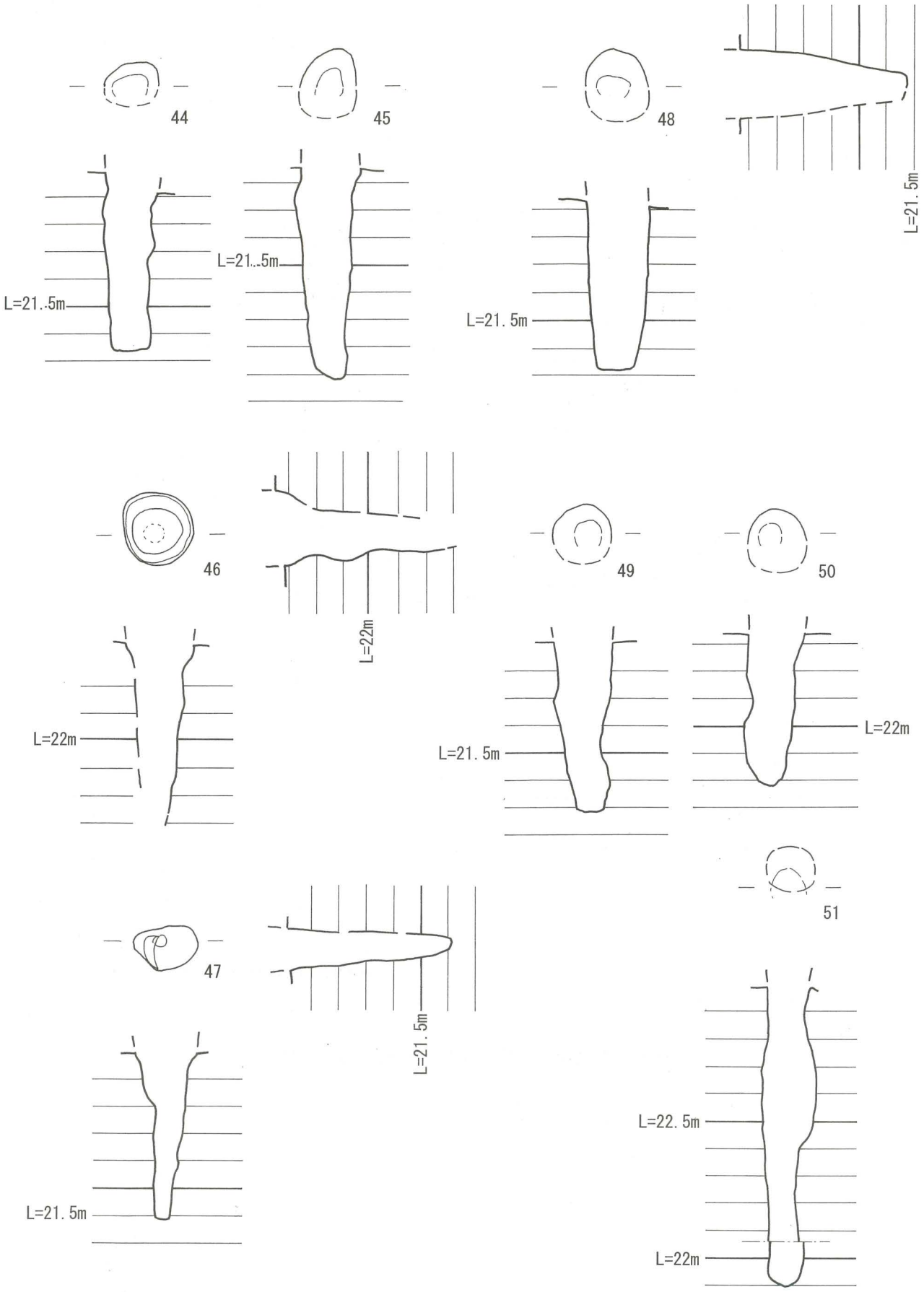


Fig.14　弥生時代ピット平面図・断面図⑦(S=1/20)

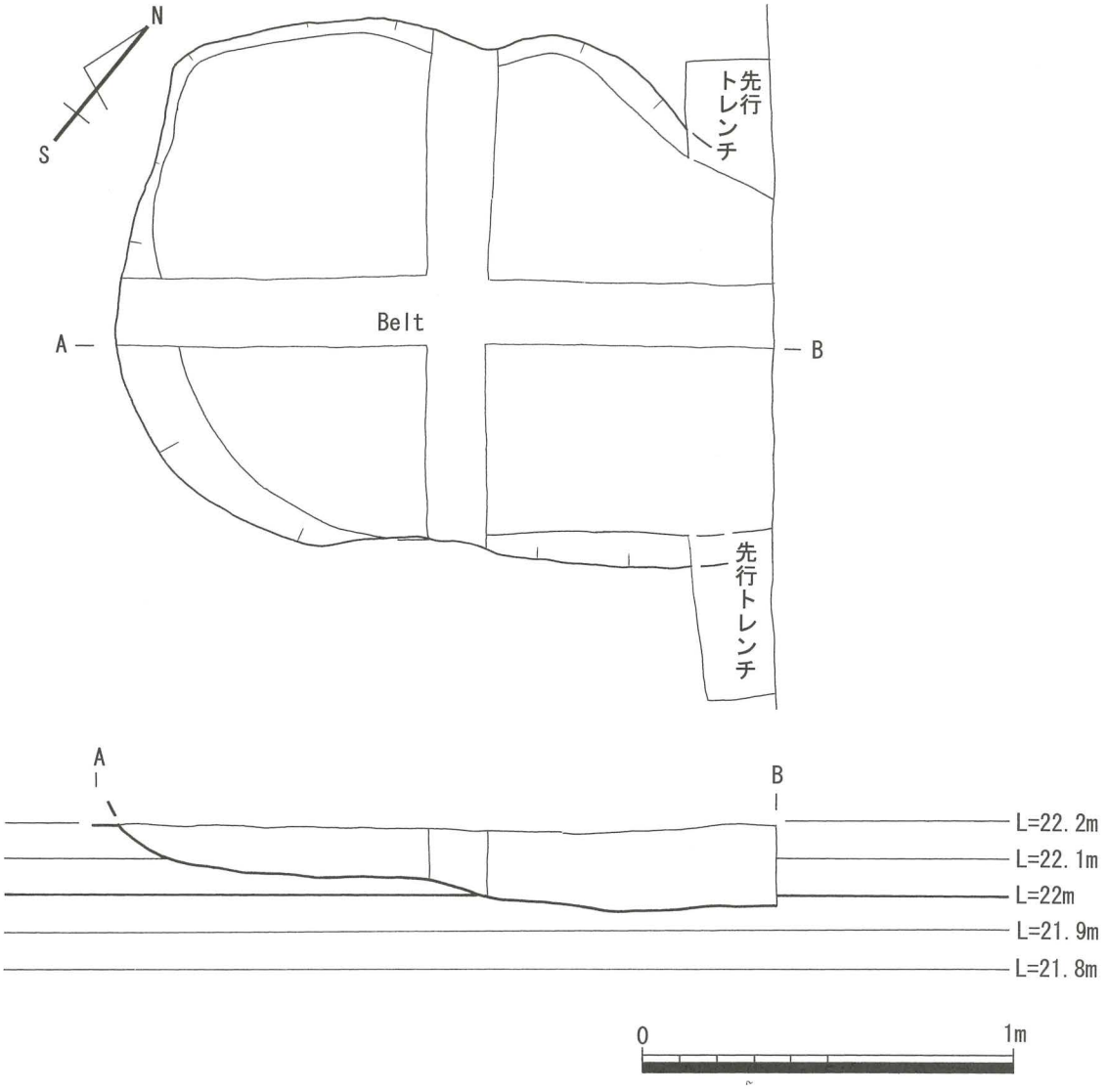
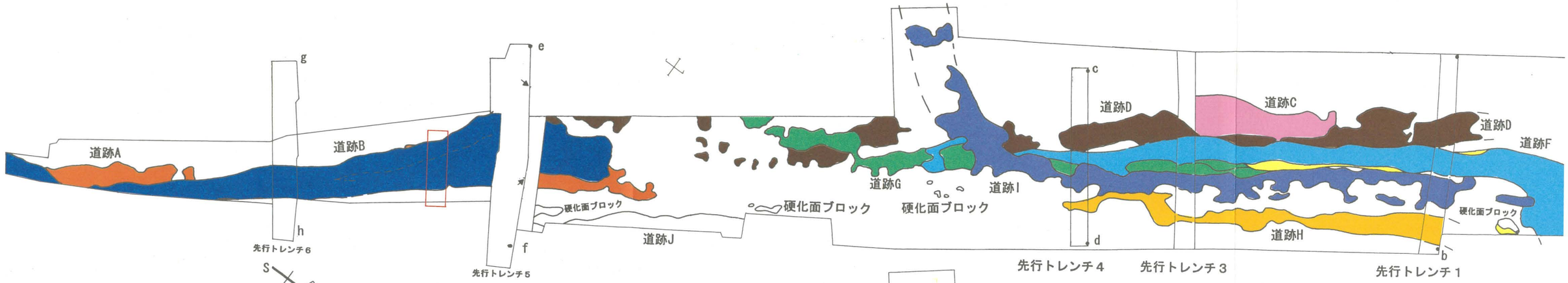
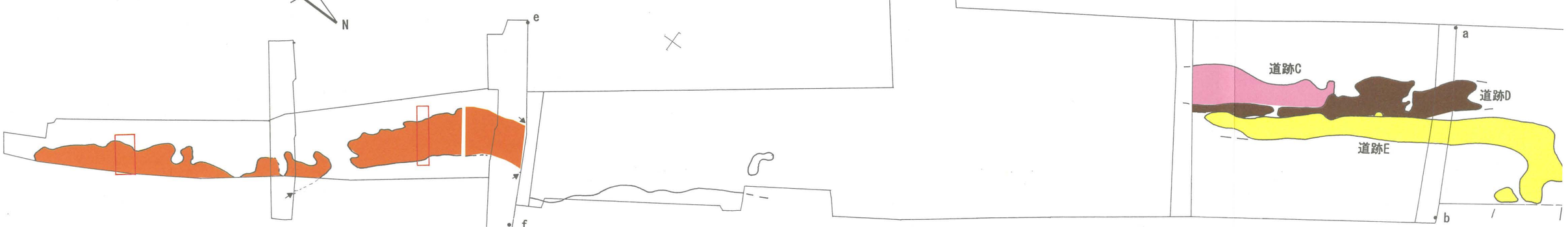
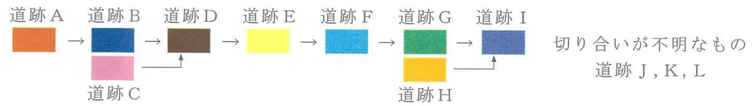


Fig.15　弥生時代土坑平面図・断面図(S=1/20)

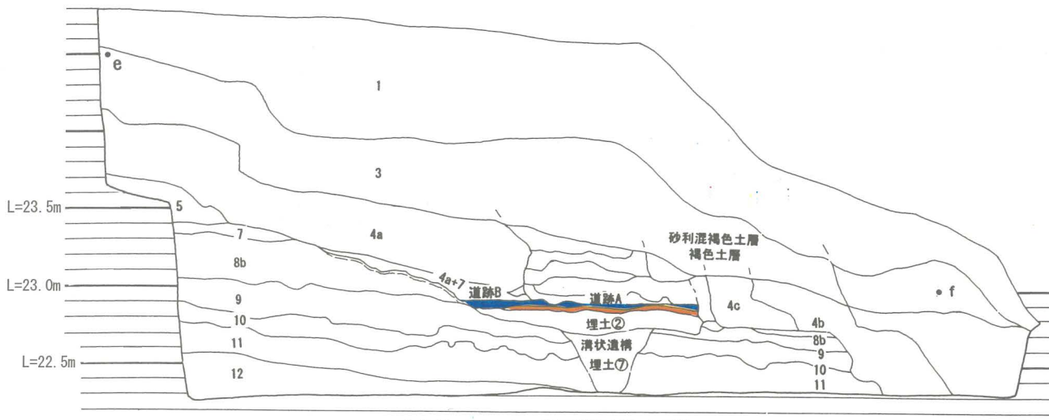




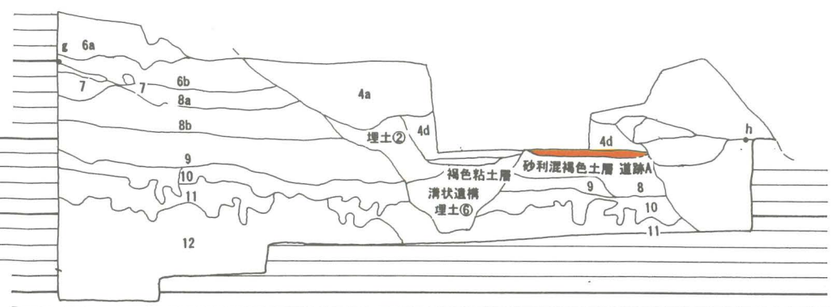
※ □ は、土壌硬度試験実施範囲
アルファベットは測定データ表のものと一致する。



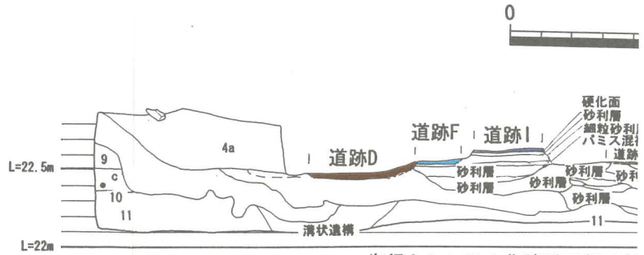
道跡の切り合い関係図



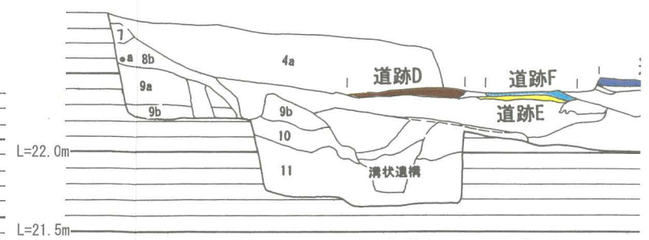
先行トレンチ５北側断面(S=1/40)



先行トレンチ６北側断面(S=1/40)



先行トレンチ４北壁断面(S=1/4



先行トレンチ１北壁断面

Fig.16　中世～近世道跡平面図・断面図(S=1/100・1/40)

② 中世～近世の遺構

a．道跡(Fig16・17)

南迫田遺跡において第4層は，西側から東側へ傾斜堆積している。調査区東側半分において第４層下部において，連続した硬化面を検出した。硬化面は，ある一定の幅を有しながら南北方向に延びており，硬化面の断面面観察によると，白色パミスか砂利を混在した褐色土壌で，平均で約20～50cmの層厚をもつ。このような検出状況と橋牟礼川遺跡での検出事例と照合した結果から道跡と認定した。調査区内で検出された道跡は，12条(道跡Ａ～道跡Ｌ)を数える。それらの内，道跡Ａ～道跡Ｉにおいては，平面・断面において下記のような切り合い関係が認められた。

道跡Ａ→道跡Ｂ→道跡Ｄ→道跡Ｅ→道跡Ｆ→道跡Ｇ→道跡Ｉ
　　道跡Ｃ－↑　　道跡Ｈ－↑

各道跡について，平面形状・断面観察について記す。

・道跡Ａ：調査区南側で検出され，最大幅約1.2m，長さ約15.4mである。硬化面の厚さは約３～５cmを測り，溝状遺構の埋土直上面を利用している。
・道跡Ｂ：調査区南側で検出され，最大幅約2.4m，長さ約15mである。北端で西側と北側に延びるものと分岐する。硬化面の厚さは２～５cmであり，５mm大の砂利や細かなパミスが混在している。
・道跡Ｃ：調査区中央で検出され，最大幅約1m，長さ3.55mである。硬化面の厚さは５cm前後で，砂利が混在している。
・道跡Ｄ：最大幅約90cm，長さ23.5mであり，北西方向へほぼ直線的に伸びる。硬化面の厚さは４～６cmを測る。
・道跡Ｅ：最大幅約1m，長さ98cmであり，北西に伸び北側端で東側へ曲がる。硬化面の厚さは３～４cmを測る。
・道跡Ｆ：最大幅約2.15m，長さ17mであり，幅広になりつつ東側へ曲がる。硬化面の厚さは２～５cmを測る。
・道跡Ｇ：最大幅約70cm，長さ13.3mであり，北西に伸び南端で南西側へ曲がる。
・道跡Ｈ：最大幅約65cm，長さ9.6mであり，北西方向にほぼ直線的に伸びる硬化面の厚さは１cmを測る。
・道跡Ｉ：最大幅約1.1cm，長さ17.5mであり，南西方向から伸び，調査区中央で北西方向へほぼ直線的に伸びる。硬化面の厚さは２cmを測る。
・道跡Ｊ：最大幅約50cm，長さ5.2mであり，北西方向へ延びている。南西方向以外は未検出で，幅・長さともまだ延びる可能性がある。硬化面の厚さは～cmを測る。
・道跡Ｋ：最大幅約50cm，長さ3.6mであり，北西方向へほぼ直線的に延びる。
・道跡Ｌ：最大幅約25cm，長さ1.25mであり，北西方向へほぼ直線的に延びる。

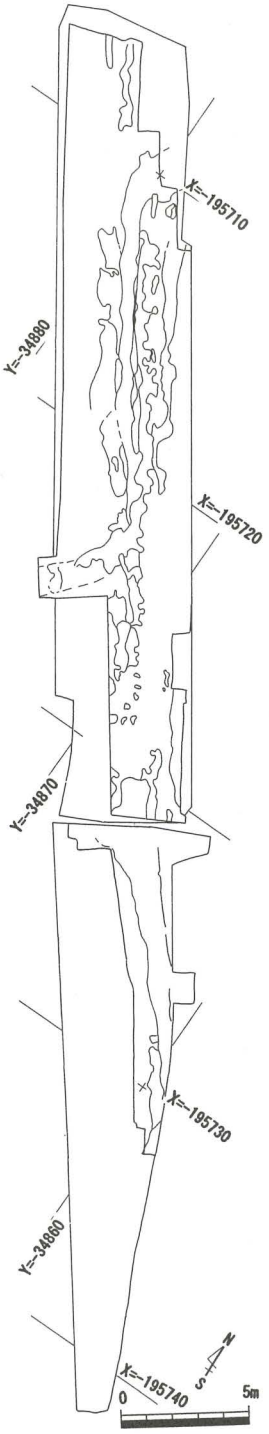


Fig17 中世～近世道跡検出状況図(S=1/300)

これら12条の道跡は，基本的には北西－南東方向へ直線的に延びており，道跡Ｉ・Ｇが南端で南西側へ曲がる。また，道跡Ｆ・Ｅが北端で東側へ曲がる。この地域の中世から近世における道の利用状況とその変遷を追うことができる遺構群と考えられる。

先行トレンチ１北壁の観察によると，道跡Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ・Ｉの硬化面のレベル的な差異が認められる。このことから，複数時期の道跡が切り合っていることが看取できる。道跡Ｅと道跡Ｆの硬化面の厚さはそれぞれ約30cmを測るが，両者には間層は認められない。それに対して，先行トレンチ４北壁の道跡Ｉと道跡Ｆの間には砂層が堆積している。なお，同面の観察によると，道跡Ｆの硬化面は，道跡Ｉの下部においても連続して認められることから，道跡Fの路面幅は広がる可能性がある。

道跡の硬化面が認められる層は，砂利やパミスなどが混在し，かつ，砂層が下層に堆積していることから，意

図的な土壌の持込みなどによる構築が行なわれたのか，あるいは，流水などにより路面使用中の自然堆積によるものかは峻別がつかない。

これら12条の道は，第4層下部に硬化面が認められるとこから，中世から近世の時期に帰属するものと考えられる。

道跡ＡとＢについて，硬化面の土壌硬度試験を実施した。その結果については下表にまとめた。なお，下表の網かけ部分は硬化面範囲であり，それ以外は，比較資料のための非硬化面である。

a　　b

4.35	5.42	7.9	10.01	8.54	10.85	37.73	33.65	18.29	30.14	18.29	20.09	20.09	4.35	1.78
4.68	4.35	8.54	5.42	8.54	4.04	20.09	37.73	30.14	22.13	30.14	24.45	27.1	11.79	1.4
3.76	4.35	7.9	6.78	8.54	10.01	11.79	18.29	20.09	16.68	33.65	16.68	30.14	13.97	1.78

c　6.60　21.19　1.65　d

非硬化面　硬化面　非硬化面

Tab.2　道跡Ａ硬化面ａ－ｄ土壌硬度測定データ表

e　　f

7.32	5.03	5.42	4.35	15.25	9.24	2.6	50.03	5.03	20.09
7.9	5.03	4.04	9.24	15.25	20.09	13.97	4.35	4.68	6.29
7.32	6.29	11.79	27.1	22.13	22.13	12.82	11.79	5.84	12.82
9.24	7.32	5.03	18.29	24.45	22.13	15.25	6.78	6.29	16.68
7.9	10.01	7.9	24.45	12.85	11.79	12.82	7.32	16.68	20.09

g　7.12　15.23　h

非硬化面　硬化面

Tab.3　道跡Ａ硬化面ｅ－ｈ土壌硬度測定データ表

i　　j

16.23	16.13	15.90	18.33	18.97	18.10	21.70	22.10	17.23	22.83	25.90	26.27	25.13	25.57	19.67
14.67	16.30	15.43	18.50	17.73	20.33	20.90	20.07	19.30	20.23	25.07	26.13	24.63	27.83	23.47
15.33	15.33	16.17	17.03	15.27	18.40	17.90	15.50	20.67	22.47	24.83	25.07	26.33	22.77	25.47
14.93	14.63	14.83	15.57	15.67	18.17	19.10	17.23	19.63	20.57	22.17	24.13	28.97	25.00	17.33
17.23	15.47	14.67	18.43	17.00	17.17	19.00	20.90	20.73	26.60	23.50	22.43	24.80	26.40	24.73

k　15.54　20.80　l

非硬化面　硬化面　硬化面？

Tab.4　道跡Ｂ硬化面ｉ－ｌ土壌硬度測定データ表

その結果，道跡Ａのａ－ｂ－ｃ－ｄでは，硬化面の平均支持強度は21.19kg/㎠の硬度を有しており，非硬化面の平均支持強度の6.60kg/㎠，1.65kg/㎠と比較し高いことが判った。

道跡Ａのｅ－ｆ－ｇ－ｈでは，硬化面の平均支持強度は15.23kg/㎠の硬度を有しており，非硬化面の平均支持強度の7.12kg/㎠と比較して倍以上の硬度差があることが判った。

また，道跡Ｂｉ－ｊ－ｋ－ｌでは，硬化面の平均支持強度は20.80kg/㎠の硬度を有しており，非硬化面の平均支持強度の15.54kg/㎠と比較して高いことが判った。また、道跡Ｂの東側は段があったが、ここの数値も硬化面とほぼ同じことから、この部分も道跡の可能性が考えられる。

このことから，道跡として認定した硬化面の平均支持強度は，道跡外である非硬化面のものの平均値より高く，1.3倍から12.8倍の硬度差がある。このことから，客観的な硬度数値から判断しても硬化面が周辺より硬く引き締まっていることが看取できよう。

文責　渡部徹也

ｂ．溝状遺構（Fig.18・６）

第４層下部付近で検出された道跡を平面的に掘り下げた段階の第８ａ層あるいは第11層上面において，溝状遺構を２条検出し，溝状遺構１・２と仮称した。溝状遺構１は，平成７年度調査区から平成９年度調査区で連続して検出されたもので，平成９年度調査区中央付近で一部断絶している。溝上遺構２は，平成９年度調査区西壁の観察によって確認されたもので，平面的には検出されなかったものの，溝状遺構と認定した溝状遺構１・２とも，空間の境界的役割があるものと考えられる。

溝状遺構１

平成７年度調査区では，主に先行トレンチ５・６の北壁で認識され北西－南東方向にほぼ直線的に伸びる状態で平面的に検出された。平成９年度の調査区では，平成７年度調査区からの続きと考えられ溝状遺構が検出された。検出された溝状遺構の平面形態は一部断絶しているものの，平成７年度調査区から北西方向へ直線的に延び，ややゆるやかな円弧状を呈しながら西側へ曲がり再び北西方向へ直線的に延びている。調査区全体としては，平面的に約26.3m（13.8m・12.5m）検出でき，調査区北壁（ａ－ｂ）で溝状遺構の断面が観察されることから，本来は調査区全体を縦断しているものと考えられる。溝状遺構の検出段階の幅は，約15～65cmを測ることから，本来の使用時の溝状遺構は幅広いものであった予想される。調査区北壁の観察によるとおよそ1.9mを測る。

溝状遺構の本来の断面形態を調査区北壁・先行トレンチ１・５・６で確認すると次のように推測できる。Fig.18下に，溝状遺構１の掘り込みと考えられるラインを太線で図示している。これによると，溝状遺構１が構築されたのは第４層堆積以前であり，西側に土手を造りながら掘り込まれていることが確認できる。調査区北壁の観察によると，第５層や第７層の開聞岳の噴出物堆積層を削り取る形で掘り込まれている。溝状遺構１は１段あるいは２段の段を有しており，下場まで0.8～1.3mの高低差が認められる。下場の断面形状は，ほぼ平坦でコの字状を呈している。下場面には硬化面と考えられるものは認識できなかった。

溝状遺構の下場まで完掘している先行トレンチ１・５によると，次のような下場のレベル差が認められる。先行トレンチ５では22.38m，先行トレンチ１では21.75mを測ることから，溝状遺構の下場は，南東方向から北西方向に傾斜していることが考えられる。溝状遺構の埋土は，地点によって異なるものの２枚から６枚の埋土層によって埋没している。

溝状遺構２（Fig.６上段）

平成９年度調査区の西壁で断面観察で確認され，平面的には検出できなかった。Fig.６上段で確認できるとおり，溝状遺構２の掘り込みは，第３層中から第４層を掘り抜き第７層上部まで達している。溝状遺構２の推定幅は，第４層上面ににおいて約1.7mを測る。また，第４層下部から溝状遺構２の下場までの深さは，約75cmを測る。溝状遺構２の埋土は，第３層が主体的に入り込んでおり，一部第３層と第４層が混在した土壌が南壁側に堆積している。断面観察による検出のため，溝状遺構２の延びる方向については不明である。埋土が第３層が主な埋土であることから，近世に帰属するものと考えられる。

溝状遺構１について，第４ｄ層が堆積する以前に埋没していることから，中世に帰属するものと考えられる。また，遺構の性格については，中世居館の区割り溝として考えることも可能であり[1]，溝遺構の西側部分の調査

が望まれる。

c．礫分布（Fig. 19）

平成７年度調査区北側と平成９年度調査区東側の第４層中で，礫が比較的まとまっている範囲を２ヶ所確認できた。それぞれ，礫分布１・２と仮称する。

礫分布１（ｅ－ｆ）

礫分布１は，長さ5.3m，幅2.2mの範囲で確認された。拳大から人頭大の礫が集中しており，中に凹石や被熱した礫が認められる。礫を取り上げた直後に先述した道跡Ｂが検出された。近世陶磁器類も認められる。このことから，推測の域をでないが，道跡Ｂが利用されなくなった後に，意図的に投げ捨てられた，あるいは流れ込んだものと考えられる。

礫分布２（ａ－ｂ・ｃ－ｄ）

礫分布２は，長さ7.2m，幅0.7mの範囲で確認された。構成する礫は拳大のものが主体を占めている。使用された石器類は出土していない。礫を取り上げた直後に，道跡Ｊを確認した。先述した礫分布１と同様なことが予想される。

平成９年度調査区の西側において，第４層中を掘り下げていく過程で，Pl. ３中段・下段で看取できるような，拳大から人頭大以上の礫（被熱した礫もある）がまとまって出土した。その中に，鍛冶関連遺物である鞴の羽口や椀形鍛冶滓や砥石・凹石や陶磁器類が散見できた。出土状況によると，土手のような傾斜面に廃棄あるいは流れ込んでいる状態であった。その礫などのまとまりの南端付近でPl. ３下段で看取できるように，人頭大の礫を並べた配石と考えられる部分を検出した。鍛冶関連施設の境界の可能性があると考えられたため[2]，その部分において調査区の西側へ約1mほど拡張した。その結果，北側で確認されたような礫のまとまりを確認することができた（Pl. ３下段左写真）。礫は，先記した部分と同じように西側から東側へ傾斜していた。礫を取上げた後の状況が，Pl. ３下段右写真である。

このような調査成果から，平成９年度調査区の西側には，鍛冶施設があると予想できる。また，後で記すが，第４層から出土した鞴の羽口の破損品は，その風通孔の直径の大きさから，中世後半から近世初期に製作されたものと考えられる[3]ことから，県内でほとんど事例のない中世後半から近世初期の鍛冶施設を検出できる可能性が考えられる。

文責　鎌田洋昭

註
(1), (2)　下山氏のご教示による
(3)　上田　耕氏のご教示による

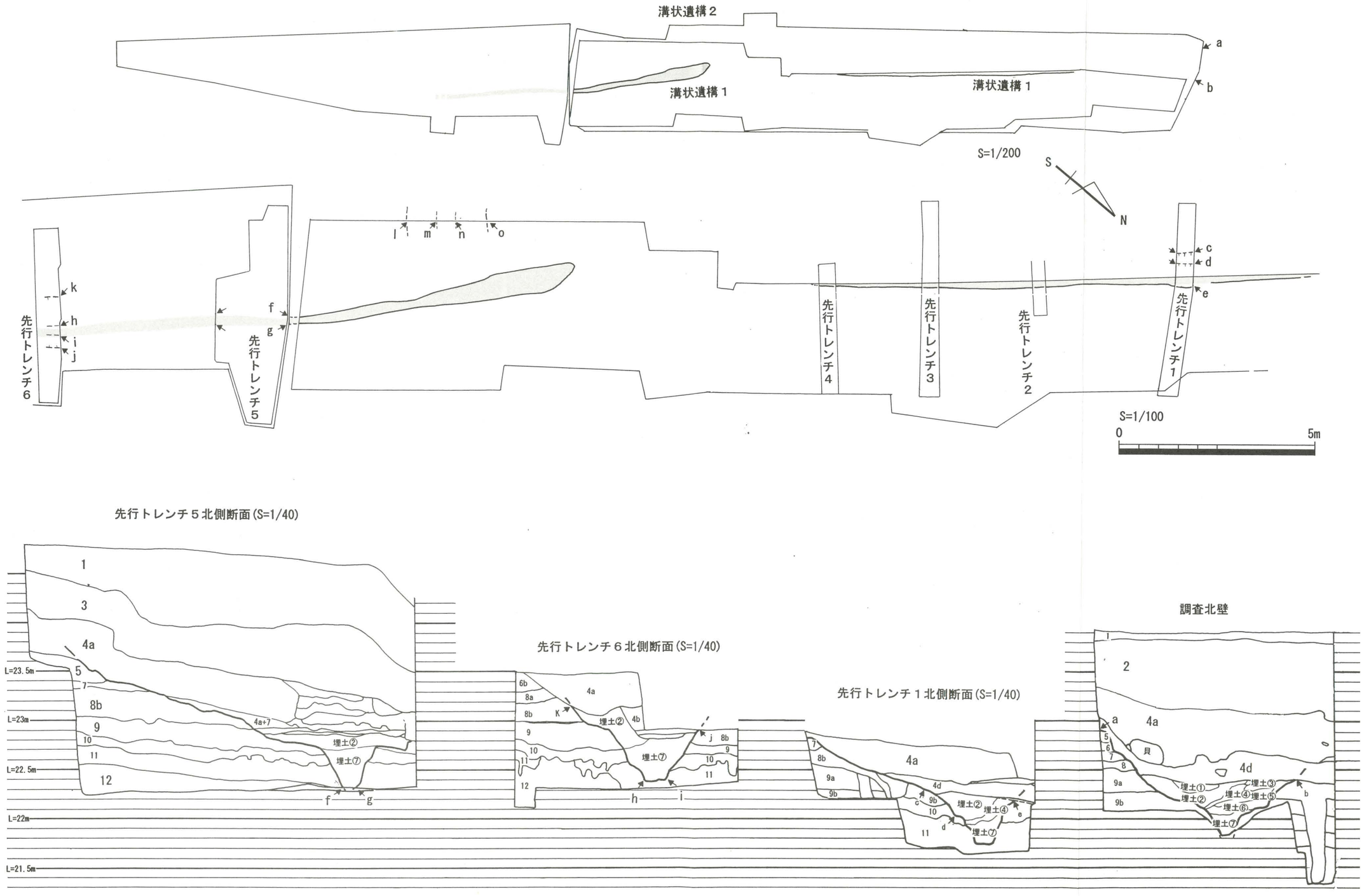


Fig.18　近世溝状遺構平面図・断面図(S=1/100・1/40)

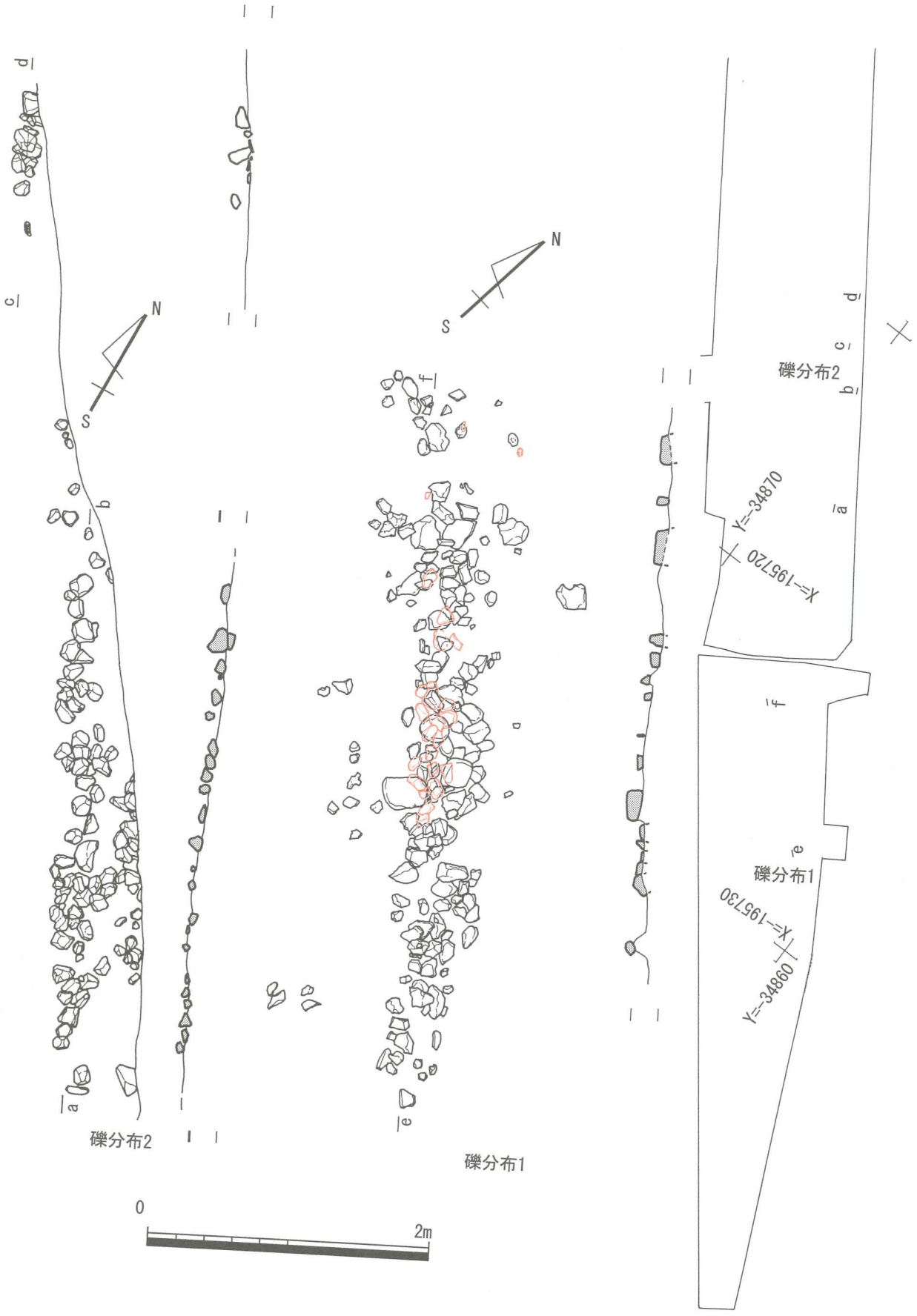


Fig.19　近世礫分布状況(S=1/200，1/40)

Fig.20　第11，13層遺物分布図(S=1/150)

Fig.21　第 4 層遺物分布図(S=1/150)

Fig.22　第３層遺物分分布図(S=1/150)

（２） 遺　　物

ａ．第11・13層出土遺物

平成７年度調査区における第11層の掘り下げ作業は，西壁側に段を設定したことと，調査区東南半分の第４層下部で検出された道跡を平面的に残していた関係で，面積的には約33㎡のみで行なった。平成９年度調査区においては，北西半分で近世の鍛冶関連遺物や礫などがまとまって出土した関係でその部分を残して，東側に隣接する市道との土手部分を除いた調査区東南半分のみの第11層を掘り下げた。面積的には，約130㎡である。

今回，記載する第11層出土遺物は，平成７・９年度の調査区での合計約166㎡から出土したものである。取上げ層位は，平成７年度は第11層としていたが，平成９年度は，平成７年度と異なる仮層位名称を使っていたため第７層出土遺物として取上げている。しかし，平成９年度に用いた第７層は，本来的には南迫田遺跡基本層序第11層と同一層であることから，第11層出土遺物として取り扱う。

平成７年度，及び平成９年度の調査を合わせて，第11層からは，合計226点の遺物が出土した。分布状況はFig. 20に示すとおり，第11層を面的に掘り下げた調査区全域に散在する状況である。平成９年度調査区北側よりと平成７年度中央部において，やや遺物がまとまっている傾向が看取できる。また，後述するNo. ３，４の甕形土器は，それぞれまとまって出土した一括資料であるが，遺構に伴うものではなかった。また，それぞれ一個体の半分であるものの，別個体であった。

取上げた遺物のうち，胴部破片や細片を除き，25点を図化し，このうち，No. ２のみが第13層出土の遺物で，その他は第11層出土の遺物である。

第13層は，調査区全体で堀下げたものではなく，先行トレンチのみで確認された層である。出土遺物は，平成７年度調査区の先行トレンチからの出土の２点のみである。

Fig. 23の１は，深鉢の胴部の破片である。胴部外面には，横方向に連続する短い沈線が２条以上施され，その下位に縦方向の沈線が，さらにその下位には綾杉文状の沈線が施されている。曽畑式土器の範疇に含まれるものと考えられる。

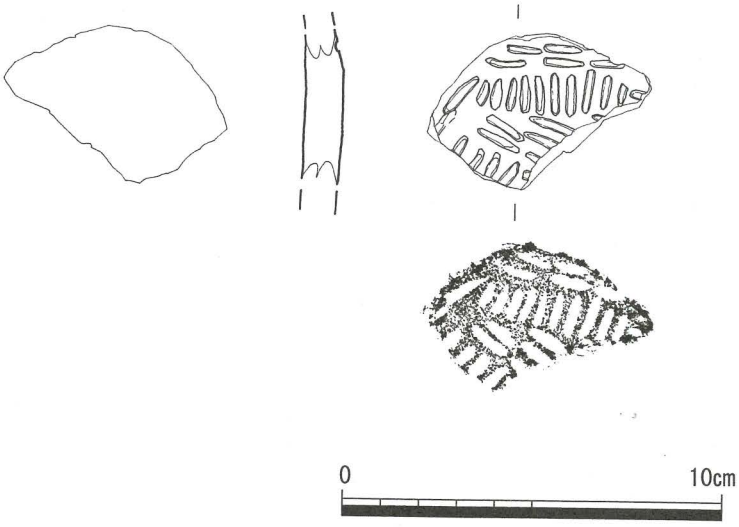


Fig.23　第11層出土遺物①（S=1/2）

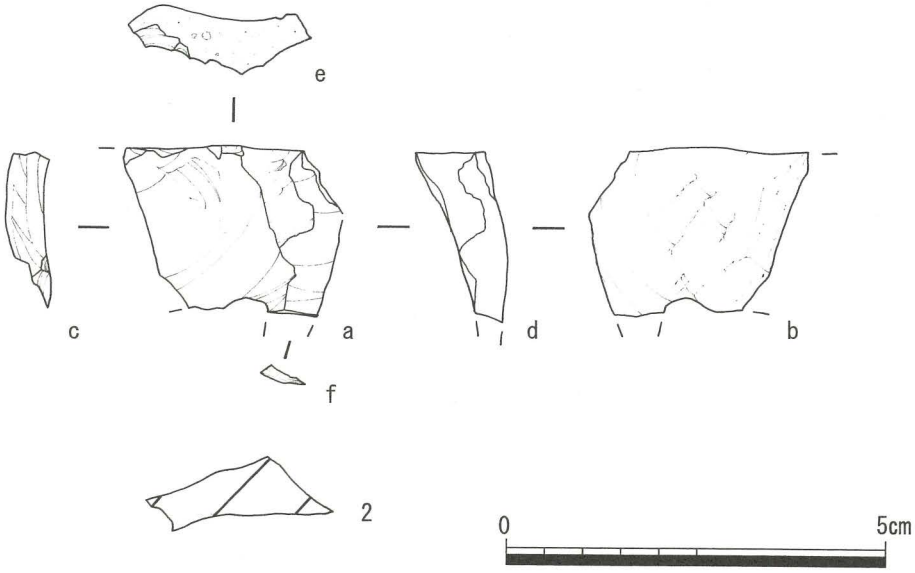


Fig.24　第13層出土遺物（S=1/1）

Fig.24の２は，上牛鼻産の黒曜石を用いた不定形剥片である。打面は自然面打面であり，頭部・打面調整はわずかに認められる。剥片のａ面左側部と下部は欠損している。その欠損面は，ａ面側加撃方向である。ａ面の剥離面と主要剥離面の加撃方向はほぼ同一方向であることから，自然面の単一打面を保持している石核より，単一方向に連続的に剥離されたものと考えられる。使用痕や二次加工と考えられる微細な剥離痕は認められない。

Fig.25の３は，甕形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は，35.9cmを計る。口縁部の断面形態は，端部が若干窪む長方形を呈す。口縁部は，ほぼ水平に仕上げられている。口縁部内面には稜をもつ。胴部には，４条の断面三角形の突帯がめぐる。また，器面外面には一部煤の付着が看取されるほか，器面内面には，ユビオサエの痕跡が残る。

Fig.25の４は，甕形土器の口縁部～胴部の破片である。復元口径は，33cmを計る。口縁部の断面形態は，端部が若干窪む三角形状を呈す。口縁部は，ほぼ水平に仕上げられており，口縁部上面は丸みを帯びる。口縁部内面には稜をもつ。胴部には，３条の断面三角形の突帯がめぐる。また，器面内面には，ユビオサエの痕跡が残る。

Fig.25の３・４の出土状況は，ほぼ上下に重なって出土している（Pl.29・30を参照）。詳細を記すと，No.３がほぼ半分に割れており，№.３の右半分の直上に№.４が重なっている。No.３・No.４とも，外面を地に接する状態で出土している。また，No.４から北側へ約30cm離れた地点から，第26図23の甕形土器の底部が出土している。

Fig.25の５は，甕形土器の底部の破片である。底径は，9.2cmを計る。底部は，中央付近がわずかに上げ底となる。外面には，ユビオサエの痕跡が残る。

Fig.25の６は，甕形土器の口縁部～胴部突帯部の破片である。口縁部の断面形態は，上面が丸みを帯びた三角形を呈し，端部が若干窪む。口縁部は，わずかに外下がりに仕上げられている。胴部に，３条の三角突帯が確認できる。器面の内面にユビオサエの痕跡が残る。

Fig.25の７は，甕形土器の口縁部～胴部突帯部の破片である。口縁部の断面形態は，上面が丸みを帯びた三角形を呈し，端部が若干窪む。口縁部は，わずかに外下がりに仕上げられている。残存する胴部に，２条の三角突帯が確認できる。器面の内面にユビオサエの痕跡が残る。

Fig.25の８は，甕形土器の口縁部～胴部突帯部の破片である。口縁部の断面形態は，三角形を呈し，端部が若干窪む。口縁部はほぼ水平に仕上げられており，上面には幅５mm，高さ３mm前後の突帯が約１cm間隔で貼りつけられている。残存する胴部に，２条の断面三角の突帯が確認できる。器面の内面に接合痕跡が残る。

Fig.25の９は，甕形土器の口縁部の破片である。口縁部の上面は丸みを帯び，端部が窪む。内面にユビオサエの痕跡が残る。

Fig.25の10は，甕形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は，上面がやや丸みを帯びる台形状を呈し，端部は若干窪む。残存する胴部に，１条の断面三角の突帯が確認できる。

Fig.25の11は，甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部の断面形態は，台形状を呈し，わずかに外上がりに仕上げられている。口縁部端部は若干窪む。残存する胴部に，１条の三角突帯が確認できる。また，内面にはハケメの痕跡が明瞭に残る。

Fig.25の12は，甕形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は，丸みをを帯びた三角形を呈し，ほぼ水平に仕上げられている。

Fig.25の13は，甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部の断面形態は，丸みをを帯びた三角形を呈し，わずかに外側に向い下がるように仕上げられている。内面にはユビオサエの痕跡が若干残る。

Fig.25の14は，甕形土器の口縁部～胴部の破片である。口縁部は，下方が若干膨らみ，丸みを帯びる。わずかに外側に向い下がるように仕上げられている。

Fig.25の15は，甕形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は，Ｔ字状を呈し，中央がわずかに窪む。口縁部は，外側に向い上がるように仕上げられている。口縁部内面には稜をもつ。

Fig.25の16は，甕形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は，三角形を呈する。口縁部端部下方とやや丸みを帯びる上面にはヘラ状工具によるキザミが施される。口縁部は，ほぼ水平に仕上げられている。

Fig.25の17は，高杯の脚部の破片である。しぼり込むように脚部が作られている。内面は丁寧にナデられている。また，外面にはミガキによって仕上げられ，赤色塗彩が施されている。

Fig.26の18は，壷形土器の口縁部の破片である。口縁部端部は丸みを帯び，内面には稜をもつ。

Fig.26の19は，高杯の口縁部の破片である。器面外面には赤色塗彩が施される。口縁部端部には，ヘラ状工具による幅２mm，長さ6mm前後の細かなキザミが，３～５mmの間隔で施される。

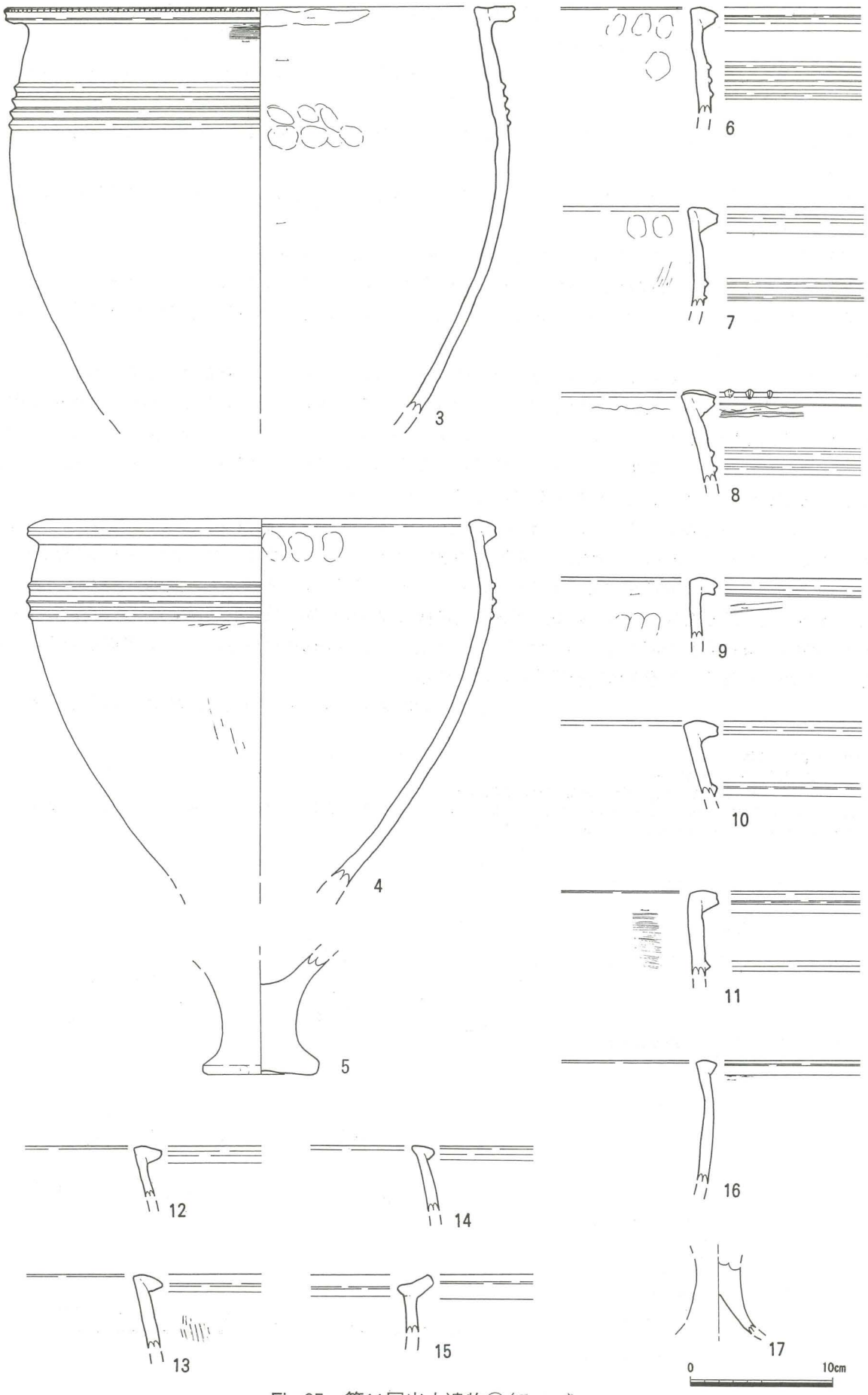


Fig.25　第11層出土遺物②(S=1/4)

Fig.26の20は，壷形土器の肩部～胴部の破片である。外面には幅１mm程度の浅い沈線が４条めぐり，その上下に櫛状の工具によると思われる波状文が施される。

Fig.26の21は，壷形土器の底部の破片である。底径は9.6cmを測る。底部は平底である。内面は風化が著しく表面が剥落している。

Fig.26の22は，壷形土器の底部の破片である。底径は5.8cmを測る。底部はわずかに上げ底状になる。外面にミガキの痕跡が残る。

Fig.26の23は，壷形土器の底部の破片である。底径は7.9cmを測る。底部はわずかに上げ底状になる。内面は風化が著しく表面が摩滅している。

Fig.26の24は，壷形土器の底部の破片である。底径は5.8cmを測る。底部は平底である。

Fig.26の25は，ミニチュア土器底部の破片である。底径は4.8cmを測る。底部は上げ底であるが，意識的に成形したものか否か判然としない。つまみ出すように底部を作り出していることから，偶然上げ底状になった可能性もある。

Fig.27の26は，チャート製の剥片を素材とした異形石器である。三ヶ所に欠損部分が認められるが，欠損面の加撃方向は異なる。全体的形状から推測して，大きな欠損とは考え難い。二次加工は，両面の両側縁全周に施されおり，直線的あるいは抉入状に整形されている。顕著な抉入状の二次加工は，ａ面下部に二ヶ所と同面右側縁上部に一ヶ所認められる。二次加工は，まずａ面側の全縁を施した後にｂ面側の全縁を施していることが観察できる。形状などから縄文時代早期に特徴的な異形石器と考えられる。

Fig.27の27は，扁平打製石斧である。刃部側は欠損しており，その欠損面の観察から，ａ面側からの加撃によるものである。材質的に，大部分の調整痕は階段状剥離になっている。調整はａ面・ｂ面の両面に施されており，特に，ｂ面右側部から中央部にかけての大きな剥離痕は，整形段階での調整剥片の剥離痕であるが，この剥離によって，ｂ面中央部は凹面状になっている。基部や両側縁には使用に伴う装着痕や剥離痕は認められない。

Fig.27の28は，安山岩製の凹石である。図示しているとおり，磨面が両面にあり，その磨面を切る形で敲打痕による凹面が認められる。石器全体に使用痕が認められる。

文責　渡部徹也（No.1・3～25）・鎌田洋昭（No.2・26～28・その他）

ｂ．第３・４層出土遺物

第3,4層から出土した陶磁器について述べる。

第3,4層から出土した陶磁器には，白磁，青磁，瓦器，染付，陶器などがある。

Fig.28の29～40は白磁である。第28図29は口禿の皿である。Fig.28の40の底部がこの皿の底部形態をなすものと考えられる。Fig.28の30～35は端反の口縁部を有する皿である。これらは小野編年による白磁皿Ｃ群に該当する

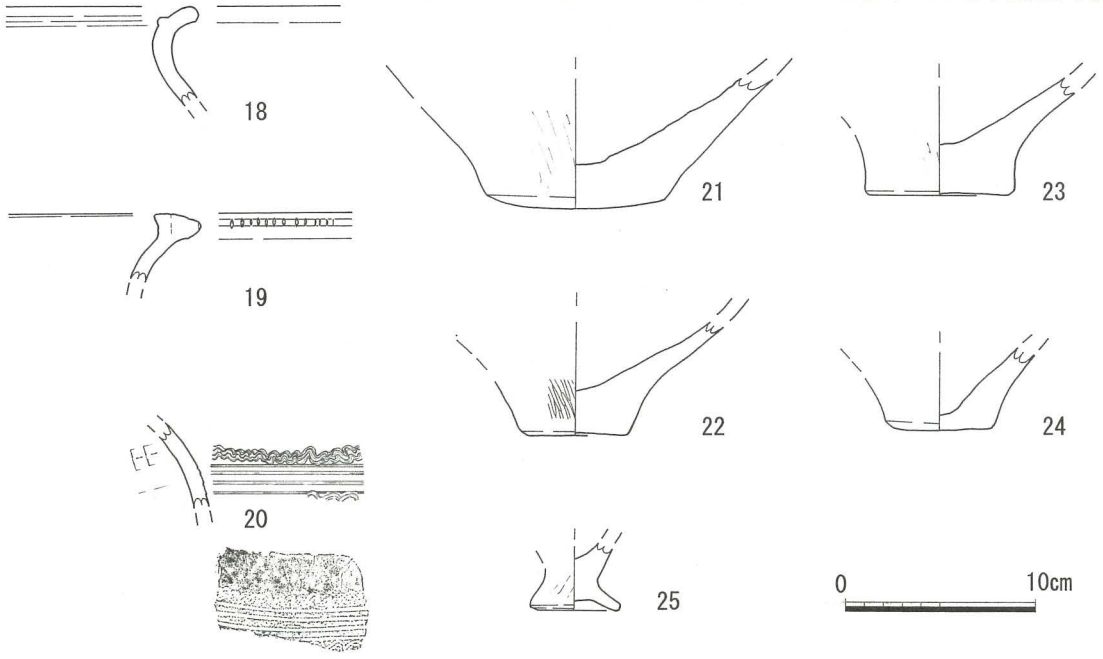
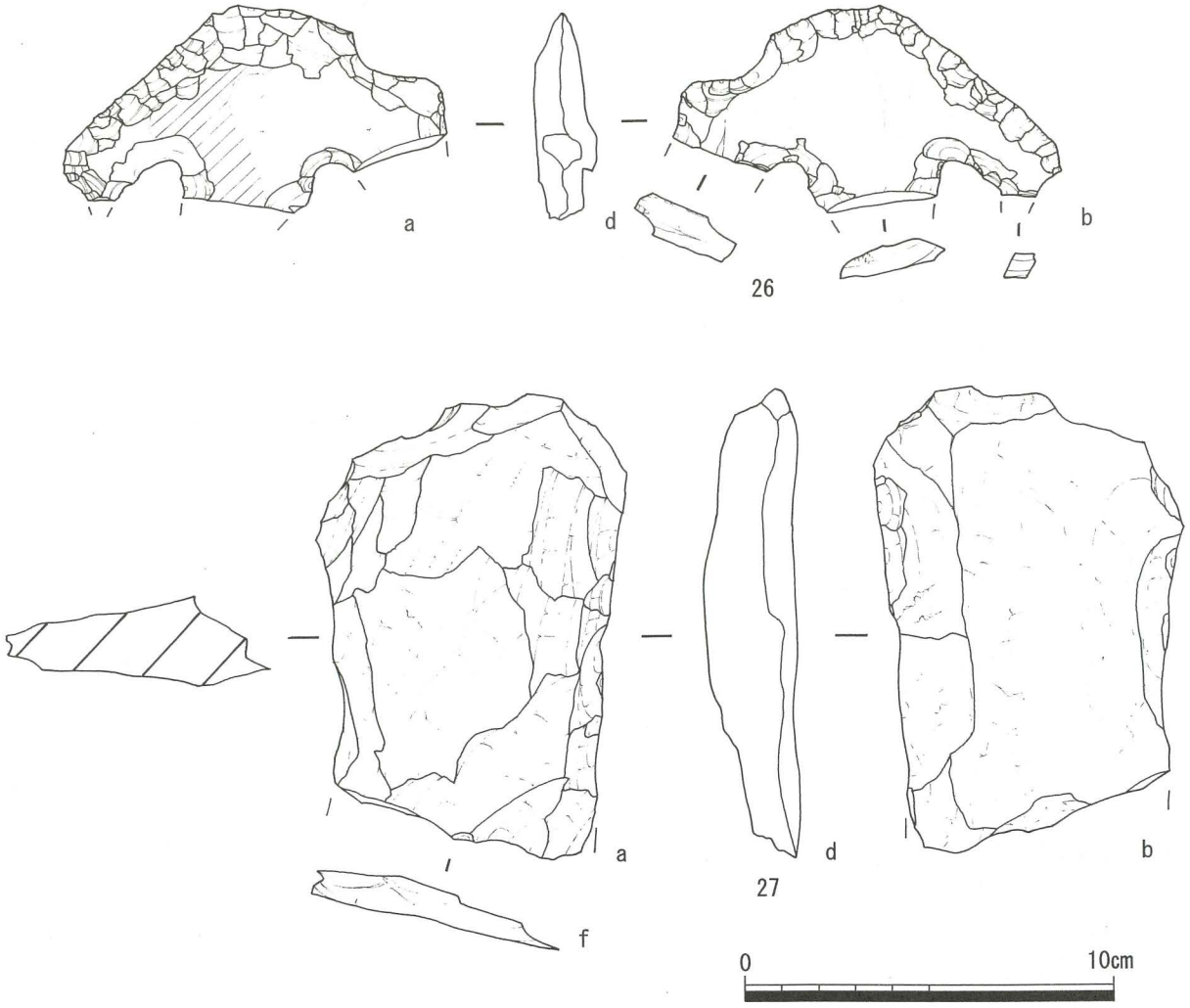


Fig.26　第11層出土遺物③(S=1/4)



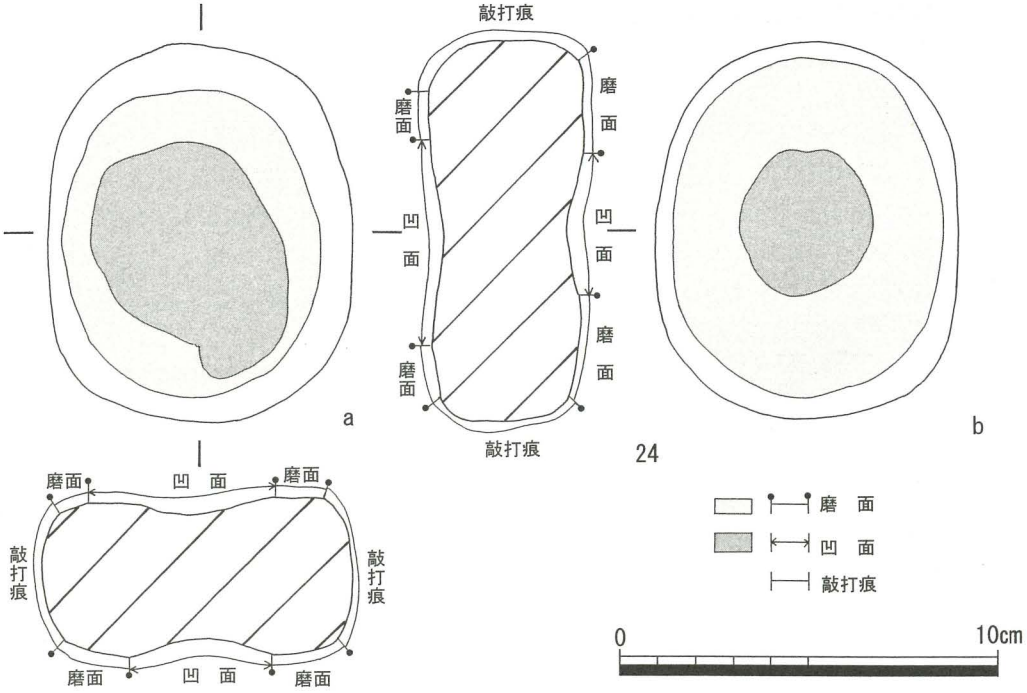


Fig.27　第11層出土遺物④（S=1/2，26は1/1）

もので，実年代としては15世紀末から16世紀を中心として国内で多く散見される（小野 1982)。

Fig.28の36は皿底部である。高台が細く，やや高台見込み側に内傾するもの（内転）で34もその傾向がある。34～36はいずれも畳付部は無釉である。Fig.28の37,38は玉縁碗のそれぞれ口縁部と底部である。時期的に，先の皿類とは異なり，古い。11世紀後半～12世紀に至るものであると考えられる。消費地遺跡として知られる博多遺跡群における森本分類では，この白磁碗についてはⅣ類とされる（森本 1997)。

Fig.28の39は白磁輪花皿である。小野編年では，白磁皿Ｄ群とされるものに該当するものと考えられる。時期は16世紀後半頃と考えられる。

Fig.29の41～46は青磁である。Fig.28の41は青磁碗体部である。内面見込み部に雲文状の刻線が認められる。これは，上田編年によると青磁碗Ｂ類とされ，15世紀から16世紀に位置付けられている（上田 1982)。

Fig.29の42は連弁文碗口縁部である。鎬は不明瞭であり，上田編年によると青磁碗Ｂ類と考えられ，14世紀から15世紀初頭の所産と考えられる。Fig.29の43は青磁盤口縁部である。口縁端部の直立した引き上げた部分は不明瞭となっており，また､内面見込み部は幅の広い刻線を施す。鎌倉光明寺裏遺跡の出土資料を参考とすると（上田 1982)，14世紀代のものと考えられる。

Fig.29の44,45は青磁碗体部である。第28図44は内面見込み部に片切りにより草花文が認められる。いずれも龍泉窯系と考えられ，上田編年では龍泉窯系碗Ｉ類に該当するものと考えられる。またFig.28の45の内面見込み部には雲文が施され，外面には連弁文が施される。同氏編年では龍泉窯系碗Ｂ4類に該当するものと考えられる。15世紀～16世紀に該当するものと考えられる。

Fig.29の46は青磁碗底部である。内面見込み部分にスタンプが認められる。外面には片切りの連弁文が認められるが鎬は見えない。従って，上田編年の龍泉窯系青磁碗Ｂ2類に該当するものと考えられ，14世紀から15世紀に比定される。

Fig.29の47は，五彩瓶である。外面には赤絵をベースとして４ヶ所の円形区画があり，巴文や吉祥文が認められる。巴文には銀彩が認められる。赤絵や円形文様区画，そして，銀彩などの特徴を考慮すると可能性の範囲では朝鮮陶磁（李朝陶磁）またはその写しとも考えられる。

Fig.29の48は染付皿または盤である。口縁部内面には界線と絵付けが認められ，外面は鑿による刻線が認められる。染付の風合いは漳州窯系の染付に似る。しかし，外面体部において刻線による施文の類例は管見に触れず，その可能性を指摘しておくに留まる。

Fig.30の49～57は輸入磁器で漳州窯系の染付と考えられるものである。Fig.30の49は口縁部外面および内面見込み部に草花文が描かれている。小野編年では染付皿Ｅ群Ⅵ類に似る。16世紀後半に位置付けられよう。

Fig.30の50は外面に3本の界線，内面に３本の界線が認められ，見込み部には草花文が描かれている。小野編年では染付皿ＥⅦ類に似る。16世紀後半に該当するものと考えられる。

Fig.30の51は外面に２本の界線，内面に２本の界線が認められる。見込み部は欠落のため不明。小野編年では染付皿Ｂ２群Ⅳ類に対比できる。14世紀末～15世紀後半に該当するものと考えられる。なお，同一個体の可能性がある底部がある。内面及び外面の高台付近まで透明釉が認められるが，高台及び高台内見込み部は無釉である。

Fig.30の53及び54は皿口縁部である。Fig.30の53には口縁部内面に二本の界線，口縁部外面に二本の界線が認められる。外面体部には，草花文が認められる。Fig.30の54には口縁部内面に一本の界線，口縁部外面に一本の界線が認められる。外面体部には意匠は不明であるが文様が描かれる。

Fig.30の55及び56は碗底部である。いずれも，小野編年では染付碗Ｂ群に該当するものと考えられる。Fig.30の55には内面見込み部に二本の界線および内面見込み部に花鳥文が，外面高台付近には二本の界線及び外面体部には唐草文が描かれている。Fig.30の55には内面見込み部に二本の界線および内面見込み部に草花文が，外面高台付近には太い一本の界線及び外面体部には如意雲文が描かれている。これらは，14世紀末～15世紀代に該当するものと考えられる。

Fig.30の57はいわゆる碁笥底を呈する底部で，内面見込み部に一本の界線および内面見込み部に草花文が，外面体部下半部に一本の界線及び外面体部には意匠不明であるが文様が描かれている。畳付部のみ無釉で，高台内面見込み部にも無色釉がかかる。第30図における漳州窯系染付については，概ね15世紀から16世紀が中心に消費されていたと考えられる。

Fig.31の58～62は染付で肥前系磁器皿である。Fig.31の58～61はいずれも砂目が残るものであり，17世紀前半期に該当するものと考えられるものである。第31図58は染付皿で，内面見込み部に三重の界線が巡り，その内部

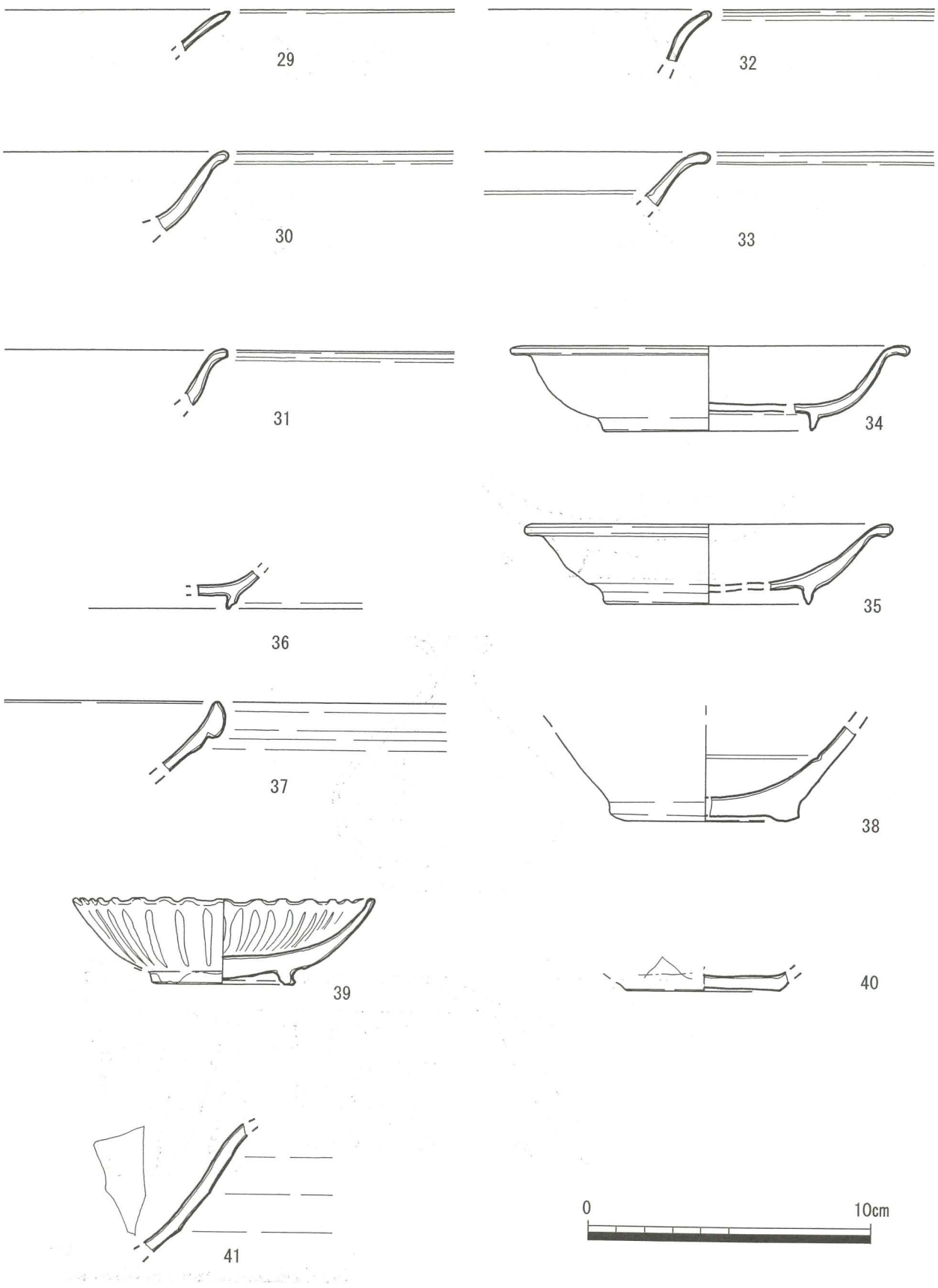


Fig.28　第３，４層出土遺物①（S=1/2）

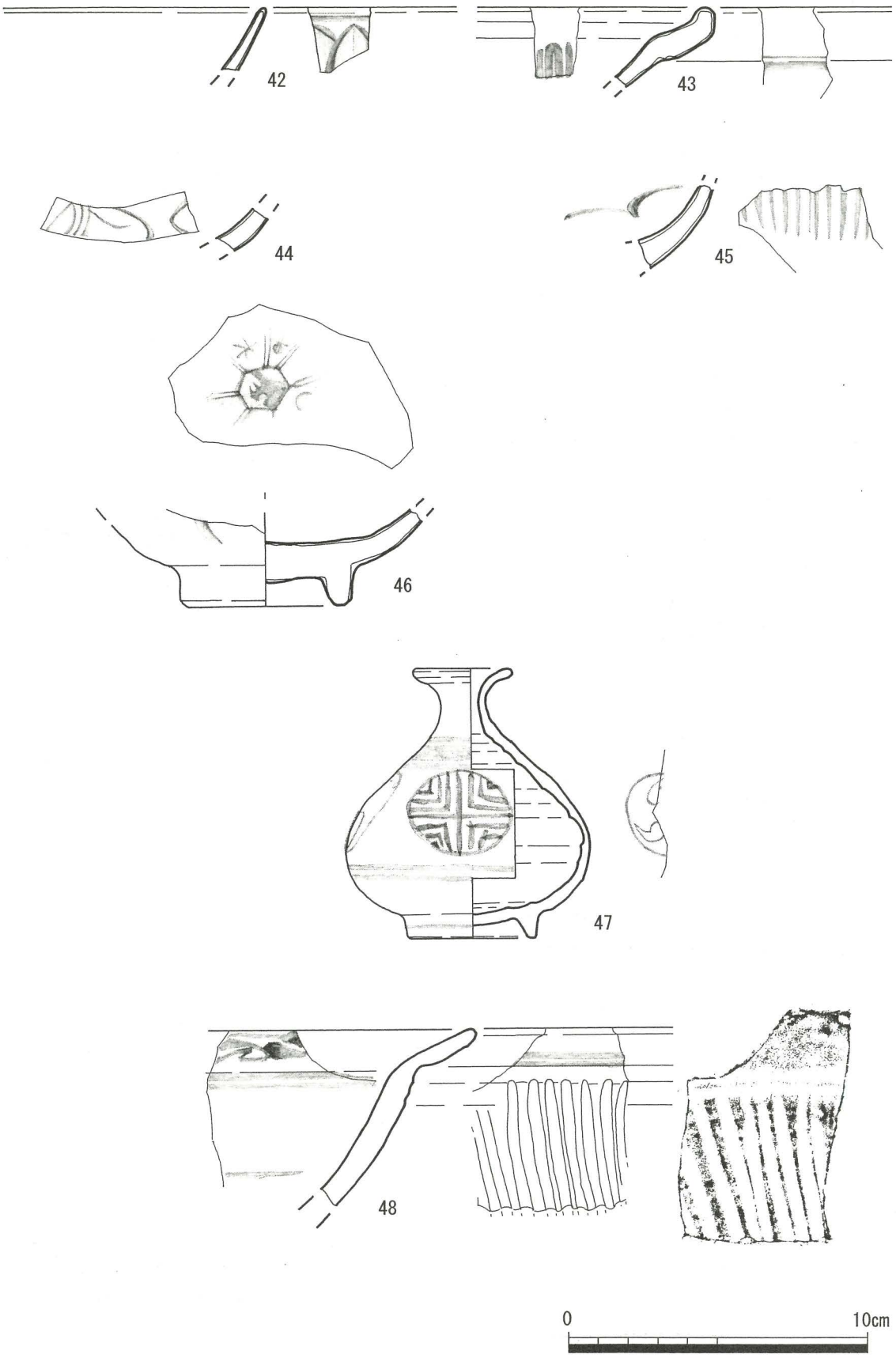


Fig.29　第３，４層出土遺物②(S=1/2)

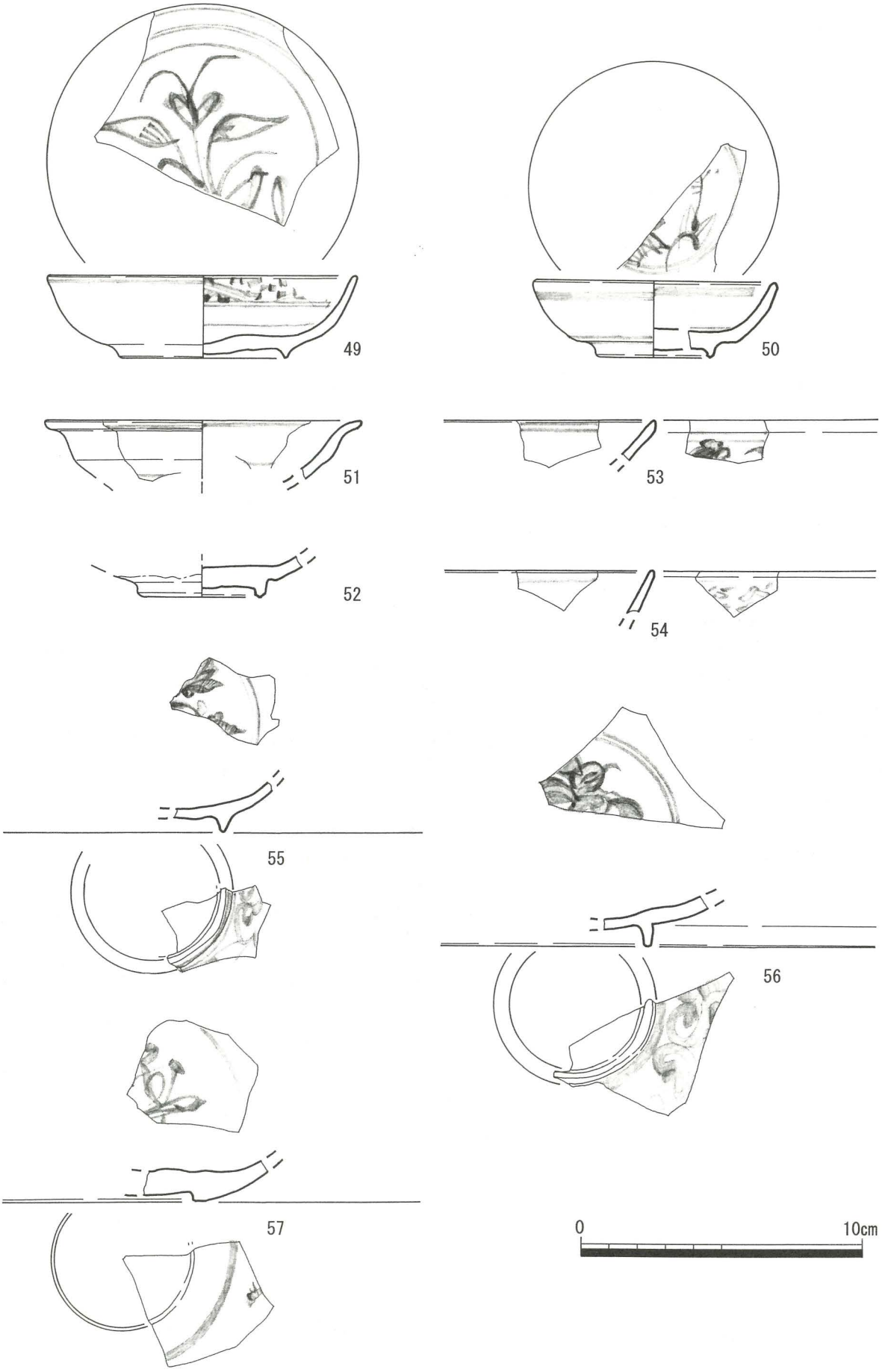


Fig.30　第３，４層出土遺物③(S=1/2)

に草花文が描かれている。畳付のみ無釉で蝋がけによる。また，畳付部に砂目が残存している。

Fig. 31の59は染付皿で，内面見込み部に二重の界線が巡り，その内部に草花文が描かれている。畳付のみ無釉で蝋がけによる。また，畳付部に砂目が残存している。Fig. 31の60は染付皿で，内面見込み部に花文が描かれている。畳付のみ無釉で蝋がけによる。また，畳付部に砂目が残存している。天神森五号窯などに例がある花文（桔梗文）皿に比定できると考えられ，肥前陶磁編年ではⅡ-a期（17世紀前半期）に該当すると考えられる（大橋 1989）。

Fig. 31の61は染付皿で，内面見込み部に一重の界線が巡り，その内部に草花文が描かれている。畳付のみ無釉で蝋がけによる。また，畳付部に砂目がよく残存している。Fig. 31の62は端溝の皿で，呉須は見えない。あるいは白磁皿の可能性があるが，肥前系である。時期は，肥前陶磁編年では，Ⅱ期に該当するものと考えたい。

Fig. 31の63は染付皿で，内面体部から見込み部に三重の界線が巡る。その内部は蛇の目釉剥ぎが認められる。外面体部下半から畳付，高台内面は無釉である。また，内面見込み部及び畳付部に砂目がよく残存している。肥前陶磁編年ではⅡ-b期（17世紀前半期）に該当するものである。

Fig. 32の64～73は磁器で肥前系碗である。Fig. 31の64は染付碗で，外面口縁部付近に三重の界線，外面体部下半部に一重の界線が認められ，その間の体部には山水文が描かれている。山水文の盛行は肥前陶磁編年Ⅲ期と指摘されていること，そして，器形から見て，肥前陶磁編年Ⅲ期（大橋 1989）と見てよいと考えられる。この場合，該当時期については17世紀後半期と見てよいであろう。

Fig. 31の65は染付碗で，外面口縁部付近に一重の界線，外面体部下半部に二重の界線が認められ，その間の体部には草花文が描かれている。畳付部には砂目が残存することから，概ね肥前陶磁編年では，Ⅱ期に該当するものと考えたい。

Fig. 31の66は染付碗で，外面口縁部付近に一重の界線，外面体部下半部に一重の界線が認められ，その間の体部は無文である。内面見込み部には二重の界線が認められ，その内部に菊花文が描かれている。畳付部には砂目が残存することから，概ね肥前陶磁編年では，Ⅱ期に該当するものと考えられよう。Fig. 31の67は染付碗で，外面体部下半部に三重の界線が認められる。内面見込み部には界線はなく，中央に梅花文が描かれている。また，高台内見込み部には一重の界線とその内部に銘款と考えられる筆書が残る。貫入が認められる。

Fig. 31の68, 69は染付碗で，外面口縁部及び体部下半部にそれぞれ一重の界線が認められ，その間に網目文が施されている。網目文はFig. 31の68，69は一重の網目文である。九谷系と考えられる。概ね肥前陶磁編年では，Ⅱ期に該当するものと考えられよう。

Fig. 31の70は磁器質の陶器の可能性が高く，内面及び外面上半部まで銅緑釉がかかる。内野山窯で代表されるこの種の碗は，内野山北窯ではⅢ期碗Ｃと分類され，当古窯編年のⅢ期に該当するものと考えられる（佐賀県教育委員会 1996）。これは大橋氏の編年では，概ね17世紀末から18世紀前半の時期が考えられている（大橋 1989）。

Fig. 31の71は鉄絵碗である。細かな貫入が認められる。透明釉は，内面と外面体部に施されるが下半部は無釉である。絵唐津の可能性がある。

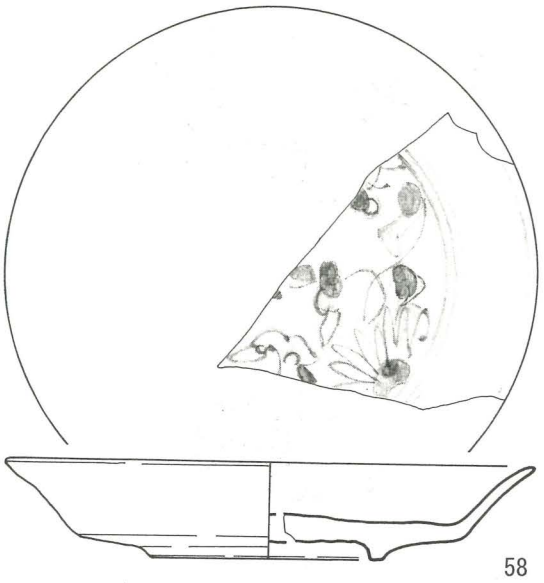
Fig. 31の72は磁器碗の底部で，外面高台付近の体部及び内面に透明釉が施されている。Fig. 31の73も磁器碗の底部で，いわゆる碁笥底を呈している。内面及び外面体部に透明釉がかかるが，やや黄白色に発色している。輸入と考えられるが，写しの可能性を含めておきたい。

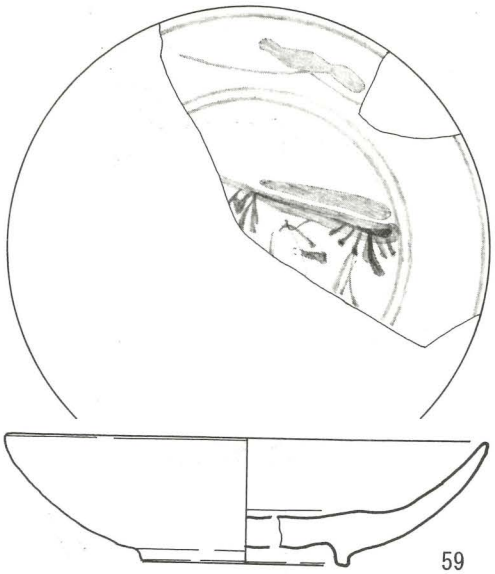
Fig. 33の74～78は陶磁器で肥前系皿である。Fig. 33の74は略完形となる溝縁皿で，高台及び高台内面以外は灰釉が施釉されている。内面見込み部には砂目が4ヶ所認められる。内野山北窯のⅠ期灰釉溝縁皿Ｄに該当するものと考えられる（佐賀県教育委員会 1996）。この皿の生産時期については，17世紀前半に位置付けられている。

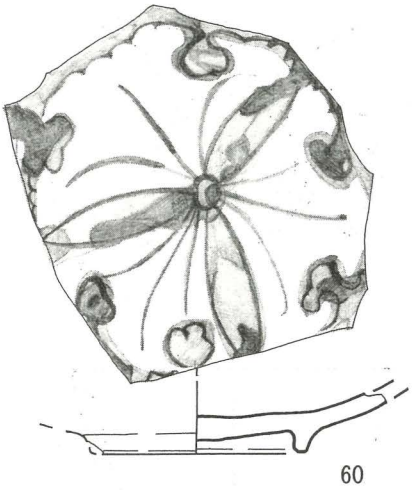
Fig. 33の75は略完形となる灰釉皿で，外面体部及び内面に施釉されている。内面見込み部には４ヶ所の胎土目が認められる。胎土目については肥前陶磁ではⅡ期において砂目に変化することから，この資料は肥前系陶磁と認める場合，Ⅰ期に該当するものと考えられる。Ⅰ期の時期は大橋氏の編年によれば16世紀第４四半期から17世紀初頭に至る時期が考えられている。

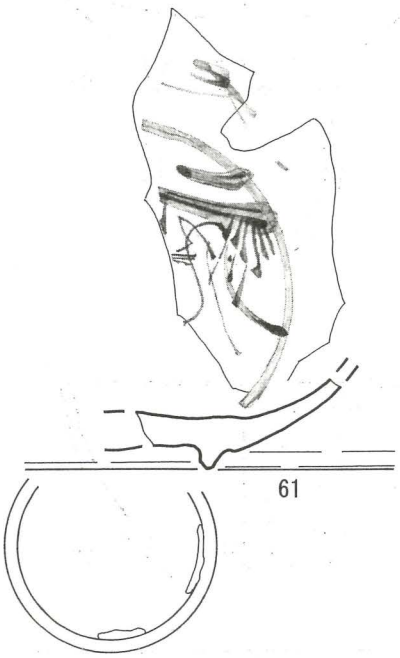
第33図76は灰釉皿底部で，かけ流しにより施釉する。内面には3ヶ所の砂目が認められることから，肥前陶磁編年のⅡ－ａ期頃に該当すると思量する。Fig. 33の77は皿底部で，内面には3ヶ所の砂目が認められることから，肥前陶磁編年のⅡ－ａ期頃に該当すると考えられる。

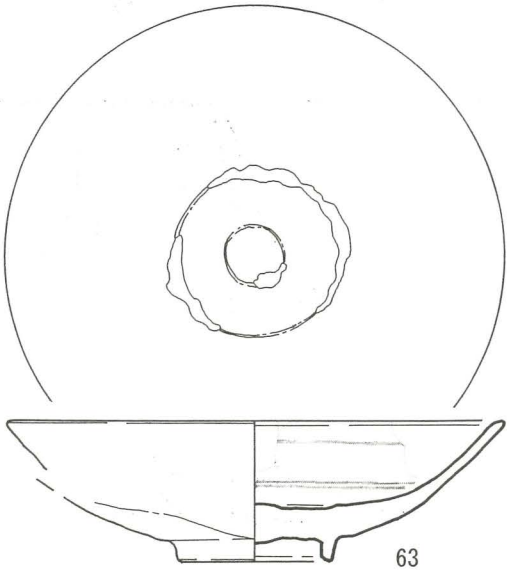
Fig. 33の78は中皿口縁部である。外面は透明釉，口縁部内面に白刷毛目が施釉されることから、内野山系を疑うことができるが，その場合，内野山北窯のⅡ期中皿Ａが該当する可能性が高い。その場合17世紀後半に位置付けられる。











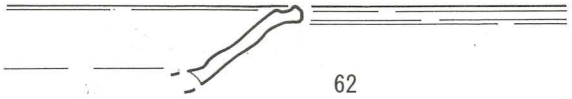


Fig.31　第３，４層出土遺物④(S=1/2)

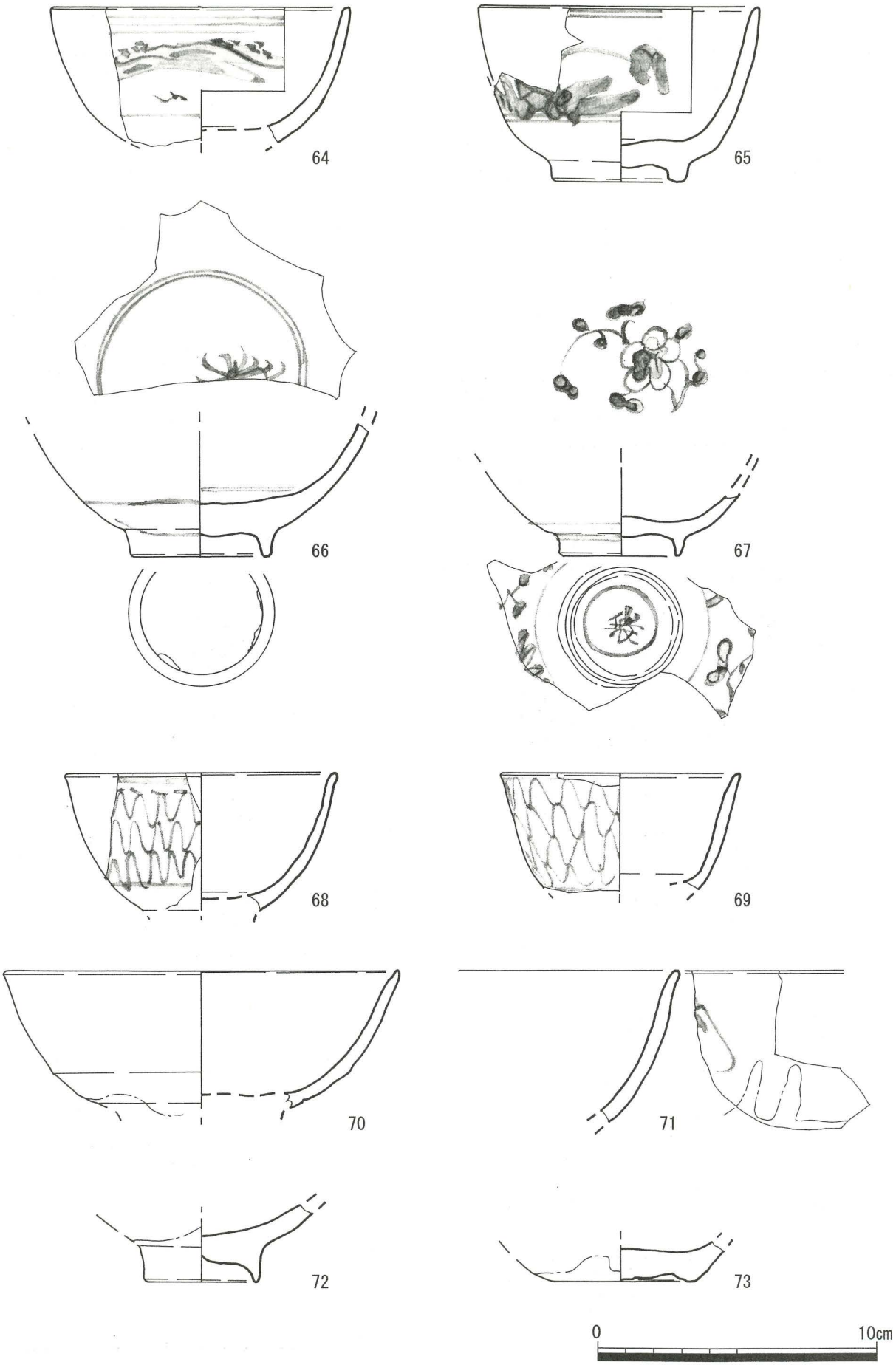


Fig.32　第３，４層出土遺物⑤(S=1/2)

Fig. 34の79～85は陶磁器で肥前系碗である。Fig. 34の79は皮鯨手碗である。内面，外面体部上半部に藁灰釉が施される。皮鯨手については肥前陶磁編年では，Ⅰ期において特徴的な技法であることから，当該時期を逸脱しないと考えられる。Fig. 34の80は鳥文鉄絵碗である。内面，外面体部上半に透明釉が施される。内面見込み部には3ヶ所の胎土目があると考えられるが，2ヶ所のみが残存する。また，内面見込み部には鳥文が鉄絵で描かれている。これもまた，肥前陶磁編年ではⅠ期に該当するものと考えられる。

Fig. 34の81は透明釉碗で失透している。高台畳付部と高台内面はフキトリにより無釉である。肥前系と考えられるが詳細は不明である。Fig. 34の82は透明釉碗である。高台は蛇の目高台となる。高台内面及び畳付部のみ無釉である。内面見込み部には3ヶ所の砂目が残存する。高台形態，窯詰法から肥前陶磁編年のⅡ期に該当するものと考えられる。

Fig. 34の83, 84は銅緑釉碗である。Fig. 34の83は内面は透明釉，外面体部は銅緑釉が施釉される。高台及び高台内面は無釉である。内面見込み部に若干砂目が残る。Fig. 34の84は内面は銅緑釉，外面体部は透明釉が施釉される。高台及び高台内面は無釉である。これら碗については，釉より，内野山系の所産を疑うことができる。高台形態では，Fig. 34の83は84と比べてやや低く太い。詳細な対比は困難であるが，内野山北窯のⅠ～Ⅲ期に該当するものと考えられ，概ね17世紀から18世紀前半期の範疇にあるものと捉えておきたい。

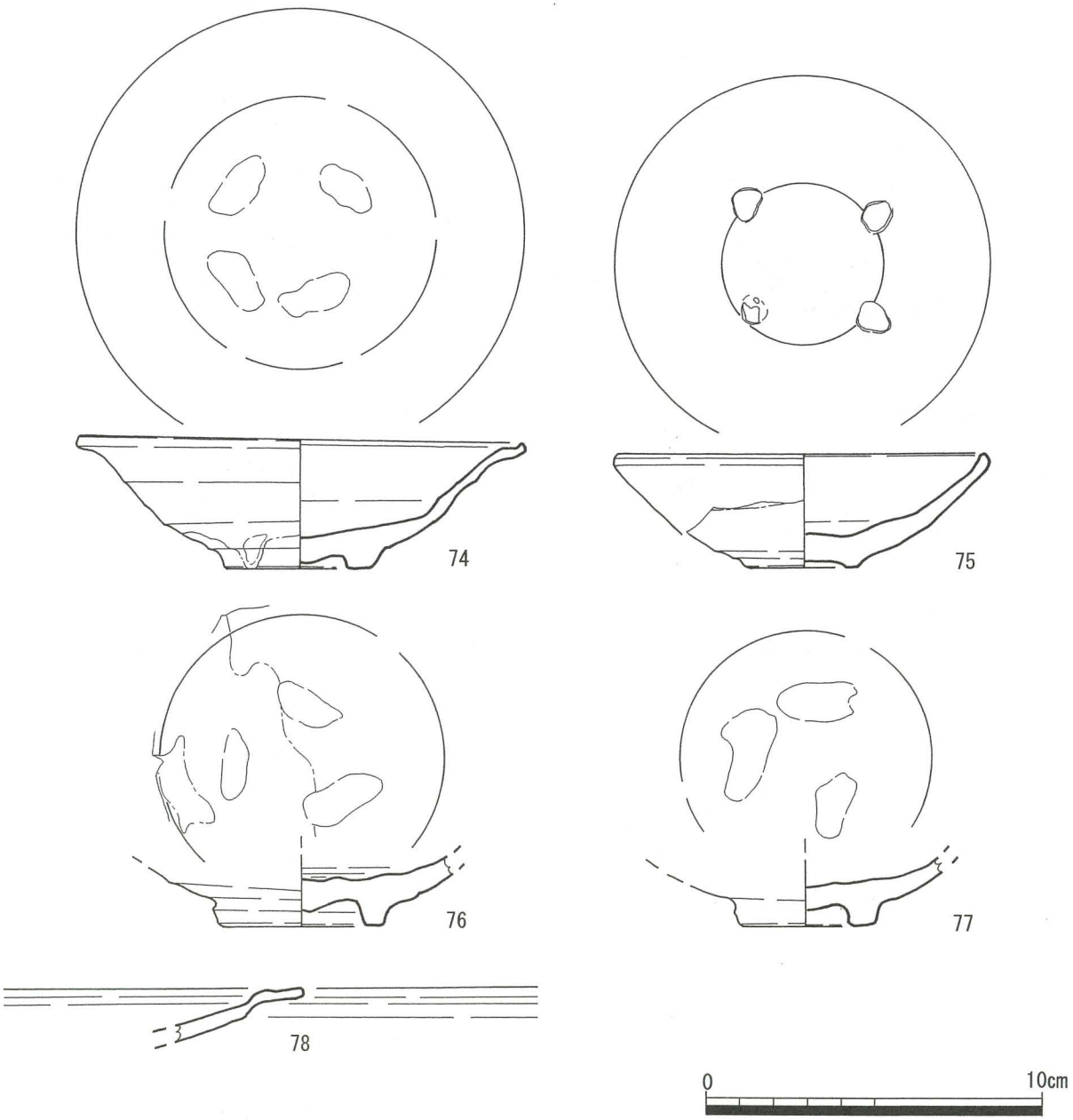


Fig.33　第3，4層出土遺物⑥(S=1/2)

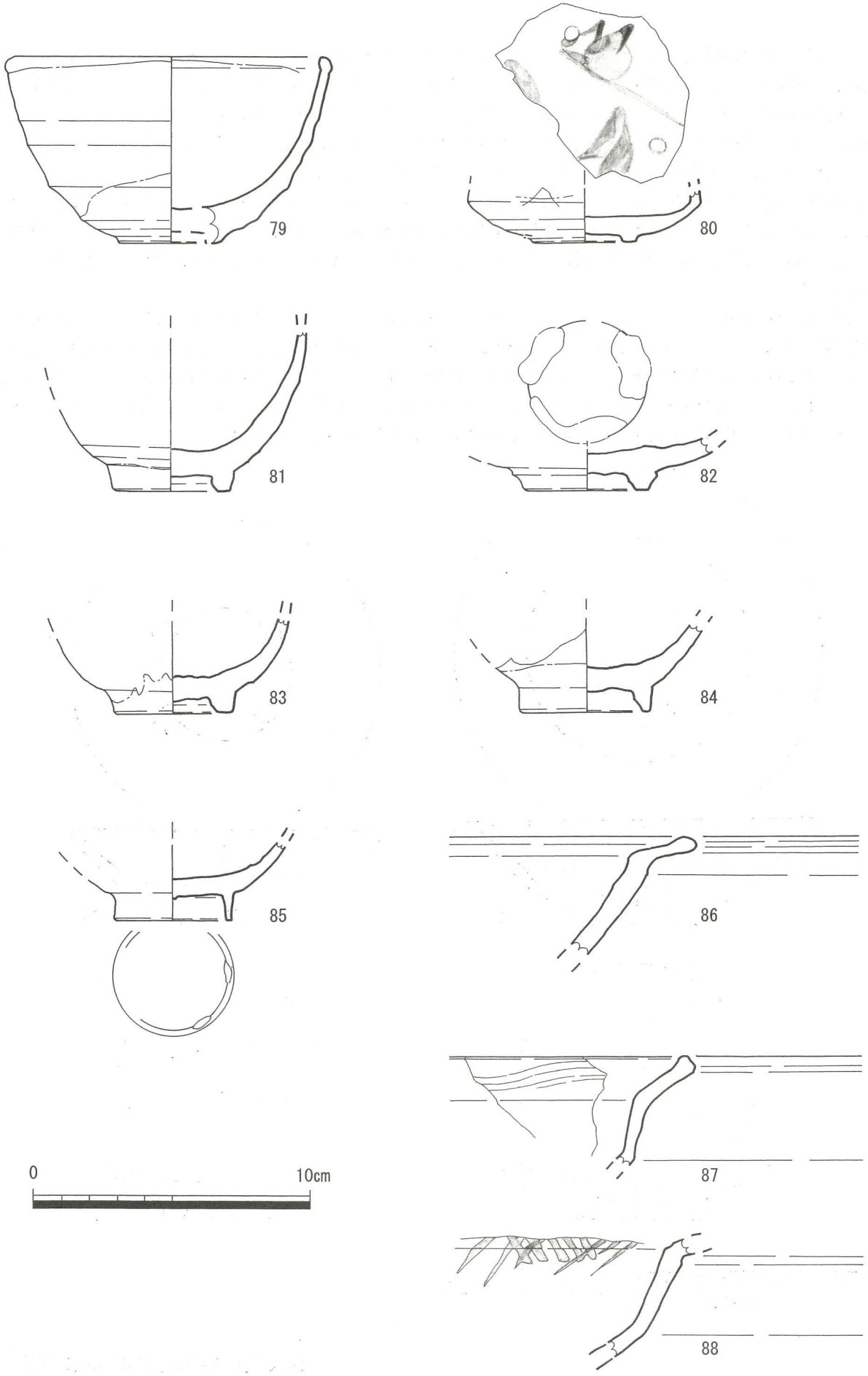


Fig.34　第３，４層出土遺物⑦(S=1/2)

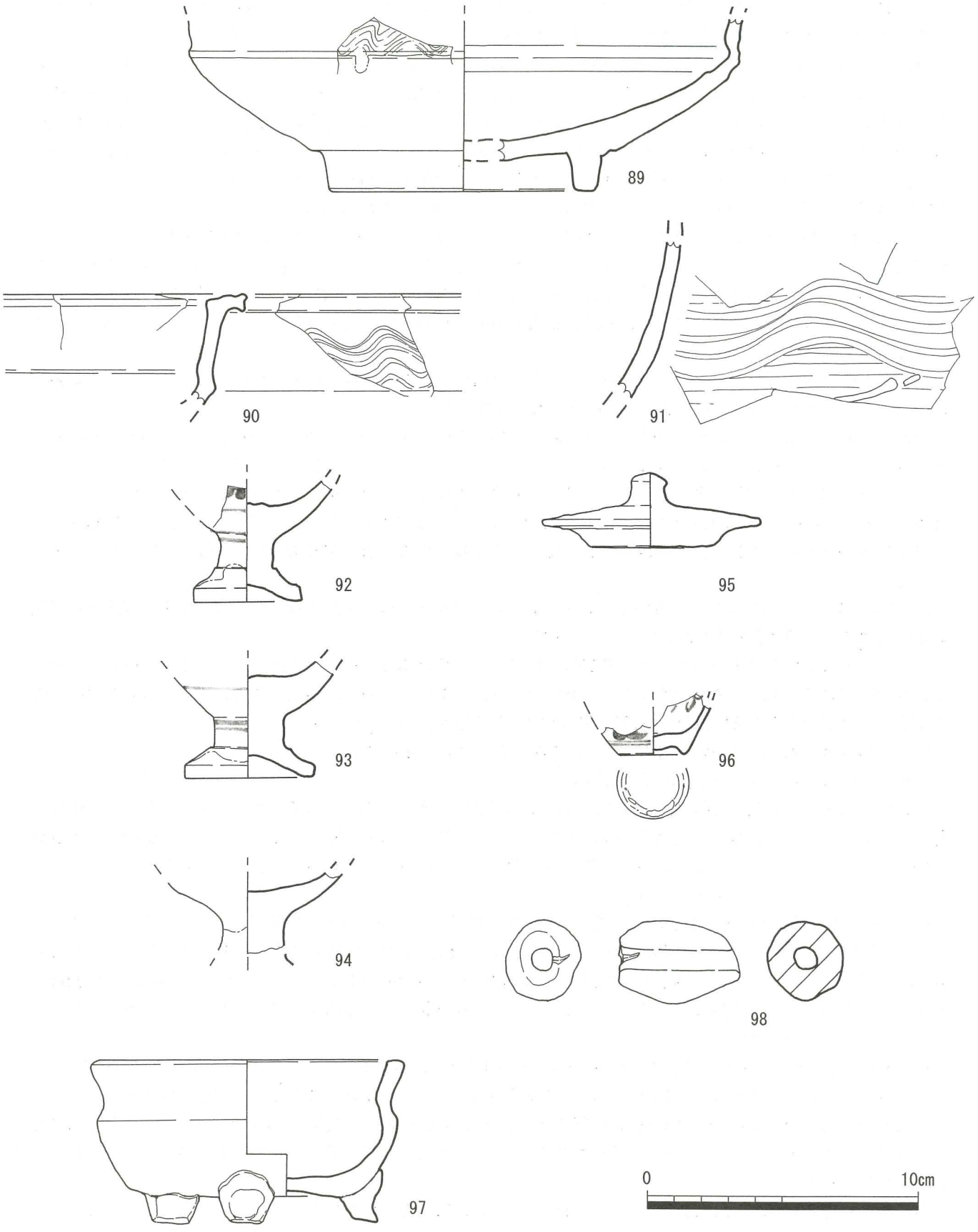


Fig.35　第３，４層出土遺物⑧(S=1/2)

Fig. 34の84は白刷毛目碗または鉢底部である。畳付以外は全釉で透明釉がかかる。内面には，白刷毛目が認められるが，刷毛を使用したのではなく，おそらく指頭によるフキトリによるものである。畳付には，重ね焼きによる付着と割れが残こる。高台は細く高い。肥前陶磁編年のⅡ-c期～Ⅲ期頃の所産と思量する。

Fig. 34の86～88は陶磁器で肥前系中皿である。Fig. 34の86は白刷毛目折縁中皿である。外面は透明釉で，内面は太い白刷毛目が認められる。口縁部形態は，強く屈曲し，口縁端部はやや引き上げられている。Fig. 34の87も外面は透明釉で，内面は太い白刷毛目が認められる。口縁部形態は，強く屈曲し，胴部が屈曲する。Fig. 34の88は外面は透明釉，内面は白化粧に口縁部内面部分には鉄絵または象嵌（鉄釉）が施されている。これらは，内野山北窯との対比において，Ⅰ期～Ⅱ期に該当すると考えられ，概ね17世紀代を考えておきたい。特に，Fig. 34の88に見られるような象嵌技法については，内野山北窯では，Ⅰ期の可能性もある。

Fig. 35の89～90は白刷毛目を施す中皿の底部と口縁部である。Fig. 35の89は内面には褐色釉がかかり，外面体部屈曲部から上半部分に白刷毛目の上に銅緑釉が施釉されているものである。Fig. 35の90は内面は褐色釉が，外面体部屈曲部から口縁部までが白刷毛目の上に銅緑釉が施釉されている。これら資料は同一個体の可能性もある。施釉技法は，内野山系と考えられるが，器形に該当するものがあるか不明であるため，ここでは，唐津系と指摘するに留める。

Fig. 35の91は壷体部である。内面は無釉で，外面には白刷毛目の上，銅緑釉が施される。これもまた，施釉技法は，内野山系と考えられるが，唐津系と指摘する程度を越えない。

Fig. 35の92～94は染付，または白磁仏飯器である。Fig. 35の92, 93は染付仏飯器である。Fig. 35の92は外面体部下半部に一本，及び脚台と体部の境に二本の界線が認められる。体部には，意匠不明であるが絵付が行われている。Fig. 35の93は外面体部下半部に一本，及び脚台と体部の境に二本の界線が認められる。体部の絵付については不明である。Fig. 35の93, 94ともに底部付近は無釉である。Fig. 35の94は白磁仏飯器である。内面及び脚部上半部以上に施釉される。これら仏飯器は概ね17世紀前半期に該当する肥前陶磁器編年のⅡ－ｂまたはⅡ－ｃ期を考えておきたい。

Fig. 35の95は二彩蓋である。天井から身受け部まで施釉される。つまみ部は若干宝珠形をなす。底面は右回転の糸切による。肥前系と考えられるが，詳細は不明。

Fig. 35の96は染付杯底部である。外面底部付近に二本の界線が認められる。外面体部には絵付が行われ，唐草文が部分的に残る。底部はやや上底になり，高台を作り出している。畳付は無釉で砂目が残る。輸入磁器の可能性が高い。呉須の青みの強い発色状況は清朝に該当する可能性を示唆している。

Fig. 35の97は土師器三脚香炉である。内外面に若干カーボンが付着する。

Fig. 35の98は管状土錘である。紐ずれ痕跡が認められる。

Fig. 36の99～105は備前系擂鉢である。Fig. 36の99は擂鉢注口部である。ほぼ直立する口縁部の外面に明瞭な凹線が3本認められる。 注ぎ口は轆轤成形後に指で折り曲げて作り出している。内面，外面ともに轆轤引きの痕跡が明瞭である。間壁編年ではⅤ期に該当するものと考えられ，16世紀代に該当するものと考えられる。櫛目は太く短いものと細いものとが混在している。

Fig. 36の100は擂鉢注口部である。口縁部は断面三角形に近く，口縁部外面はほぼ平坦に仕上げられている。櫛目は6本を単位としやや太い。Ⅳ期に該当するものと考えられ，15世紀に該当するものと考えられる。Fig. 36の101は擂鉢注口部である。やや内傾する口縁部で口縁部外面は1本の凹線が認められる。内面，外面ともに轆轤引きの痕跡が明瞭である。Ⅳ期に該当するものと考えられ。15世紀に該当するものであると考えられる。櫛目は10＋α本を単位としやや細い。

Fig. 36の102はほぼ直立する口縁部の外面に不明瞭な凹線が認められる。Fig. 36の103は内傾する口縁部を有し，その外面には凹線が認められ，口縁部外面の中央部は突出している。Ⅴ期に該当し，16世紀に位置付けられるものと考えられる。Fig. 36の104, 105は擂鉢底部である。どちらも轆轤引きの痕跡が明瞭である。Fig. 36の104は櫛目は太く，７本を単位とする。Fig. 36の105は櫛目は10本を単位とし，やや細い。Ⅳ～Ⅴ期に該当し，15～16世紀に位置付けられる。

Fig. 36の106, 107は肥前系擂鉢である。Fig. 36の106は口縁部から底部まで残存する資料である。口縁部は鉄釉がかかり，高台内見込み部は蛇の目高台となる。櫛目は9本を単位とし，細い。唐津系の擂鉢と考えられる。外面体部下半は回転ヘラケズリが明瞭である。Fig. 36の107は擂鉢注口部である。口縁部内外面に鉄釉がかかる。櫛目は８本を単位とし，細い。外面体部下半は回転ヘラケズリが明瞭である。唐津系の擂鉢と考えられる。Fig. 36の

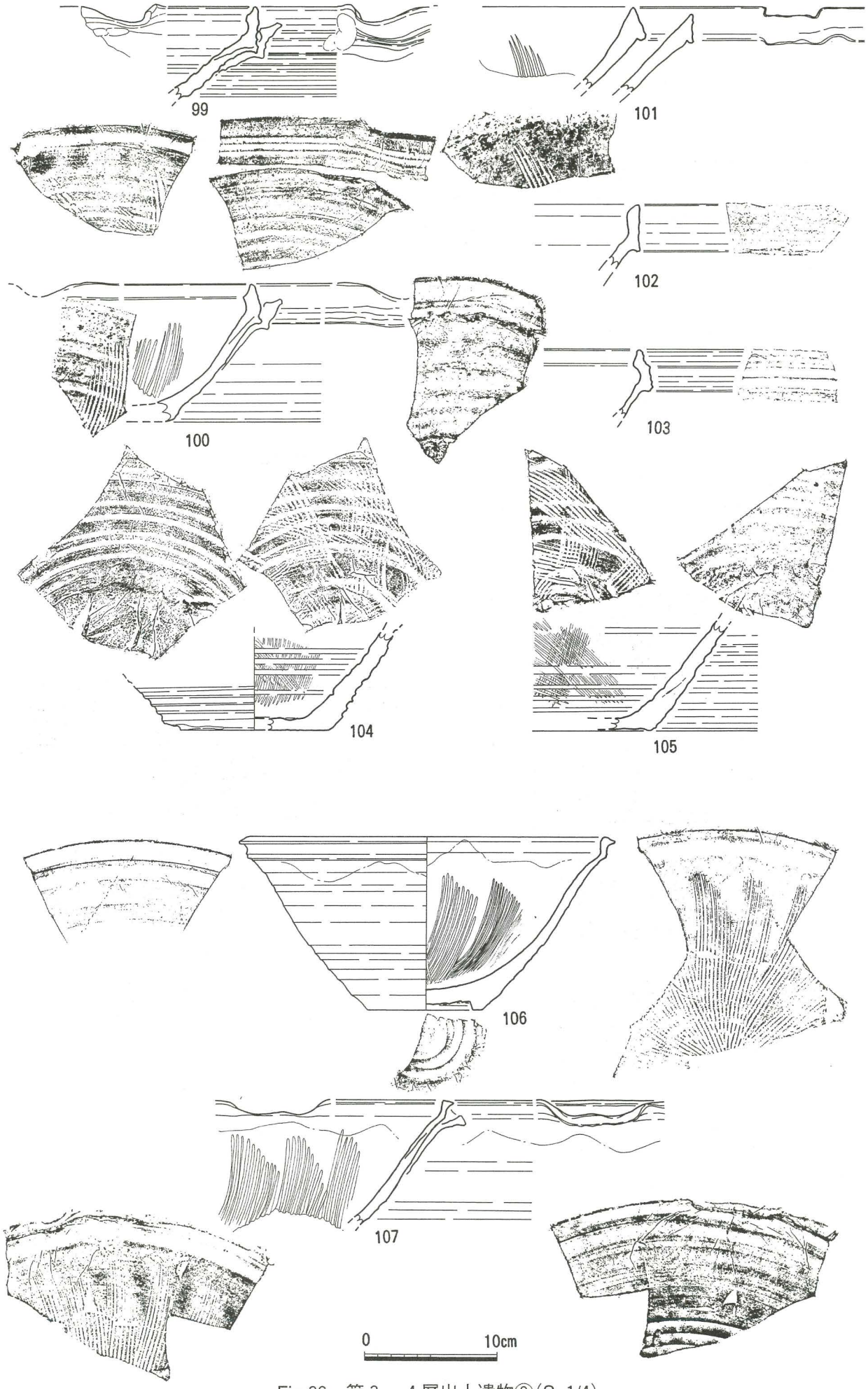


Fig.36　第３，４層出土遺物⑨(S=1/4)

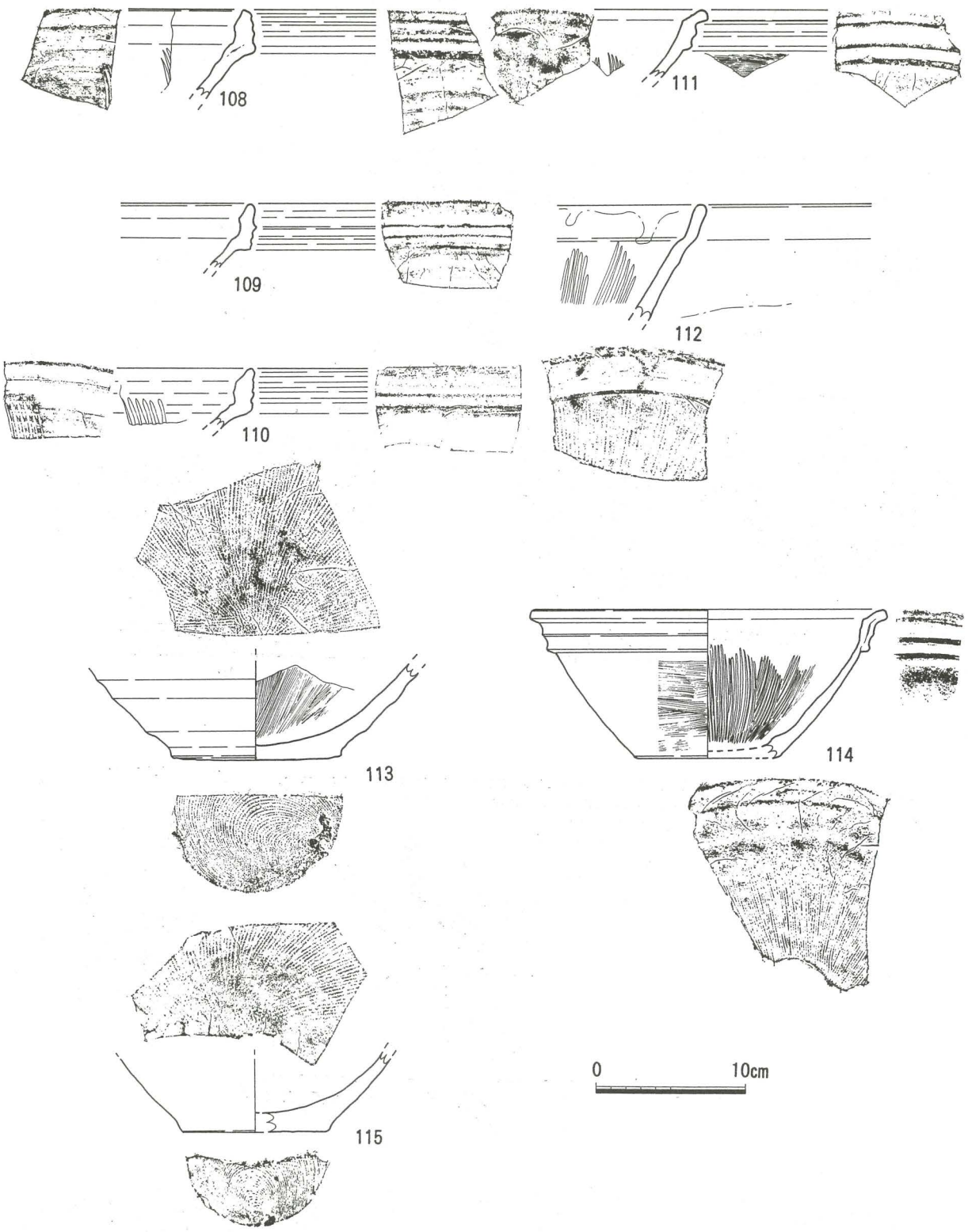


Fig.37　第３，４層出土遺物⑩(S=1/4)

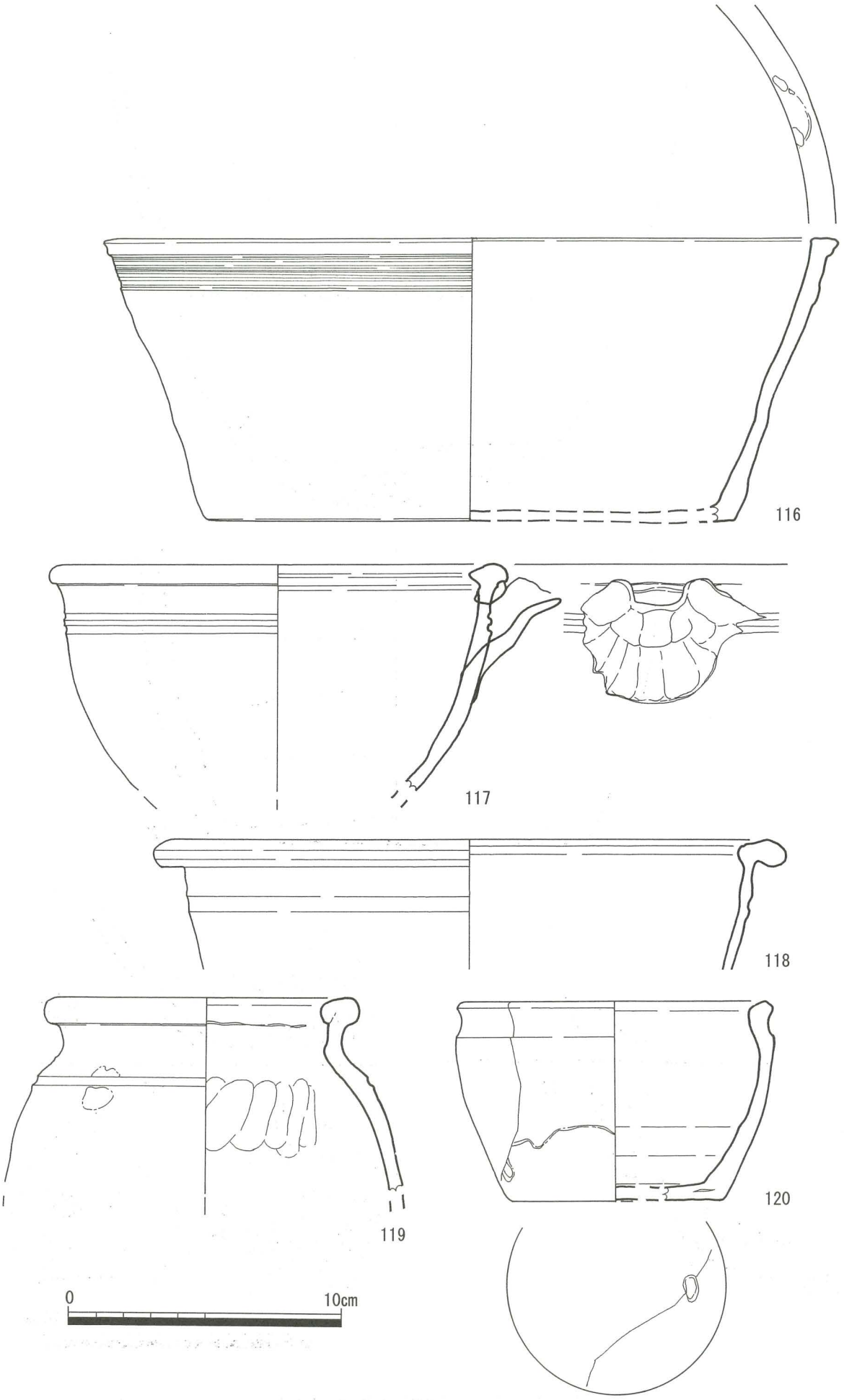


Fig.38　第３，４層出土遺物⑪(S=1/2)

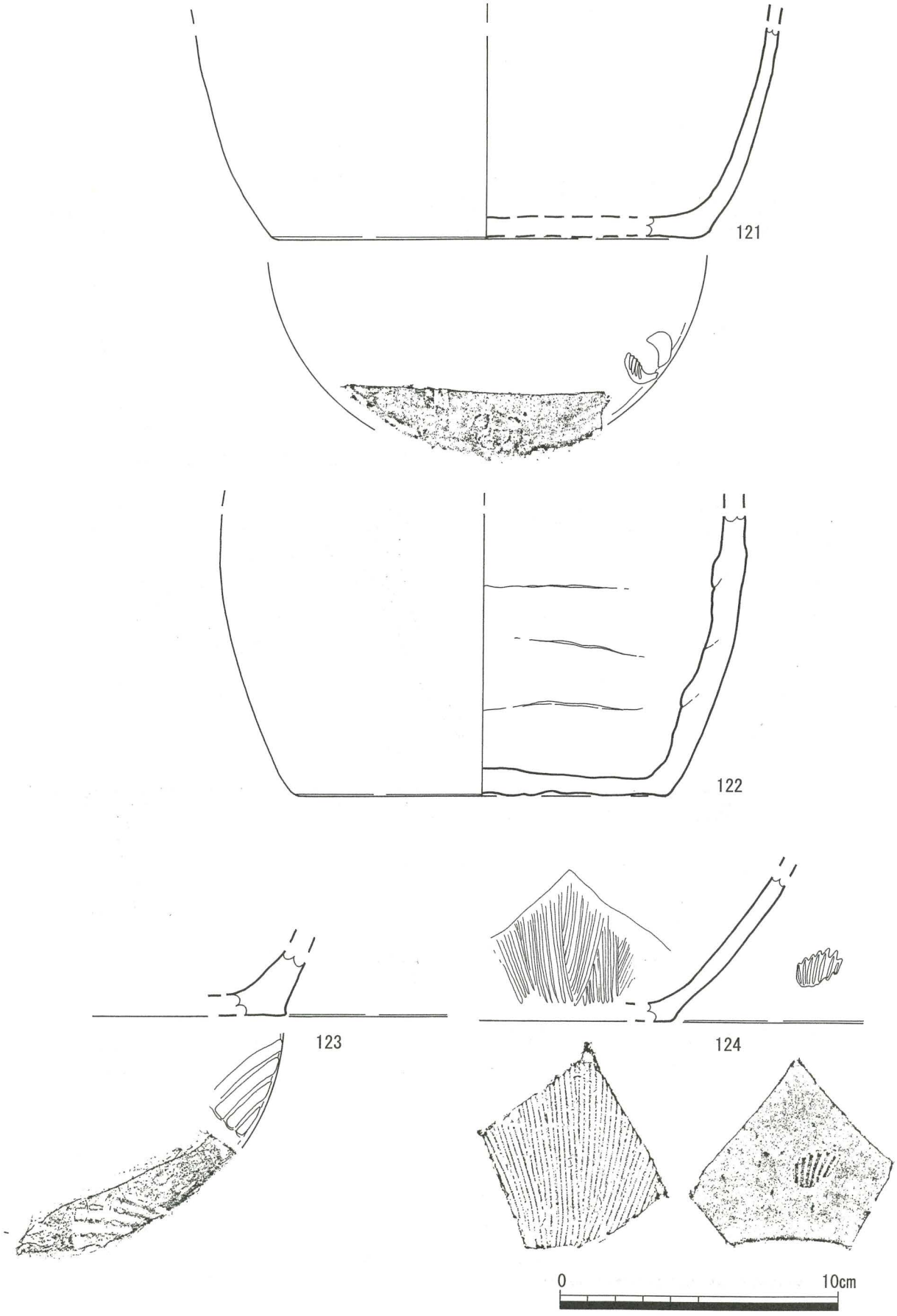


Fig.39　第３，４層出土遺物⑫(S=1/2)

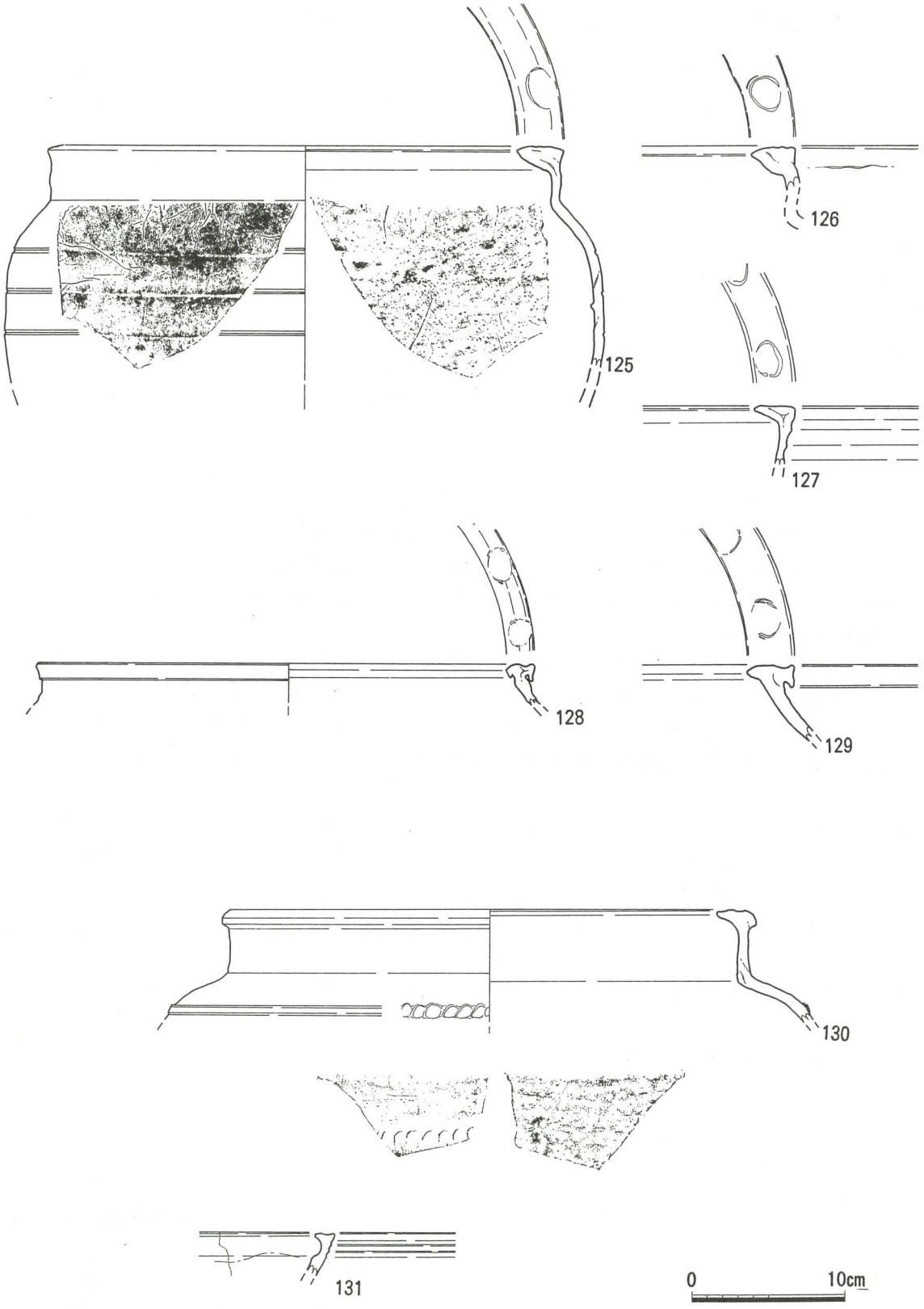


Fig.40　第３，４層出土遺物⑬(S=1/4)

106では蛇の目高台が見られるが，これから考えるに，肥前陶磁編年のⅡ期頃の所産の可能性も考えたい。

Fig. 37の108～111は肥前系擂鉢であると考えられるが，口縁部形態は，Fig. 36の106, 107と異なり，備前系擂鉢を意識したものとなっている。いずれも口縁部に鉄釉を施すもので，Fig. 36の106, 107と比較し櫛目の本数は少なく，太さも比較的太いものとなっている。Fig. 37の110は，櫛目は6＋α本と少なく，また、太い。Fig. 37の112は口縁部形態は，草木灰釉が認められる。櫛目は6本でやや太い。肥前系と考えられ，李祥古場窯など武雄系の擂鉢に酷似し，17世紀後半期が考えられる（武雄市教育委員会 1999)。

Fig. 37の113, 115は肥前系擂鉢の底部である。どちらも右回転の回転糸切りが認められる。内野山系の擂鉢では糸切り底の擂鉢が一般的であり，肥前系として概ね大過ないものと考える。

Fig. 37の114は薩摩，特に苗代川系の擂鉢であると考えられる。褐色釉が認められ，底面はフラットとなるものである。鹿児島市大龍遺跡Ｂ地点では，外反凸帯型口縁と分類され，概ね18世紀とされている（鹿児島市教育委員会 2001)。

Fig. 38の116, 118, 119は薩摩，特に苗代川系の陶器類であると考えられるものである。Fig. 38の116は鉢で黒褐色釉を施釉する。口縁部上面は無釉で貝目が認められる。Fig. 38の118は鉢で口縁部上面は無釉である。

Fig. 38の117は片口である。黒褐色釉を施釉し口縁部上面は無釉である。肥前武雄系と考えられる。

Fig. 38の119は壷で口縁部上面から外面体部には褐色釉が施釉されるが内面は無釉である。Fig. 38の120は鉢で，口縁部内外面は無釉であるが，外面は緑釉流しが認められる。これは薩摩では類例に乏しくまた施釉方法は異なったものであり，肥前系と考えておきたい。

Fig. 39の121～123は壷ないしは山徳利などの底部であると考えられる。いずれもフラットな底面で，指によるフキトリが認められることから，苗代川系と見てよいと考えられる。Fig. 38の121, 123は貝目が残存する。

Fig. 39の124は苗代川系の擂鉢と考えられ，特有の黒褐色釉を外面に施す。外面体部には貝目が残存する。

Fig. 40の125～130は甕である。Fig. 40の125～127, 130は肥前系の甕と考えられる。口縁部上面は無釉でいずれも貝目が残る。肥前陶磁編年Ⅱ期～Ⅲ期に該当するものと考えられ，概ね17世紀代の所産であろう（佐賀県教育委員会　1996;甕屋窯跡参考)。

Fig. 40の128, 129は半胴甕である。外内面に薩摩に特徴的なそば釉が施釉され口縁部上面は拭き取られている。薩摩の場合，施釉において，釉桶に横倒しにして回転させながら施釉されることから，内面に釉が及ぶことが多い。従って，拭き取りが充分なものが少ないことから，これらの半胴甕については薩摩の可能性が高い。しかし，初期の薩摩の形態は肥前や韓半島系の陶工が製作しているものであることから類似しているものが多いことを付記しておく。

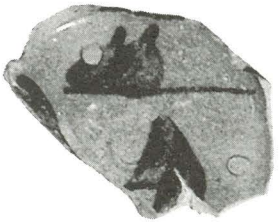
Fig. 40の130は外面体部に指頭による刻みが施される突帯が認められる。また，Fig. 40の125は外面に格子目叩き，内面に波状の当て具痕跡が残る。Fig. 40の130は内面に格子目叩きが残る。Fig. 40の128, 129も肥前武雄系甕口縁部である。口縁部上面は無釉でいずれも貝目が残る。Fig. 40の131も同様である。

これら生活雑器類について，基本的に苗代川系の成立以前については，肥前系陶磁がかなり流入していることは明白である。

Fig. 41の132は瓦器擂鉢である。外面きハケメが残り，内面はナデのち櫛目を施す。櫛目は5本で太い。口唇部はヨコナデによりやや窪む。　Fig. 41の133は瓦器壷である。直立する口縁部を有し，肩部外面に菊花のスタンプが見られる。Fig. 41の134は瓦器火鉢口縁部である。外面に突帯とスタンプが認められる。

文責　下山　覚

引用文献
小野正敏　1982 14～16世紀染付碗，皿の分類と年代，貿易陶磁研究，2，日本貿易陶磁研究会
森本朝子　1997 5）出土遺物の分類，博多60 福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集
上田秀夫　1982 14～16世紀の青磁碗の分類について，貿易陶磁研究，2，日本貿易陶磁研究会
大橋康二　1989 肥前陶磁，考古学ライブラリー55，ニュー・サイエンス社
間壁忠彦　1990 備前焼，考古学ライブラリー60，ニュー・サイエンス社
佐賀県教育委員会　1996 内野山北窯跡，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
武雄市教育委員会 1999　武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅵ，武雄市文化財調査報告書第39集
鹿児島市教育委員会　2001　大瀧遺跡Ｂ地点，鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(34)



Pl.1　第３層出土の唐津系鉄絵鳥文碗
内面見込み写真

次に、第３・４層から出土した石器について記す。

Fig. 42の135は，凹石である。大部分は欠損し，ａ面とｄ面左側部に使用面認められる。欠損面は，意図的な分割によるもので，何らかの石器として再利用を試みていると考えられる。推測の域をでないが，次のような石器の使用変遷が追えると考えられる。まず，ａ面・ｄ面左側部で認められる砥面があることから砥石として利用された後に，意図的な石器の再整形が施され，その際の剥離痕がａ面下部に認められる。再整形後，ａ面中央部で認められるように凹面が敲打により形成されている。凹面が深いことから，使用による敲打痕と考えるより，あらかじめ凹面を形成した後に，使用面として利用しているものと考える。

Fig. 42の136は，砥石である。ａ面下部はｂ面側からの加撃によって欠損している。砥面は，ａ・ｂ・ｄ・ｅ面の４面に認められる。砥面には，微細な削痕が複数条認められる。ｅ面上部には敲打痕が認められる部分があるが，砥面を切っていることから，そのｅ面の使用方法が類推できる。

Fig. 42の137は，砥石である。ａ面右側部は欠損しており，その欠損面の観察から，ａ面側からの加撃によって欠損していることが確認できる。砥面は，ａ面中央部，ａ面上部面（ｅ面），ｃ面の三面に認められる。ａ面中央部，ａ面上部面（ｅ面）の二面は，ほぼ平坦面であり若干削痕が数条認められる。また，ｃ面は，砥面として利用された後に，敲打痕と３㎜ほどの削痕が残る利用方法がされている。後者の具体的な利用方法は不明であるものの，先端が尖った棒状のもので加撃された痕跡と考えられる。なお，ｂ面には敲打痕が認められる。敲打痕は，直径２～５㎜程度のものでほぼ円形を呈している。

Fig. 43の138は，凹石である。ａ面中央部に敲打による凹面が直径約３㎝前後の不整形な円形を呈している。凹面が認められるａ面は，ほぼ平坦面をそのまま利用している。凹面以外の平坦面には磨面などは認められない。凹石は，板状の凝灰岩を用い，ほぼ方形状になるように周辺を荒割りによって整形している。

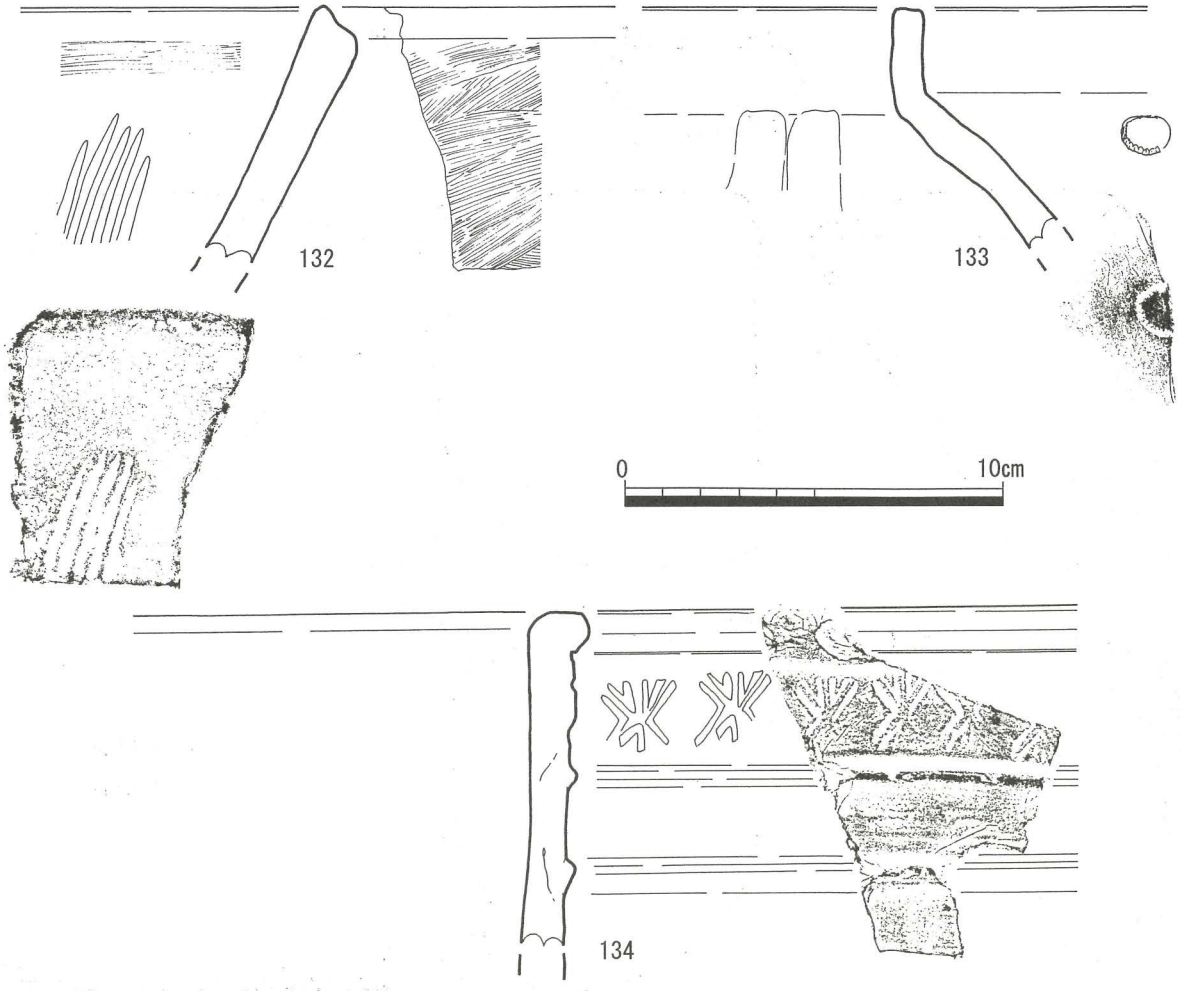


Fig.41　第３，４層出土遺物⑭(S=1/2)

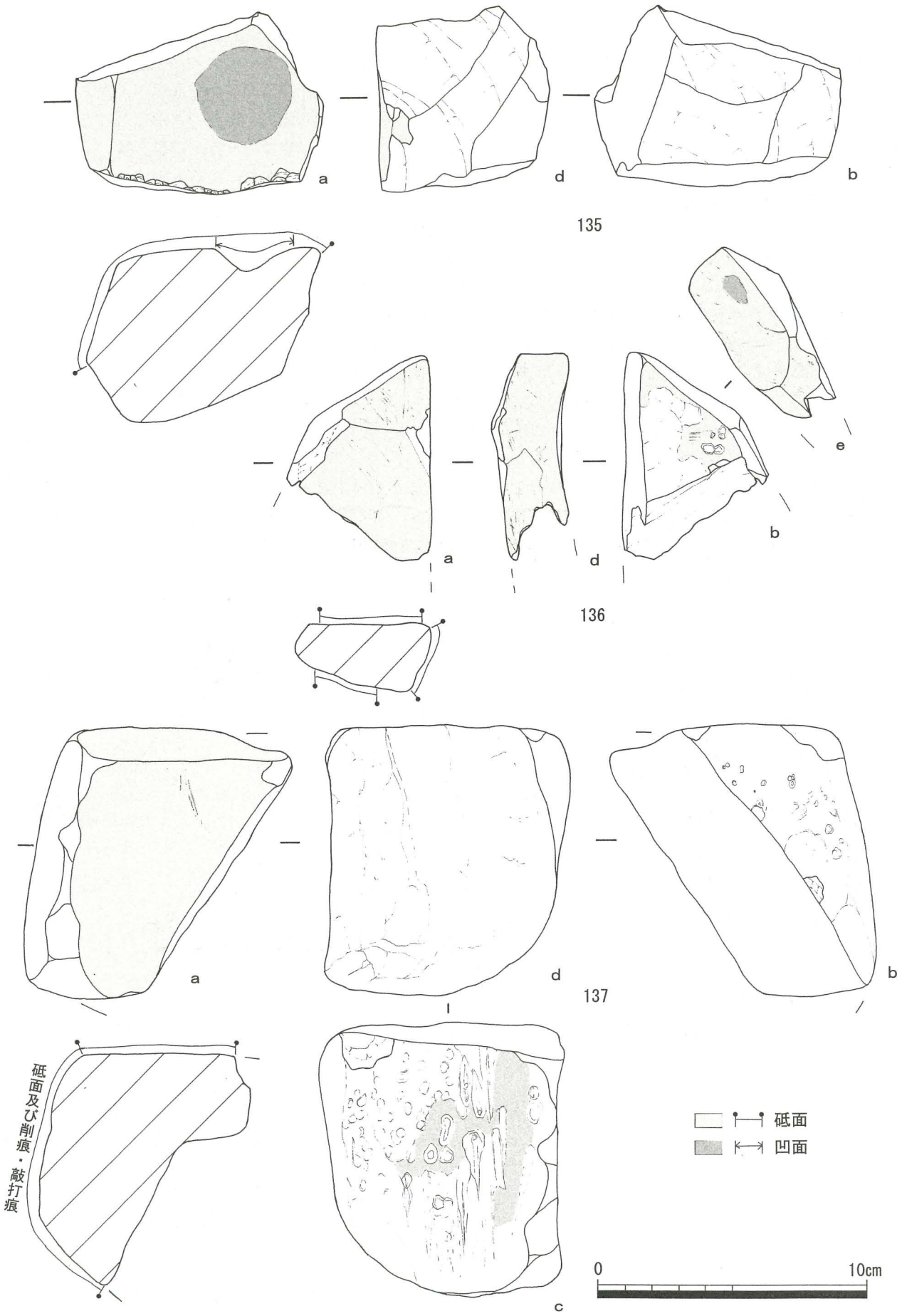


Fig.42　第３，４層出土遺物⑮(S=1/2)

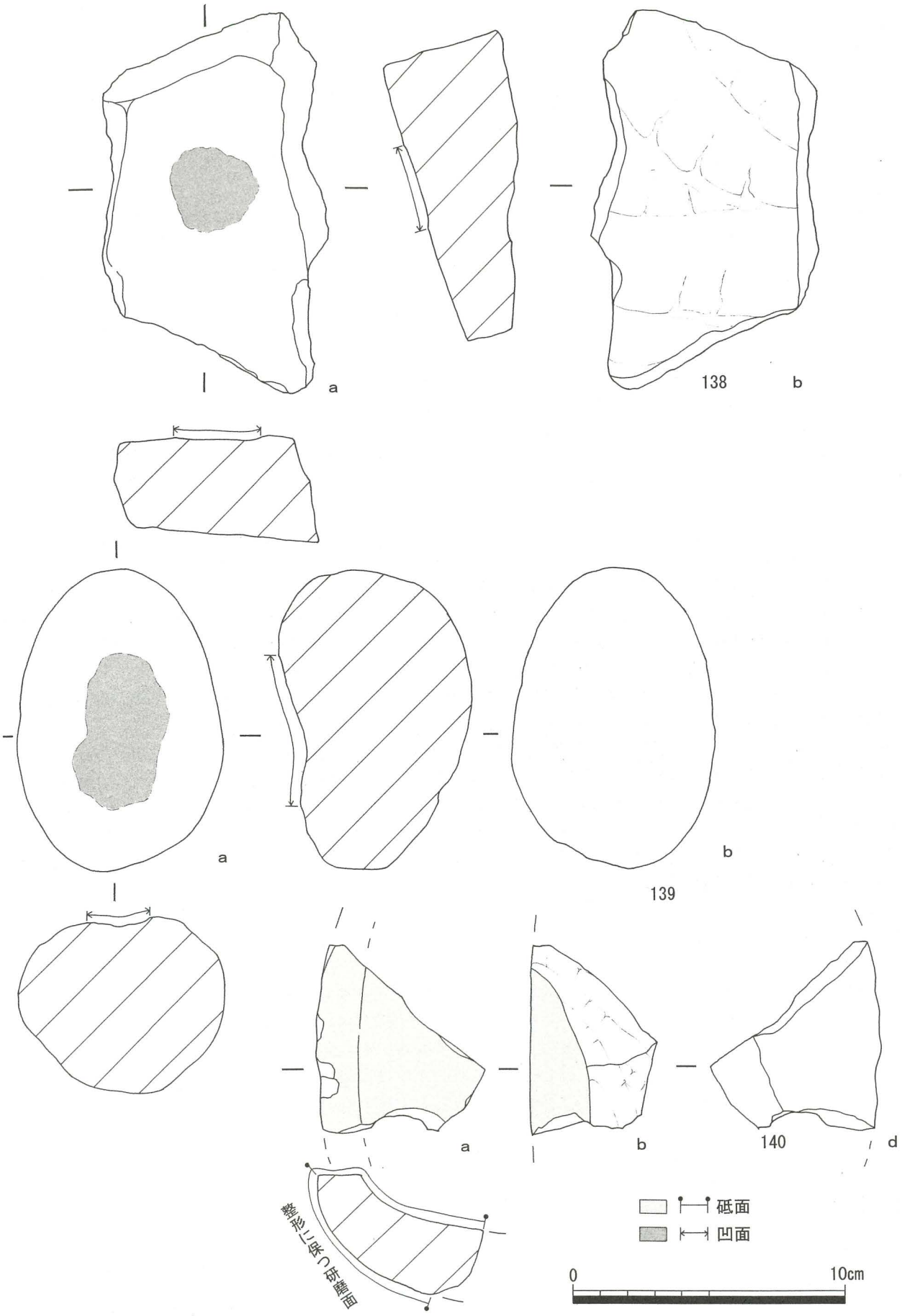


Fig.43　第３，４層出土遺物⑯(S=1/2)

Fig.43の139は，円礫をそのまま用いた凹石である。面的にやや平坦な部分を使用面として用いている。凹面は敲打痕によって形成されており，長軸5.7cm，短軸３cmを測る楕円形を呈している。

Fig.43の140は，茶臼である[1]。大部分は欠損しているものの，楕円形の浅い石皿状を呈する。

Fig.44の141は，土製の鞴の羽口の破損品である。基部および先端部は欠損している。基部側の推定直径は約7.5cmである。通風孔部は，推定復元で約2.3cmほどの直線状の穿孔である。この大きさから，中世後期から近世初期に帰属するものと考えられる[2]。先端部外面は，被熱により他の面より変色しており褐灰色・にぶい黄橙色を呈している。また，外面には全体にヒビが貫入している。

Fig.44の142は，坩堝と考えられる破片である。推定口径は約17.7cm，器高は約15.8cmを測る。内面に注ぎ口があり，内外面とも丁寧に整形されている。内面の一部に黒色に変色した部分がある。

Fig.44の143は，円盤形を呈した石製品である。凝灰岩を素材とし円形に整形している。直径が15.7cmのほぼ円形であることから，何らかの規格に基づいて整形されたと考えられるが，目的性については不明である。この石器は，ａ面・ｂ面の周縁付近に被熱により黒色に変色した部分が認められる。ａ面・ｂ面の周縁付近のみに認められることから，石器の利用方法を推測する上で，形状と共に鍵になるであろう。また，ｂ面左側部分が欠損し，ｂ面下部の被熱による変色範囲を観察すると，ｂ面左側部分の欠損後も欠損以前と同様な使用方法が行なわれていることが看取できる。同様な形態の事例増加を待ちたい。

Fig.45の144は，平面が楕円形を呈した椀形鍛冶滓で，完形である。上面・下面とも植物繊維（木炭？）と0.2～1.8cmの礫が固着している。下面には半球状の底部を持つ。上面中央部は凹状を呈し，流動状の表面で気泡の穴が数ヶ所認められる。断面観察のとおり，上面の周縁は中央部と比べて盛り上がっている。

Fig.45の145は，平面が楕円形を呈した椀形鍛冶滓で，破損部は認められない。上面には，0.2～0.6cmの礫が固着し，上面上部には特に礫が多く固着している。上面中央部左側面には長軸約2.3cm，短軸約1.5cm，深さは約1.4cmの楕円形の凹面が認められる。側面・下面には，植物繊維（木炭？）が多く固着している。

Fig.45の146は，平面が楕円形を呈した椀形鍛冶滓で，破損部は認められない。記載する鍛冶滓の中で厚みが最も厚く，約６cmを測る。上面は，流動状の表面で中央に長軸約３cm，短軸約２cm，深さは1.3cmの楕円形の凹面が認められる。上面右側部には，植物繊維（木炭？）が固着している。下面はなめらかな半球状で，二段のこぶ状を呈しており，鍛冶滓が流固する土坑の形状を反映しているものと考えられる。

Fig.45の147は，平面が不整形な楕円形を呈した椀形鍛冶滓で，完形品である。上面は流動状の表面で気泡の穴が複数認められ，若干窪んでいる。上面・下面とも小礫と植物繊維（木炭？）が固着している。

Fig.45の148は，平面は不整形を呈した鍛冶滓である。側面と下面が破損している。上面左側部の破損面は，ほぼ平坦になっており，断面観察からも看取できる。上面は全体的に凹面で，流動状の表面を呈し，気泡の穴が数ヶ所認められる。上面右端端部には，砂と小礫が固着している。下面は全面が破損面のため，植物繊維（木炭？）や小礫などの固着は認められない。下面の表面は流動状で凸凹している。

Fig.46の149は，磨面のある石製品である。大部分は欠損しているが，円形の浅い石鍋状を呈し，断面観察から，円筒形を呈している石製品と考えられる。

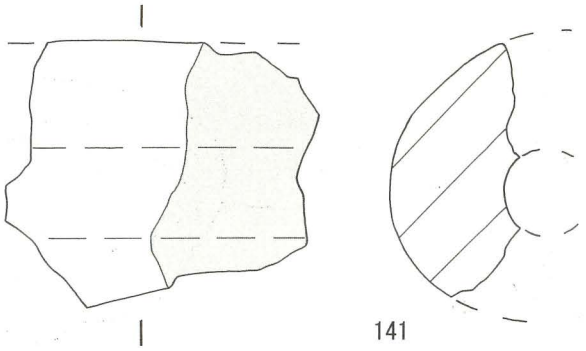
Fig.46の150は，軽石製加工品である。ａ面上部・下部は欠損し，欠損以前の形状は楕円形を呈していたと推測できる。ａ面下部は，ｂ面側からの加撃によるもので，ａ面上部はもｂ面側からの加撃による欠損である。ａ面左側部・同面右側部（ｄ面）・ｂ面に磨面が認められる。中世に帰属する鍋掻きと考えられる[3]。

Fig.46の151は，扁平打製石斧である。刃部はａ面・ｂ面の両面側からの加撃により欠損している。両面の観察から次のような製作過程が看取できる。ａ面とｂ面中央部に，素材時の剥離面が認められる。その素材に対して，ａ面・ｂ面の両面側からの加撃によって大まかに整形している。その後，細かな剥離により全縁の整形を施し，形状を整えている。細かな剥離により，扁平打製石斧をソケットに装着する為のものと考えられる抉入が認められる。なお，図示している範囲において，装着痕と考えられる稜線の潰れと磨面が認められる。流れ込みの遺物と考えられる。

Fig.46の152は，板状を呈した砥石である。断面的には，使用の頻度差か不整形な菱形を呈する。ａ面上部には，ｂ面側からの加撃による剥離面が大きなものが２枚，細かなものが11枚認められる。２枚の大きな剥離痕上にも磨面が認められることから，砥石として整形する段階の剥離痕か，あるいは再整形を目的とした剥離痕なのかは峻別がつかない。他の部位にも細かな剥離痕が認められるが，意図的なものではなく使用時のアクシデントなどによるものと考えられる。砥面はａ・ｂ・ｃ・ｄ面で認められ，各面とも若干凹面であり，使用による結果と考えられる。また，各面には，多方向からの磨痕が線状に認められる。

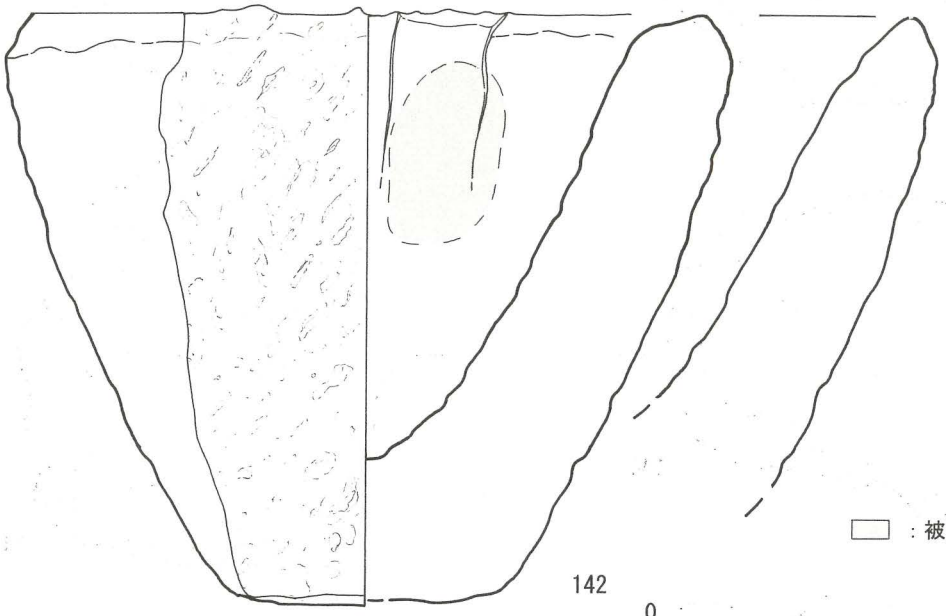
文責　鎌田洋昭

註　(1),(2),(3)　上田　耕氏のご教示によるものである.



141

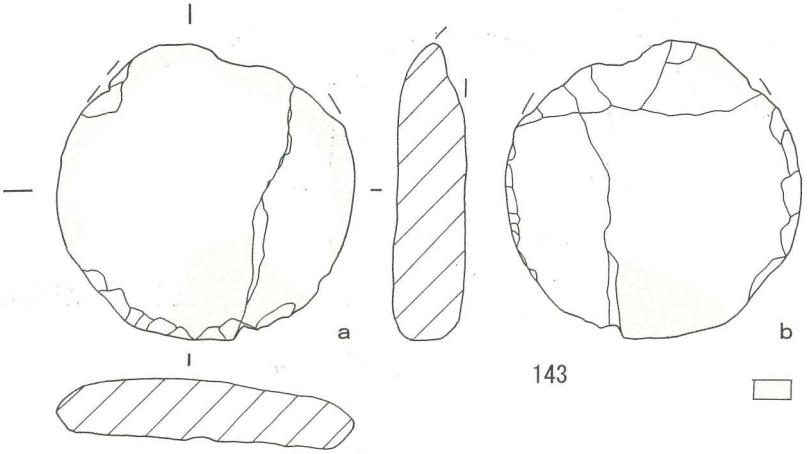
：被熱による変色



142

：被熱による変色

0　10cm



143

：被熱による変色

0　20cm

Fig.44　第３，４層出土遺物⑰（S=1/2，1/4）

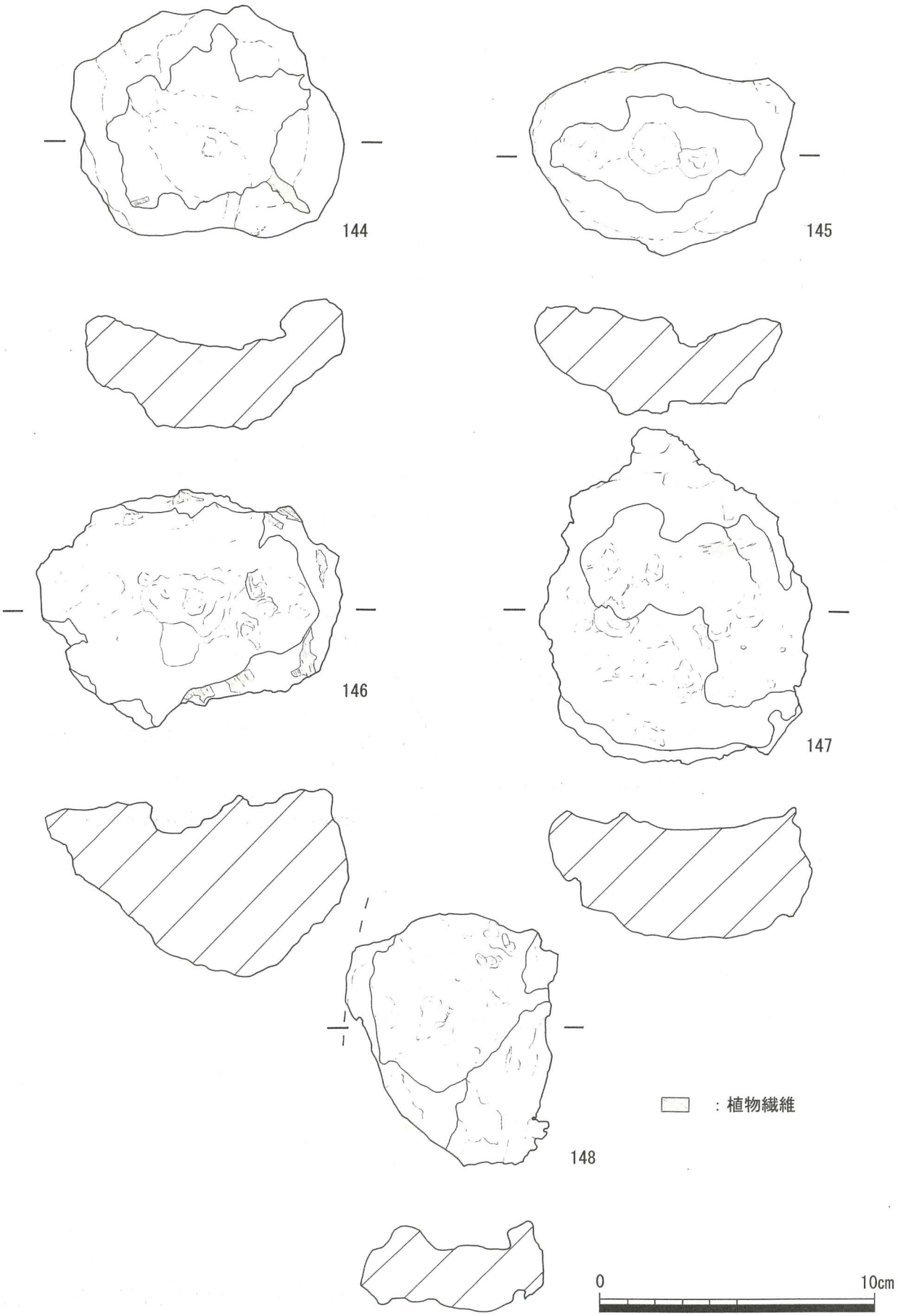


Fig.45　第３，４層出土遺物⑱（S=1/2）

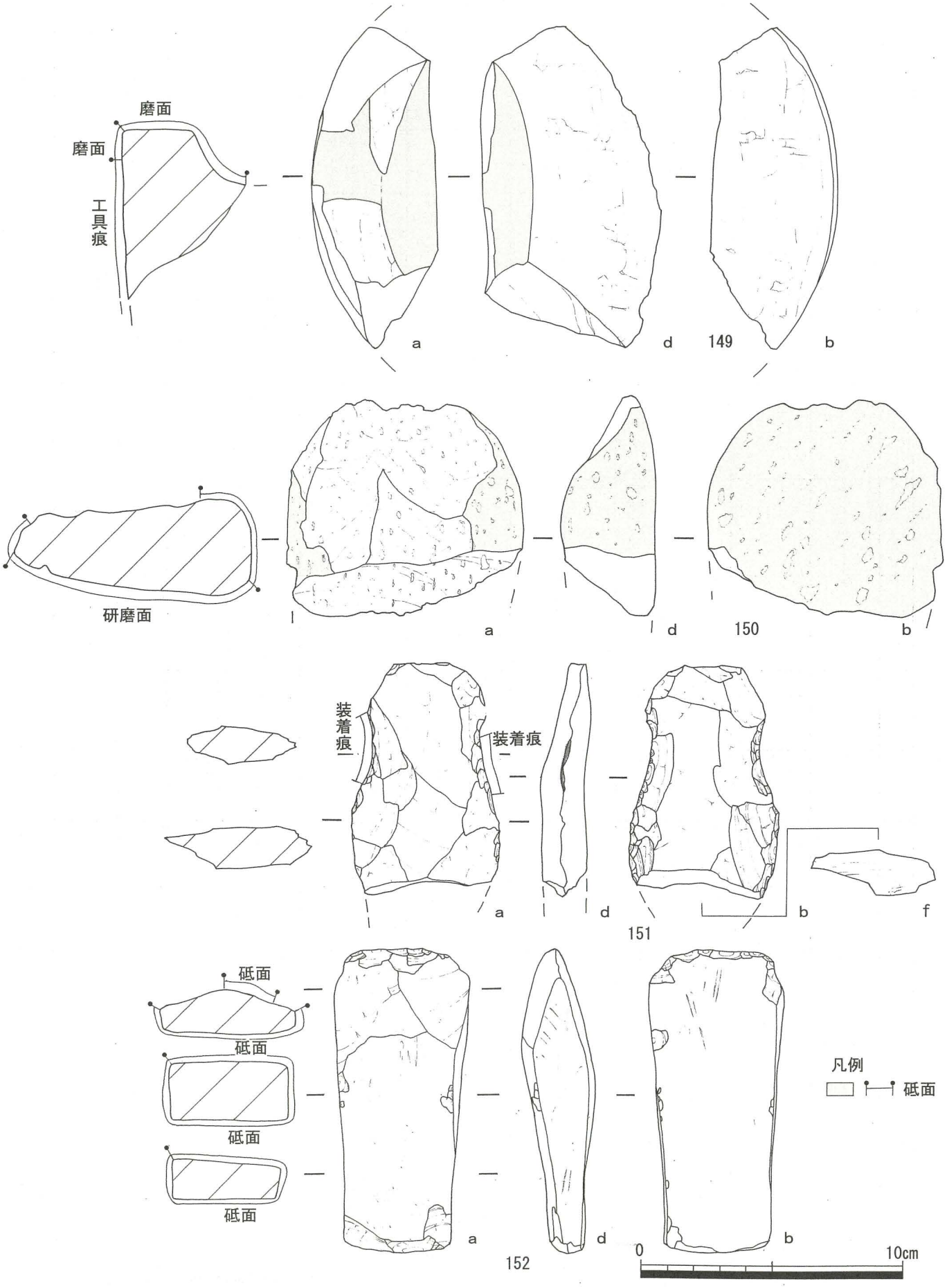


Fig.46　第３，４層出土遺物⑲(S=1/2)

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色 外	色 内	色 肉	色 他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
1	551	曽畑式土器	破片	胴部	5YR5/6	7.5YR7/4	10YR4/3		細砂粒を含む 微砂粒を含む 小礫を含む	カ・黒・ウンモ	内・不明 外・沈線文　外面横方向二条以上沈線 縦方向沈線　1cm弱のアヤ杉文	良好 傾きギモン	7		9
2	418	剥片	長・2.3cm 短・2.9cm 厚・1.0cm 重・4.42g							黒曜石			13		7
3	375-3	甕形土器 (弥生)	口～胴 1/4残存	口縁部～胴部	7.5YR3/2 10YR3/1	7.5YR5/4 10YR3/2	2.5Y4/1	口唇 7.5YR5/3	砂粒を含む 細砂粒を含む 微砂粒を含む	セ・白・黒	内・ナデ、指頭圧痕 外・ナデ、突帯ナデ, 口唇・ナデ、キザミ	良好 反転	11	375-4.5.6.7.8.	7
4	375-2	甕形土器 (弥生)	口～胴　1/4残存　径33cm 高25cm以上	口縁部～胴部	5YR4/4 7.5YR3/2	5YR4/4 10YR3/2	7.5YR4/3	口唇 7.5YR4/3	細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・工具によるナデのちナデ、ユビオサエのちナデ 外・工具によるナデのちナデ、ナデヨコナデ 口縁・ヨコナデ	良好 反転	11		7
5	309	甕形土器 (弥生)	底 1/1残存	底部	7.5YR5/4	10YR2/1	2.5YR4/3	底 7.5YR5/4	砂粒を含む 細砂粒を含む 微砂粒を含む	白・黒	内・焦げ付き付着 外・ナデ 底・一部指頭圧痕	良好	11	451	7
6	621	甕形土器 (弥生)	破片	口縁部～突帯部	10YR3/1	10YR4/2	2.5Y5/4	口唇 7.5YR4/3 10YR3/1	細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・金ウンモ	内・ユビオサエのちナデ 外・ナデ、ヨコナデ、ナデ 口・工具によるヨコナデ	良好 傾きギモン	7		9
7	643	甕形土器 (弥生)	破片	口縁部	10YR4/2	7.5YR4/2	10YR5/3	口唇 10YR3/1	微砂粒を若干を含む	カ・白・黒・金ウンモ	内・ユビオサエ、工具によるナデのちナデ 外・工具によるナデのちナデ、ナデ、ヨコナデ 口・工具によるナデのちナデ	良好 傾きギモン	7		9
8	425	甕形土器 (弥生)	破片 上半一部残存	口縁部～胴部	5YR4/3	5YR5/4	10YR5/4	口唇 10YR5/3	細砂粒を含む 微砂粒を含む	赤	内・ナデ、接合痕、ナデ 外・工具によるナデ、ヨコナデ、スス付着 口・ナデ、突帯 口縁上面に３本突帯	良好	11		7
9	480	甕形土器 (弥生)	破片 上半一部残存	口縁部～胴部	7.5YR4/3	7.5YR5/4	10YR6/3	口唇 5YR5/4	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・白・黒・金ウンモ	内・ヨコナデ、指頭圧痕 外・ヨコナデ、工具によるヨコ方向のナデのちナデ 口・ヨコナデ	良好	11		7
10	373	甕形土器 (弥生)	破片 上半一部残存	口縁部～胴部	7.5YR5/4	5YR5/6	7.5YR6/4	口唇 7.5YR5/4	細砂粒を含む 微砂粒を含む	白・黒・金ウンモ	内・ナデ 外・ナデ 突・ヨコ方向ナデ 口唇・ナデ	良好	11		7
11	604	甕形土器 (弥生)	破片 上半一部残存	口縁部～胴部	2.5Y4/2	2.5Y4/2	10YR5/3	口唇 5YR5/4	砂粒を含む 細砂粒を含む	白・黒・金ウンモ	内・ハケメ 外・ヨコ方向のナデ 突・はりつけ突帯ヨコナデ 口・ナデ	良好 傾きギモン	7	605	9
12	一般	甕形土器 (弥生)	破片	口縁部	5YR5/4	5YR4/4	5YR4/4	口唇 5YR4/4	細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・金ウンモ・他	内・ユビオサエ、ナデ 外・ナデ 口・ヨコナデ	良好 傾きギモン	7		9
13	547	甕形土器 (弥生)	破片	口縁部	7.5YR4/2	7.5YR6/6	2.5Y5/2	口縁 10YR5/3	細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ユビオサエ、工具によるナデのちナデ 外・ナデ、ハケメのちナデ 口・ナデ	良好 傾きギモン	7		9
14	513	甕形土器 (弥生)	破片	口縁部	10YR3/1	10YR5/3	10YR5/3	口縁 7.5YR6/4	細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ナデ 外・ナデ 口・ナデ、ヨコナデ	良好 傾きギモン	7		9
15	534	甕形土器 (弥生)	破片	口縁部	10YR3/1	10YR4/3	10YR5/2	口縁 10YR4/2	微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ナデ 外・ナデ 口・ヨコナデ	良好 傾きギモン	7		9

Tab.5　出土遺物観察表①

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色 外	色 内	色 肉	色 他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
17	444	高杯形土器 (弥生)	破片	脚部	10R4/4		2.5YR5/6	脚内 2.5YR5/6	砂粒を若干含む 細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む 砂粒を含む 微砂粒を含む。	カ・セ・白・黒・他	外・ミガキ、赤色塗彩 脚内・ナデ	良好	7		9
18	524	壷形土器 (弥生)	口 3/3残存	口縁部	7.5YR4/3	7.5YR5/3	7.5YR5/3		砂粒を含む	白・黒	内・ヨコ方向のナデ 外・ナデ 口・ナデ	やや良好	7		9
19	556	高杯形土器 (弥生)	口 1/5程度残存	口縁部	10YR5/3	10YR5/3	5PB3/1	口縁 10YR5/1	砂粒を含む 細砂粒を含む 微砂粒を含む。	白	内・ケズリのちナデ、ナデ 外・赤色塗彩、ナデ 口・ていねいなナデ、キザミ	良好 傾きギモン	7	558	9
20	640	壷形土器 (弥生)	破片	肩部～胴部	10YR6/3	10YR6/3	7.5YR5/1		細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・工具によるナデのちナデ 外・ナデ、くし状工具による波状文、沈線	良好 傾きギモン	7		11
21	254	甕形土器 (弥生)	底 1/1残存 底径 9.6cm	底部	5YR5/4 7.5YR3/1	7.5YR4/2	10YR3/1	底 7.5YR5/3	砂粒を若干含む 細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ハクラク 外・工具によるナデのちナデ 底・ナデ	良好	3		9
22	375-1	壷形土器 (弥生)	底 1/1残存 底径5.8cm	底部	5YR4/3 7.5YR3/1	5YR4/4	5YR4/3	底 5YR4/4	砂粒を若干含む 細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・白・黒・金ウンモ・他	内・ナデ 外・ミガキ、ナデ 底・ナデ	良好	11	376 455 457 531	9
23	405	壷形土器 (弥生)	底 1/1残存 底径7.9cm	底部	7.5YR4/3 N3/0	10YR5/3	10YR5/3	底 7.5YR4/3	砂粒を若干含む 細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・マメツ 外・工具によるナデのちナデ 底・ナデ	良好	11		7
24	33	壷形土器 (弥生)	底 1/1残存 底径5.8cm	底部	5YR4/4	7.5YR4/3	7.5YR4/1	底 5YR4/3	砂粒を若干含む 細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ナデ 外・ナデ 底・ナデ	良好	4		7
25	733	壷形土器 (ミニチュア)	底 1/1残存 底径4.8cm	底部	5YR4/1	7.5YR4/3	5YR4/4	脚内 7.5YR5/4	砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ナデ 外・ナデ、ヨコナデ 底・ナデ	良好	7		9
26	474	異形石器	長・2.8cm 短・5.2cm 厚・0.9cm 重・1.05g							チャート			11		7
27	479	扁平打製石斧	長・6.3cm 短・4.3cm 厚・1.3cm 重・32.76g							安山岩			11		7
28	660	凹石	長・10.0cm 短・8.0cm 厚・4.0cm 重・610g							安山岩			7		9
29	一般	白磁皿	破片	口縁部	10GY7/1	10GY7/1	2.5Y7/1				内・透明釉 外・透明釉 口・無釉(ロウガケ)	良好 精良	3		9
30	一般	白磁皿 (輸入)	破片	口縁部	N8/0	N8/0	2.5N7/1				内・白磁 外・白磁 口・白磁	良好 精良	3		9
31	一般	白磁皿	破片	口縁部	2.5GY6/1	2.5GY6/1	2.5Y5/1					良好 精良 傾き若干ギモン	3		9

Tab.6 出土遺物観察表②

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色 外	色 内	色 肉	色 他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
32	一般	白磁皿 (端反皿 輸入)	破片	口縁部	2.5GY6/1	2.5GY6/1	2.5GY6/1				内・白磁透明釉 外・白磁透明釉 口・白磁透明釉	良好 精良	3		9
33	一般	白磁皿 (輸入)		口縁部	5G7/1	5G7/1	N6/0				内・白磁 外・白磁 口・白磁	良好 精良	3		9
34	一般	白磁皿 (輸入)	口～底 1/6残存	口～底	N8/0	N7/0	N7/0	脚内 N7/0			内・白磁 外・白磁 脚内・白磁 畳付・無釉ロウガケ		3		9
35	144	白磁皿 (輸入)	口 1/6残存	口～底	N7/0	N7/0	2.5Y8/1	脚内 N6/0			内・無色釉 (白磁) 外・無色釉 (白磁) 脚内・無色釉 畳付・無釉ロウガケ	良好 精良	3		9
36	99	白磁皿 (輸入)	破片	底部	N7/0	N8/0	N7/0	脚内 N7/0			内・白磁 外・白磁 脚内・白磁 畳付・無釉 底部高台の傾き内ころびの状況 皿IX類に該当する	良好 精良	3		9
37	一般	白磁碗 (輸入)	破片	口縁部 (玉線)	N7/0	2.5Y7/1	5Y7/1				内・白磁透明釉 外・白磁透明釉 口・白磁透明釉	良好 精良	3		9
38	一般	白磁碗 (輸入)	底 1/4残存	底部	10YR6/2	5Y6/1	5Y6/1	脚内 10YR7/2			内・透明釉 外・回転ナデ無釉 脚内・回転ヘラケズリ、無釉	良好 精良	3		9
39	P-5	磁器 青百磁輪花皿 (輸入or肥前)	口 1/5残存 底 2/3残存	口～底	10Y7/3	10Y7/3	2.5Y6/3	脚内 7.5YR4/2			内・青白色釉 外・青白色釉 脚内・無釉、ロウガケ 畳付・無釉、ロウガケ 貫入あり 輸入青白磁写の可能性あり	良好 精良	4		9
40	一般	白磁皿 (輸入)	底 2/3残存	底部	10GY8/1	10GY8/1	10GY8/1	底 5Y7/1			内・透明釉 外・無釉 底・無釉	良好 精良磁胎	3		9
41	一般	白磁碗 (輸入)	破片	胴部	5Y6/2	2.5Y6/2	7.5Y7/1				内・透明釉 外・透明釉 内面付部に区画線有	良好 精良 黒ゴマ有	3		9
42	一般	青磁碗 (輸入)	破片	口縁部	10Y5/2	10Y5/2	2.5Y6/2	呉須 10Y4/2			内・緑釉 外・緑釉、鍋蓮弁文有り	良好 精良	3		9
43	一般	青磁盤 (輸入)	破片	口縁部	10Y5/2	10Y5/2	2.5Y6/1				内・青磁、櫛書文有り 外・青磁	良好 精良	3		9
44	一般	青磁碗 (輸入)	破片	胴部	7.5Y5/2	7.5Y5/2	10YR6/1				内・緑釉、草花文 外・緑釉	良好 精良	3		9
45	一般	青磁碗 (輸入)	破片	胴部	7.5Y6/2	7.5Y6/2	5Y7/1				内・緑釉、櫛書文 外・緑釉、雲文	良好 精良	3		9
46	269	青磁碗 (輸入)	底 1/3残存	底部	10Y5/2	10Y5/1	2.5Y6/1	脚内 5Y4/2			内・緑釉 外・緑釉 脚内・緑釉、無釉 畳付・緑釉	良好 精良 黒ゴマ有り	3		9
47	242	磁器 赤絵瓶 (輸入か？)	口 1/1残存 底 1/1残存	口～底	5Y8/1	10GY2/1	10Y7/1	脚内 5Y8/1 絵付 赤10R3/1 黄2.5Y6/3 その他銀色			内・回転ヘラケズリ、無釉 外・白磁、絵付 (基本色赤絵) 脚内・無釉 畳付・無釉 「巴」文は円界線に3個配されている一つは黄、一つは銀色、「喜」文は２ヶ所とも赤絵	良好 磁胎に上黒色粒を含む	3	262 276	9
48	748	磁器 盤 (輸入か？)	破片	口縁部	10Y7/1	2.5GY7/1	10YR7/1	呉須 5B3/1			内・無色釉 外・無色釉、彫り込み無色釉 外面胴部彫り込み 内面貫入あり 呉須はややくすんだ青色に発色	良好 精良磁胎 傾きギモン	4		9
49	40	磁器皿 (輸入)	破片 底 1/2残存	底部	10GY8/1	10G7/1	7.5Y8/1	脚内 10GY8/1 呉須 5PB2/1			内・透明釉 草花文 (内面見込み) 唐草文 (内面倭部) 界線4本 外・透明釉 界線2本 脚内・透明釉 畳付・ロウガケ	良好 精良 黒ゴマ有り	3		9
50	一般	磁器皿 (輸入)	底 1/3残存	底部	5G7/1	5G7/1	N7/6	脚内 10GY5/1 呉須 10BG3/1			内・透明釉 界線3本 外・透明釉 界線3本 脚内・透明釉 畳付・無釉 ロウガケ 草花文小皿	良好 精良 黒ゴマ有り	3		9

Tab.7 出土遺物観察表③

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色　外	色　内	色　肉	色　他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
52	123	磁器皿	底 1/1残存	底部	2.5Y6/1	2.5Y7/2	10YR7/1	底 2.5Y7/2			内・透明釉、貫入有り 外・透明釉、無釉、回転ヘラケズリ 脚内・無釉、回転ヘラケズリ 畳付・無釉、回転ヘラケズリ	良好 精良な磁胎	3		9
53	193	磁器碗 (輸入)	破片	口縁部	10G7/1	5G7/1	5Y8/1	呉須 5B3/1			内・透明釉 外・透明釉	良好 精良 傾きギモン 黒ゴマ有り	3		9
54	一般	磁器碗 (輸入)	破片	口縁部	5B7/1	5G7/1	5Y7/1	呉須 5B4/1			内・透明釉 外・透明釉	良好 精良 傾きギモン 黒ゴマ有り	3		9
55	一般	磁器碗 (輸入)	底 1/5残存	底部	5G7/1	5G7/1	2.5Y7/1	脚内 5B3/1 呉須 5B3/1			内・無色釉　見込みに界線2本　草花文 外・無色釉　界線2本 脚内・無色釉 畳付・無釉	良好 精良 黒ゴマ有り	3		9
56	一般	磁器碗 (輸入)	破片	底部	7.5GY5/1	/10GY	2.5Y6/2	脚内 10GY7/1 呉須 5PB4/1			内・透明釉　見込みに2本の界線と草花文 外・透明釉　付部に唐草文と1本の界線 脚内・透明釉 畳付・無釉、ロウガケ	良好 精良 黒ゴマ有り	3		9
57	一般	磁器碗 (輸入)	底 1/4残存	底部	10Y7/2	7.5Y6/1	5Y7/1	脚内 7.5Y6/1 呉須 5B4/1			内・透明釉 外・透明釉 脚内・透明釉、スナメ	良好 精良 黒ゴマ有り	3		9
58	18	磁器皿	口 1/8残存	口～底	10BG7/1	5B7/1	5Y7/1	脚内 10BG7/1 呉須 5G3/1			内・透明釉 外・透明釉 脚内・透明釉 畳付・無釉、スナメ 菊花文染付or草花文	良好 精良	3	302	9
59	一般	磁器皿	口 1/3残存	口～底	2.5Y7/1	2.5Y6/1	5Y6/1	脚内 2.5Y6/1 呉須 5Y3/1			内・無色釉 外・無色釉 脚内・無色釉 畳付・無釉、スナ付 草花文皿　呉須は黒に近い磁胎は灰色で全体的に灰色に発色	良好 精良	3		9
60	77	磁器 (染付　花文碗)	底 1/1残存	底部	5Y8/1	5Y8/1	2.5Y7/1	脚内 5Y8/1 呉須 5Y8/1			内・透明釉 外・透明釉 脚内・透明釉 畳付・無釉、ロウガケ	良好 精良	4		7
61	331	磁器 (染付 草花文皿)	底 1/4残存	底部	2.5Y7/1	2.5Y6/1	5Y6/1	脚内 2.5Y6/1 呉須 10YR3/1			内・透明釉 外・透明釉 脚内・透明釉 畳付・無釉、ロウガケ 呉須は青味なく黒緑色/高台畳付にスナメ	良好 精良	3		9
62	一般	磁器 (端反の皿)	破片	口縁部	10YR7/3	10YR7/3	10YR6/2				内・透明釉 外・透明釉	良好 精良	3		9
63	23	磁器 (染付皿 肥前系)	口 若干残存 底 1/1残存	口～底	2.5GY7/1	2.5GY6/1	2.5Y7/1	脚内 10YR6/2			内・透明釉、ロウガケ、蛇の目、無釉　見込みに蛇の目釉はぎスナメ有り 外・透明釉、無釉 脚内・無釉、カキトリ 畳付・無釉、無調整	良好 精良	3		9
64	94	磁器 (染付 山水文碗)	口 1/4残存	口縁部	10GY8/1	10GY8/1	2.5Y7/1	呉須 5PB3/1			内・透明釉 外・透明釉	良好 精良	4		7
65	256	磁器 (染付碗)	口 1/16残存 底 1/1残存	口～底	10G7/1	10G7/1	N7/0	脚内 10G7/1 呉須 5PB3/1			内・透明釉、貫入あり 外・透明釉、貫入あり 脚内・透明釉 畳付・無釉、スナメ 草花文染付碗　貫入あり	良好 精良 黒ゴマ？	3		9
66	一般	磁器 (染付菊花文碗)	底 1/2残存	底部	N7/0	N7/0	2.5Y7/1	脚内 N7/0 呉須 5B3/1			内・透明釉 外・透明釉 脚内・透明釉 畳付・無釉、ロウガケ 高台畳付部にスナメあり	良好 精良 反転	3		9

Tab.8　出土遺物観察表④

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色 外	色 内	色 肉	色 他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
67	一般	磁器碗 (肥前系)	底 1/1残存	底部	10Y7/1	2.5GY7/1	7.5Y8/1	脚内 10Y7/1 呉須 5PB3/1			内・透明釉　内面見込　草花文 外・透明釉　外面付部　草花文 脚内・透明釉 畳付・無釉	良好 精良	3		9
68	328	磁器 (染付網目文碗 肥前系)	口 1/8残存	口縁部	10GY8/1	10GY8/1	N8/0	呉須 2.5GY 4/1			内・透明釉 外・透明釉　一重網目文	良好 精良 反転	3		9
69	322	磁器 (染付網目文碗 肥前系)	口 1/4残存	口縁部	5G7/1	5G7/1	2.5Y8/1	呉須 5GY5/1			内・透明釉 外・透明釉　一重網目文	良好 精良 反転	3		9
70	232	磁器碗 (肥前、内野山系)	口 1/8残存	口縁部	10Y4/2 10BG4/1	2.5Y5/4 2.5Y4/4	10YR7/1				内・回転ナデ銅緑釉 外・回転ナデ銅緑釉、回転ヘラケズリ銅緑釉	良好 精良な磁胎 径は若干ギモン	3	233 234 248 264 273	9
71	137	磁器碗 (絵唐津)	破片	口縁部	10YR6/2	2.5Y5/2	10YR6/2				内・無色釉、貫入あり 外・無色釉、貫入あり、無釉	良好 精良　やや褐色の磁胎　傾き若干ギモン	3	156 170	9
72	一般	磁器碗	底 1/1残存	底部	5G5/1 2.5GY5/1	7.5Y6/1	2.5Y6/1	脚内 2.5Y5/1			内・ナデ、透明釉 外・銅緑釉、回転ナデ、無釉 脚内・蛇の目高台のちナデ、無釉 畳付・回転ナデ、無釉	良好 精良 やや褐色の磁胎、陶質	3		9
73	788	磁器碗 (碁笥底)	底 1/1残存	底部	2.5Y7/4	2.5Y7/4	10YR7/2	脚内 10YR7/3			内・黄褐色釉 外・黄褐色釉 脚内・無釉 畳付・無釉	良好 精良	4		9
74	780	陶器皿 (有田系)	口 2/3残存 底 1/1残存	口～底	2.5Y5/2	2.5Y5/2	2.5Y4/6	脚内 10YR5/3	微砂粒を含む	白・他	内・回転ヘラケズリのちナデ透明釉、微妙なスナメ微細な砂を用いたスナメ（4ヶ所白色）あり 外・回転ヘラケズリのちナデ透明釉、微妙なスナメ、回転ヘラケズリ無釉 脚内・回転ヘラケズリ無釉 畳付・回転ヘラケズリ無釉	良好	4	781	9
75	一般	陶器皿 (唐津系)	破片 口 1/1残存 底 若干残存	口～底	10YR4/1	10YR4/1	2.5Y4/4	脚内 5Y4/3			内・灰色釉　4ヶ所の胎土目（内見込部） 外・灰色釉、ヘラケズリ無釉 脚内・無釉カキトリ 畳付・ナデ無釉	良好 精良 茶褐色陶胎 反転	3		9
76	30	陶器皿 (肥前系)	破片 底 1/1残存	底部	2.5Y5/1	10YR5/2	7.5YR6/1	脚内 10YR5/3			内・透明釉　スナメ見込み3ヶ所 外・透明釉、回転ヘラケズリ　灰色釉、失透 脚内・カキトリ 畳付・回転ナデ	良好 精良	3		9
77	一般	陶器皿 (肥前系)	破片 底 1/1残存	底部	2.5Y7/2	2.5Y7/2	2.5Y8/2	脚内 2.5Y8/3			内・透明釉　スナメ内見込み3ヶ所　黄白色釉 外・透明釉　黄白色釉 脚内・蛇の目高台、無釉 畳付・無釉	良好 精良	4		9
78	330	陶器皿 (肥前、内野山系)	破片	口縁部	2.5Y7/2	5BG4/1	2.5Y6/1				内・回転ヘラケズリのちナデ、銅緑釉 外・回転ヘラケズリのちナデ、無釉～緑色釉	良好 精良な磁胎 傾き若干ギモン	3		9
79	36	磁器皮鯨手碗 (唐津系)	口 1/4残存	口縁部	7.5YR5/2	2.5Y5/2 5Y4/2	7.5YR6/3	口唇 5Y4/2			内・灰色釉 外・回転ヘラケズリ灰色釉、回転ヘラケズリ無釉 付部灰色釉はややチヂミ 口唇・皮鯨手	良好 精良 反転	3	4層の 768	9

Tab.9　出土遺物観察表⑤

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色 外	色 内	色 肉	色 他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
81	197	陶器碗 (肥前系)	底 1/1残存	底部	10YR7/2 10YR6/2	2.5Y5/1 10YR6/2	7.5YR6/4	脚内 7.5YR6/2 畳付 7.5YR5/3			内・褐色釉 外・失透した褐色釉 脚内・失透した褐色釉 畳付・無釉カキトリ 高台内見込はカキトリのち施釉　高台畳付部はフキトリにより無釉	良好 精良	3		9
82	316	陶器碗 (肥前系)	底 1/1残存	底部	5Y4/1	5Y5/1～ 10YR6/2	2.5Y5/2	脚内 10YR5/3	微砂粒を若干含む	白・他	内・回転ヘラケズリ、透明釉 外・回転ヘラケズリ無釉 脚内・蛇の目高台 畳付・ナデ無釉	良好	3		9
83	95	陶器青緑釉碗 (内野山系)	底 1/1残存	底部	7.5Y4/1 10BG4/1	7.5YR3/3	10YR7/3	脚内 10YR6/3			内・褐色釉　見込に若干のスナメあり 外・銅緑釉、回転ヘラケズリ無釉 脚内・回転ヘラケズリ無釉 畳付・回転ヘラケズリ無釉	良好 精良	3		9
84	278	陶器碗 (内野山系)	底 1/1残存	底部	10YR4/2	5PB4/1	2.5Y4/1	脚内 7.5YR6/4			内・銅緑釉 外・褐色釉、回転ナデ無釉、ロウガケ 脚内・回転ナデ無釉、ロウガケ 畳付・回転ナデ無釉、ロウガケ	良好 精良	3	307	9
85	一般	陶器碗 (肥前系)	底 1/1残存	底部	10YR5/3 5Y8/1	2.5Y5/2 2.5Y7/1	10R5/2	脚内 7.5YR5/3			内・刷毛目文 外・刷毛目文（白色釉がけのち回転フキトリ、その後透明釉がけ） 脚内・透明釉 畳付・無釉 高台畳付部に胎土目あり	良好 精良	3		9
86	107	陶器盤 (皿) (肥前系)	破片	口縁部	2.5Y5/2	5Y8/2	7.5YR4/1		微砂粒を含む	白	内・回転ナデ、白色釉 外・ナデ透明釉 口唇・白色釉、回転フキトリ	良好	3		9
87	一般	陶器皿 (肥前系)	破片	口縁部	2.5Y4/1	10YR7/1	10YR5/2		微砂粒を含む	白	内・回転ヨコナデ白色釉 外・ナデ透明釉 口唇・波状フキトリ文あり	良好 傾きギモン	3		9
88	一般	陶器皿 (肥前系)	破片	肩部	5Y5/1	10YR7/2	10YR5/2		微砂粒を若干含む	白	内・回転ナデ白色釉 外・回転ナデのち透明釉 口唇部内面鉄絵文	良好 傾きギモン	3		9
89	249	陶器高台付皿 (内野山系)	破片 底 1/3残存	底部	7.5Y4/1～ 5BG4/1 7.5YR4/1	5YR4/3	7.5YR5/2	脚内 7.5YR5/3	微砂粒を微量含む	白・他	内・回転ヨコナデ、褐釉、スナメ 外・回転ヨコナデ、褐釉 脚内・回転ヨコナデ、無釉フキトリ 畳付・回転ヨコナデ、無釉フキトリ	良好	3		9
90	一般	陶器盤 (内野山系)	破片	口縁部	7.5Y4/2 10BG3/1	5YR4/2	2.5Y4/2	口唇 10G4/1			内・褐色釉 外・褐色釉 口唇・銅緑釉、外刷毛波状文あり	良好 精良	3		9
91	279	陶器鉢 (内野山系)	破片	胴部	2.5GY4/1 10Y8/1	10YR5/2	10YR5/2				内・無釉 外・銅緑釉、白色釉、外に刷毛のよる　指による波状文あり、スナメあり	良好 精良 傾き若干ギモン		415	9
92	364	磁器染付脚付皿 (肥前系)	脚 1/1残存	脚部	2.5Y6/1	2.5Y6/1	5Y6/1	脚内 2.5Y6/2			内・透明釉 外・透明釉 脚内・回転ヘラケズリ無釉 脚端・回転ヘラケズリ無釉	良好 精良	3		7
93	87	磁器染付脚付皿 (肥前系)	脚 1/1残存	脚部	10YR6/1	2.5Y7/1	2.5Y6/1	脚内 10YR5/3			内・透明釉 外・透明釉 脚内・回転ヘラケズリ無釉 脚端・回転ヘラケズリ無釉	良好 精良	4		9
94	290	磁器脚付碗 (肥前、内野山系)	脚 1/1残存	脚部	5BG5/1	7.5GY5/1 10Y5/2	2.5Y7/2	脚外 2.5Y7/1			内・銅緑釉ナデ 外・ナデ緑釉、ヨコナデ、無釉	良好 精良な磁胎	3		9
95	389	宝珠つまみ付筒蓋	略完形	蓋部	10Y3/2	5YR5/4	7.5YR5/4				内・回転糸切り無釉、回転ナデ無釉 外・緑釉	良好 精良 ややマメツ	3		9

Tab.10　出土遺物観察表⑥

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色　外	色　内	色　肉	色　他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
97	104	土師器三足香炉	底 1/3残存	口～底	5Y5/4	7.5YR4/4	5YR4/2 2.5Y3/1	脚内 7.5YR5/3 畳付 7.5YR5/4	微砂粒を含む	白	内・回転ヨコナデ 外・ヘラケズリのち回転ナデ、ナデ 脚内・ナデ 口唇・回転ヨコナデ 畳付・ユビオサエ、ナデ 回転ロクロ形を行っているか？底面には糸切りなくアレている	良好 精良 復元	3		9
98	35	管状土錘	完形 重・33ｇ		10YR4/3 10YR5/3	5Y2/1			細砂粒を若干含む		内・透明釉 外・透明釉 脚内・透明釉 畳付・無釉、ロウガケ 紐ズレ痕あり	良好	3		9
99	789	擂鉢 (備前)	破片	口縁注口部	2.5Y4/1	2.5Y4/1 7.5YR4/2	7.5YR4/2 5Y4/1	口唇 7.5YR4/1	砂粒を若干含む	白・他	内・回転ヘラケズリのちナデのちクシメ、無釉 外・回転ヘラケズリのち回転ナデ、無釉 口唇・回転ナデ、無釉、ユビオサエ ユビによる注口部作出法が理解できる	良好	4		9
100	一般	擂鉢 (備前)	破片	口縁部	10YR4/2	2.5Y4/1	7.5YR5/3 10YR5/1	口唇 2.5Y5/1 底 10YR5/2	砂粒を若干含む	白・他	内・回転ヘラケズリのち回転ナデ、無釉、回転ヨコナデ無釉 外・回転ヘラケズリのち回転ナデ、無釉 底・無調整、無釉	良好	3		9
101	129	擂鉢 (備前)	口 1/5残存	口縁部	2.5Y5/2 10YR4/2	2.5Y4/1 10YR4/2	2.5Y4/1	口唇 2.5Y5/1	砂粒を若干含む 小レキを若干含む	白・他	内・ナデ 外・ヨコナデ 口唇・ヨコナデ　注ぎ口あり	良好	3		9
102	一般	擂鉢 (備前)	破片	口縁部	7.5YR4/1 10YR4/1	2.5YR3/2 7.5YR4/1	5YR3/1 5PB2/1				内・回転ナデ、ヤキシメ 外・回転ナデ、ヤキシメ 口唇・回転ナデ、ヤキシメ	良好 精良	3		9
103	一般	擂鉢 (備前)	破片	口縁部	5YR4/1 10R4/2	10R4/2	7.5YR4/2				内・鉄釉状の光沢 外・鉄釉状の光沢 口唇・鉄釉状の光沢 ヤキシメ	良好 精良	3		9
104	106	擂鉢 (備前)	底 1/2残存	底部	2.5Y4/1	5Y4/1	5YR3/2	底 2.5Y4/1 10YR4/2	砂粒を若干含む	白	内・回転ヘラケズリのちナデ無釉 外・回転ヘラケズリのちナデ無釉 底・無釉、無調整 クシメ11本　幅2～3mm程度	良好	3	782	9
105	一般	擂鉢 (備前)	底 1/4残存	底部	5YR4/2	2.5YR4/2 2.5YR5/1	5YR4/3	底 5YR4/2	砂粒を若干含む	白・他	内・回転ヘラケズリのち回転ナデ無釉 外・回転ヘラケズリのち回転ナデ無釉 底・無釉、無調整	良好	3		9
106	29	擂鉢 (備前)	口 1/8残存 底 1/1残存	口～底	10YR5/3 5YR5/4 10R4/2	10YR5/3 2.5Y3/2	7.5YR5/3	口唇 2.5YR4/1 10YR4/1 底 7.5YR5/3			内・回転ナデのちナデ無釉、回転ナデのちナデ褐釉 外・回転ケズリのちナデ、無釉、回転ナデのちナデ褐釉、工具による回転ケズリ無釉 脚内・蛇の目高台無釉 畳付・蛇の目高台無釉 口唇・回転ナデのちナデ褐釉 クシメ９本　幅2mm程度	良好 精良 回転	4	65 784 786	9
107	25	擂鉢 (備前)	口 1/5残存	口縁部	5YR5/4 7.5YR5/2	5YR5/4 7.5YR4/1	7.5YR6/4		微砂粒を若干含む	白	内・回転ナデのちクシメ無釉、回転ナデ褐釉 外・回転ヘラケズリのちナデ無釉、回転ナデ無釉、回転ヘラケズリ無釉 口唇・回転ナデ褐釉 注ぎ口部分 クシメ９本　幅２mm程度	良好	3		9
108	一般	擂鉢 (備前)	破片	口縁部	7.5YR5/3 5YR4/3	2.5YR4/4	2.5Y5/2		砂粒を微量含む	白・他	内・回転ヨコナデ 外・回転ヨコナデ 口唇・回転ヨコナデ、褐釉マメツ	良好	3		9

Tab.11　出土遺物観察表⑦

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色　外	色　内	色　肉	色　他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
110	396	擂鉢 (備前)	破片	口縁部	10R4/2 2.5YR 4/4	2.5YR4/4 2.5YR 5/4	7.5R4/2 5Y5/1		細砂粒を若干含む	白・他	内・回転ヨコナデ 外・回転ヨコナデ 口唇・回転ヨコナデ、褐釉 クシメ6+α本　幅2.2mm太め	良好	3		9
111	一般	擂鉢 (苗代川系)	破片	口縁部	2.5Y3/1 7.5YR 4/2	10YR3/1 10YR4/2	10YR5/2 2.5Y4/2	口唇 10YR5/2	細砂粒を若干含む	白	内・ヨコナデそば釉 外・ハケメのちナデそば釉 口縁上面・ヨコナデ、フキトリ無釉　口縁外面・ヨコナデそば釉 クシメ6+α本　幅1mm程度	良好	3		9
112	一般	擂鉢 (苗代川系)	破片	口縁部	2.5Y4/2 5YR2/2	7.5YR4/2	7.5YR4/3		細砂粒を若干含む	白・他	内・ナデのちクシメ無釉 外・ナデ、無釉　口縁上面・回転ナデ、草木灰釉 口縁外面・草木灰釉 クシメ6本　幅1～1.5mm程度	良好 傾き若干ギモン	3		9
113	P-16	陶器　擂鉢 (肥前系)	底 1/2残存	底部	7.5YR5/3	7.5YR4/2	5YR4/2	底 7.5YR4/3	砂粒を微量含む	白・他	内・クシメ無釉 外・無釉 底・回転糸切り無釉 クシメ10本　幅1mm程度	良好 精良	4		9
114	374	擂鉢 (苗代川系)	口 1/5残存	口～底	10YR4/1 7.5YR3/1	10YR3/1	2.5Y4/1 5RP5/1	口唇 2.5YR4/2 7.5YR4/2			内・ナデのち褐釉 外・ハケメのち回転ナデ褐釉 口縁上面・回転ナデフキトリ無釉 口縁外面・回転ナデ褐釉 ハケメ8本　幅1mm程度	良好 精良	3		9
115	397	擂鉢	底 1/2残存	底部	7.5YR6/4	7.5YR6/4	7.5YR5/4 10YR5/1	底 7.5YR5/4			内・ナデのちクシメややマメツ無釉 外・回転ヘラケズリのち回転ややマメツ無釉 底・回転糸切り、無釉 畳付部は回転糸切り	良好 精良	3		9
116	96	陶器　鉢 (苗代川系)	口 1/6残存 底 若干	口～底	7.5YR4/1	7.5YR4/1	2.5YR4/3	底 5YR3/1	細砂粒を若干含む	白・他	内・黒褐色釉やや失透 外・黒褐色釉やや失透 口唇・無釉フキトリ 口唇部上面に貝の目あり	良好	3	392	9
117	172	陶器　注ぎ口付鉢	口 1/3残存	口縁部	2.5Y4/2	7.5Y3/1	7.5YR4/1	口唇 7.5YR4/2	細砂粒を若干含む	白・他	内・褐色釉 外・褐色釉 口縁上面・無釉フキトリ 口縁外面・無釉フキトリ、褐色釉	良好	3	375	9
118	一般	陶器　鉢	口 1/8残存	口縁部	2.5Y4/1 10YR4/1	2.5Y5/1	7.5YR5/2	口唇 7.5YR4/2			内・ナデ無釉 外・回転ナデ褐色釉、失透 口唇・回転ヨコナデ褐色釉	良好 精良	3		9
119	一般	陶器　壷	口 1/9残存	口縁部	7.5YR4/1 2.5Y5/2	5Y5/1～ 7.5Y5/1	2.5Y4/1				内・ナデ無釉 外・回転ナデ褐色釉、失透 口唇・回転ヨコナデ褐色釉	良好 精良	3		9
120	一般	陶器　小鉢 (肥前系)	口 1/8残存 底 1/3残存	口～底	2.5Y3/1 7.5YR4/2	7.5YR4/2	2.5Y5/1	口唇 7.5YR4/2 底 7.5YR4/2			内・回転ヘラケズリのち回転ナデ無釉 外・緑釉、無釉ロウガケ 口唇・回転ナデ、無釉、ロウガケ 底・無釉ロウガケ 緑釉流し	良好 精良	3		9
121	一般	陶器　壷or甕	底 1/5残存	底部	10YR4/1	10YR4/1	7.5R4/3	底 10YR5/2	砂粒を若干含む	白・他	内・褐釉失透 外・褐釉 底・ナデ、褐釉、失透、貝目　カルシウム付着	良好 反転	3		9
122	7	陶器　徳利or壷	底 1/4残存	底部	7.5YR4/1	7.5YR5/3	10YR5/2 2.5YR4/3	底 5YR5/1	細砂粒を若干含む	セ・白・他	内・ナデ、無釉、ヘラカキトリ無釉 外・ナデ褐釉 底・アレ釉かかるも失透 接合痕あり　釉はかけ流し	良好	3	8 15	9
123	一般	陶器　甕or壷	破片	底部	10YR4/1 2.5Y4/1	2.5Y4/1 10YR5/2	10YR5/2 N4/0	底 2.5Y4/2			内・褐釉、失透 外・ナデ褐色釉 底・ナデ、貝目、褐釉 貝目あり　肋のある二枚貝	良好 精良	3		9

Tab.12　出土遺物観察表⑧

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色　外	色　内	色　肉	色　他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
125	一般	甕形 (肥前系)	口 1/6残存	口縁部	2.5Y6/2	2.5Y4/1	2.5Y4/2	口唇 7.5YR5/1 10R5/2			内・自然釉or一部そば釉流れあり、失透、タタキ受（貝）のちナデ 外・草木灰釉orそば釉失透、ヨコナデ、タタキのちナデ 口縁上面・ヨコナデ、無釉、貝目あり そば釉かかるも失透し白濁	良好 精良な胎土	3		9
126	一般	陶器　甕 (肥前系)	破片	口縁部	10YR4/1	N5/0	10YR5/2	口唇 7.5YR4/1 2.5Y5/1			内・褐色釉、失透 外・回転ヨコナデ、褐色釉、失透 口唇・回転ヨコナデ、貝目、無釉 貝目あり　褐色釉	良好 精良な胎土	3		9
127	一般	陶器　半胴 (肥前系)	破片	口縁部	7.5YR4/1	10YR5/2 2.5Y5/2	2.5Y5/1	口唇 7.5YR4/1 7.5YR4/2			内・ヨコナデ褐色釉、内面は失透 外・ヨコナデ褐色釉 口唇・ヨコナデ褐色釉、上面貝目	良好 精良	3		9
128	401	陶器　半胴　甕	口 1/8残存	口縁部	10YR3/2	2.5Y4/1 10YR4/1	2.5GY4/1	口唇 2.5Y4/2 7.5YR4/1	細砂粒を若干含む	白	内・ヨコナデ、無釉 外・ヨコナデ、緑釉 口縁上面・無釉、貝目、フキトリ、ヨコナデ 口縁外面・無釉、貝目、フキトリ、緑釉	良好	3		9
129	387	陶器　半胴	破片	口縁部	7.5Y4/1	2.5YR4/2 10YR5/2	5YR4/3	口唇 5YR4/3 7.5YR4/2 2.5YR4/2 7.5YR3/1			内・失透釉、無釉 外・回転ナデ、そば釉、失透 口唇・ヨコナデ失透釉、無釉、貝目あり 口縁部上面無釉なフキトリあり	良好 精良な胎土	2	471	9
130	373	陶器　甕 (肥前系)	口 1/8～1/7 残存	口縁部	5YR3/1 7.5YR4/1	7.5YR4/1	10YR5/2	口唇 7.5YR5/2	細砂粒を若干含む	白	内・ヨコナデ、タタキのちナデ 外・褐色釉失透、褐色釉キザミ目突帯（ユビキザミ） 口唇・ヨコナデ、無釉、フキトリ	良好 復元	3		9
131	182	陶器　鉢 (肥前系)	破片	口縁部	10YR4/1	2.5YR3/2 5YR3/1	2.5Y4/2	口唇 7.5Y5/1			内・無釉回転ナデ 外・回転ナデ鉄釉？光沢あり 口唇・回転ナデ鉄釉？光沢あり	良好 精良	3		9
132	一般	土師器　擂鉢	破片	口縁部	7.5YR5/4 5YR4/3	7.5YR5/4	2.5Y5/2 5YR4/2	口唇 7.5YR5/4	微砂粒を若干含む	赤	内・ハケメのちナデのちクシメややマメツ 外・ハケメ 口唇・ヨコナデ ハケメ8～9本/cm	良好 傾き若干ギモン	3		9
133	一般	瓦器　壺	破片	口縁部	10YR4/1	2.5Y5/2	10YR5/2 2.5Y4/2		微砂粒を若干含む	白・ウ・他	内・工具によるケズリのちナデ、ヨコナデ 外・ナデ、ヨコナデ 口唇・ヨコナデ 肩部に菊花文スタンプあり	良好 傾き若干ギモン	3		9
134	729	瓦器　火鉢	破片	口縁部	10YR5/2	10YR5/2	2.5Y5/1		砂粒を若干含む	白・赤	内・ヨコナデ 外・ヨコナデ 口唇・ヨコナデ 外面スタンプあり	良好 傾きギモン	4		9
135	761	凹石	長・9.2cm 短・6.8cm 厚・6.4cm 重・495 g							砂岩			4		9
136	749	砥石	長・7.7cm 短・5.4cm 厚・2.9cm 重・ g							砂岩			4		9
137	747	砥石	長・10.2cm 短・8.7cm 厚・8.8cm 重・710 g							砂岩			4		9
138	S-31	凹石	長・14.0cm 短・8.3cm 厚・4.4cm 重・637 g							凝灰岩			4		7

Tab.13　出土遺物観察表⑨

図No.	取上げNo.	器種	残存法量(cm)	部位	色　外	色　内	色　肉	色　他	胎土粒	混和剤	調整・施釉	その他	層位	接合	年度
140	767	茶臼	長・6.9cm 短・6.1cm 厚・4.7cm 重・120 g							砂岩			4		9
141	777	羽口 （土製）	破片 内径（復元2.4cm） 重・170 g	胴部					砂粒を若干含む 細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・他	内・ナデ 外・工具によるナデ		4		9
142	776	石製品 （坩堝）	1/4残存程度 重・1225 g		N3/0 10R4/1	7.5ＹＲ 4/1 2.5YR5/1	断 5GY4/1 5R4/1			凝灰岩	内面に注口状（樋状）の加工が成されその部分に黒班と口縁部に赤変がみられる、ルツボか？		4		9
143	128	石製加工品	長・15.7cm 短・15.7cm 厚・40cm 重・1010 g							凝灰岩	円盤形		3		9
144	753	椀形鍛冶滓	長・9.5cm 短・8cm 厚・2.9cm 重・225 g								植物繊維（木炭？）と小礫の固着あり		4		9
145	772	椀形鍛冶滓	長・8cm 短・7cm 厚・3.3cm 重・190 g								側面に植物繊維痕がついた穴多数		4		9
146	783	椀形鍛冶滓	長・11.1cm 短・8.3cm 厚・6.6cm 重・585 g								側面に植物繊維痕がついた穴多数		4		9
147	773	椀形鍛冶滓	長・12.3cm 短・9.9cm 厚・4.1cm 重・750 g								側面に植物繊維痕がついた穴多数		4		9
148	744	鍛冶滓	長・9.2cm 短・7.7cm 厚・3.3cm 重・335 g										4		9
149	274	石臼	長・12.3cm 短・4.7cm 厚・6.4cm 重・360 g							安山岩	推定で直径約20cmの大きさの石臼である		3		9
150	228	鍋かき	長・8.3cm 短・9.0cm 厚・3.6cm 重・80 g							軽石			3		9
151	461	扁平打製石斧	長・8.9cm 短・5.7cm 厚・1.8cm 重・105.56 g							安山岩			3		9
152	一般	砥石	長・11.5cm 短・5.2cm 厚・2.5cm 重・230 g							頁岩	全面に砥面あり		3		9

Tab.14　出土遺物観察表⑩

■　第４章　発掘調査成果のまとめ

第１節　南迫田遺跡の遺構について

南迫田遺跡における遺構について，古層より順次述べていく。

（１）　弥生時代

南迫田遺跡において，第11層（入来Ⅱ式土器を主体とする遺物包含層）を主体的に埋土とするピットや土坑を第12層検上面で検出した。弥生土器の分布状況と遺構の検出状況はほぼ重複しており，平成９年度調査区北西側よりに遺物や遺構が比較的まとまって出土・検出している傾向にある。また，平成７年度調査区では，弥生土器の半完形品が２個体分上下に重なって出土した地点があったが，土坑等の遺構に伴うものではなかった。遺物・遺構の出土・検出状況から，それらの分布は調査区外にも広がりが予想され，この周辺に弥生時代中期後半の集落が形成されていたことが窺われる。さて，指宿市内での弥生時代の遺跡としては，橋牟礼川遺跡[1]，横瀬遺跡[2]，鳥山遺跡[3]等が挙げられる。このような遺跡が周辺に点在している中で，南迫田遺跡での弥生時代中期後半の遺跡の発見は，遺跡の所在する立地環境などを含め貴重な発見例と言えよう。

（２）　中世～近世

ａ．溝状遺構

南迫田遺跡の北西－南東に延びる溝状遺構は，断面観察によると西側に土手を有していることが看取できる。さらに，平成９年度調査区北壁の観察によると，溝状遺構の西側は少なくとも約１ｍの比高差のある土地があることが分かる。溝状遺構１は，時期的には中世と考えることが可能である。下山氏が実測・執筆した第３・４層出土遺物の検討によると，比較的多くの肥前・備前系の陶磁器類が搬入されていることが看取されており，その内容を鑑みると当時の尾地元有力者の居館があることが予想できる可能性があるとのことである[4]。このことから，中世居館の区割り溝としての役割を担っていた可能性が看取てきる。

ｂ．道　跡

溝状遺構が埋没した後，ほぼ同じ位置で道として利用されており，道跡は12条検出されている。その道跡の方向は，溝状遺構とほぼ同じで調査区を北西－南東方向に延びている。断面観察によると，西側には，溝状遺構と同様で土手を有していることが観察される。このことから，中世・近世にわたって，調査区の西側に位置している部分には，土手があり，その土手下に道が形成されていると考えられる。発掘調査を実施した段階でも，市道の西側には約1ｍの比高差のある土手があり（pl.１・上段の調査区近景），土手の位置は東側にずれたものの中世から景観はほぼ変わっていないと考えられる。このことから，この地域は中世からの区割りが現在までも綿々と引き継がれていると考えられる[5]。道跡は，北西－南東方向にほぼ直線的に伸びているが，一部の道路では北端は東側に，あるいは，南端では西側にほぼ直角るに曲がるものが認められる。このことから時期によって，若干ながら区割りが変化していることが予想される。

ｃ．礫分布

一部の道が利用されなくなった後に，拳大から人頭大の礫や陶磁器類がまとまって廃棄されている。また，平成９年度調査区西側では，鍛冶関連遺物（鞴の羽口・椀形鍛冶滓・砥石など）が破損した陶磁器類と共に廃棄されている。中世においては，鍛冶などを管理している有力者がその土地を離れるときに，生活道具を破却して去ることが知られている。このことから，南迫田遺跡周辺（特に西側）において，そのような居館はじめ関連施設があったことを窺い知ることができる。また，Pl.３下段で看取できるように，陶磁器類や鍛冶関連遺物がまとまって破却されている部分の直下からは，人頭大の礫を用いた配石があり，なんらかの施設の境界として設置された可能性がある。

また，この周辺の小字は，調査区地区は野村で，その周辺には，山神平，明神ノ後，明神ノ上，池堂など寺に関連する小字が残っている。このことは，第3・4層から仏具が出土していることからも，廃寺がある可能性を示唆していると考えられる[7]。また，調査区西側には，平山（ひらやま）と称する平らな丘があり，平山ノ下の小字もある。中世における役割を考える上で，重要な地域と考えることができよう。

以上，南迫田遺跡における遺構を概観したが，その遺構は調査区の西側へ展開するものであり，今後その該当地区の調査が望まれる。

文責　鎌田洋昭

註（1）指宿市教育委員会　『橋牟礼川遺跡Ⅵ』　1994　　（2）指宿市教育委員会　『横瀬遺跡』　1982
（3）指宿市教育委員会　『鳥山調査区』　1980
（4）下山　覚「第４章 発掘調査成果のまとめ　第２節　南迫田遺跡出土の陶磁器について」　当書掲載
（5），（7）下山　覚氏からのご教示によるもの　　（6）上田　耕氏からのご教示によるもの

第２節　南迫田遺跡出土の陶磁器について

南迫田遺跡で出土した遺物，特に陶磁については輸入陶磁，肥前系陶磁，薩摩系陶磁，その他備前などの国内陶磁に大きく分けられる。概ね，14世紀から18世紀に至る時期において一つの遺跡形成のピークが認められる。

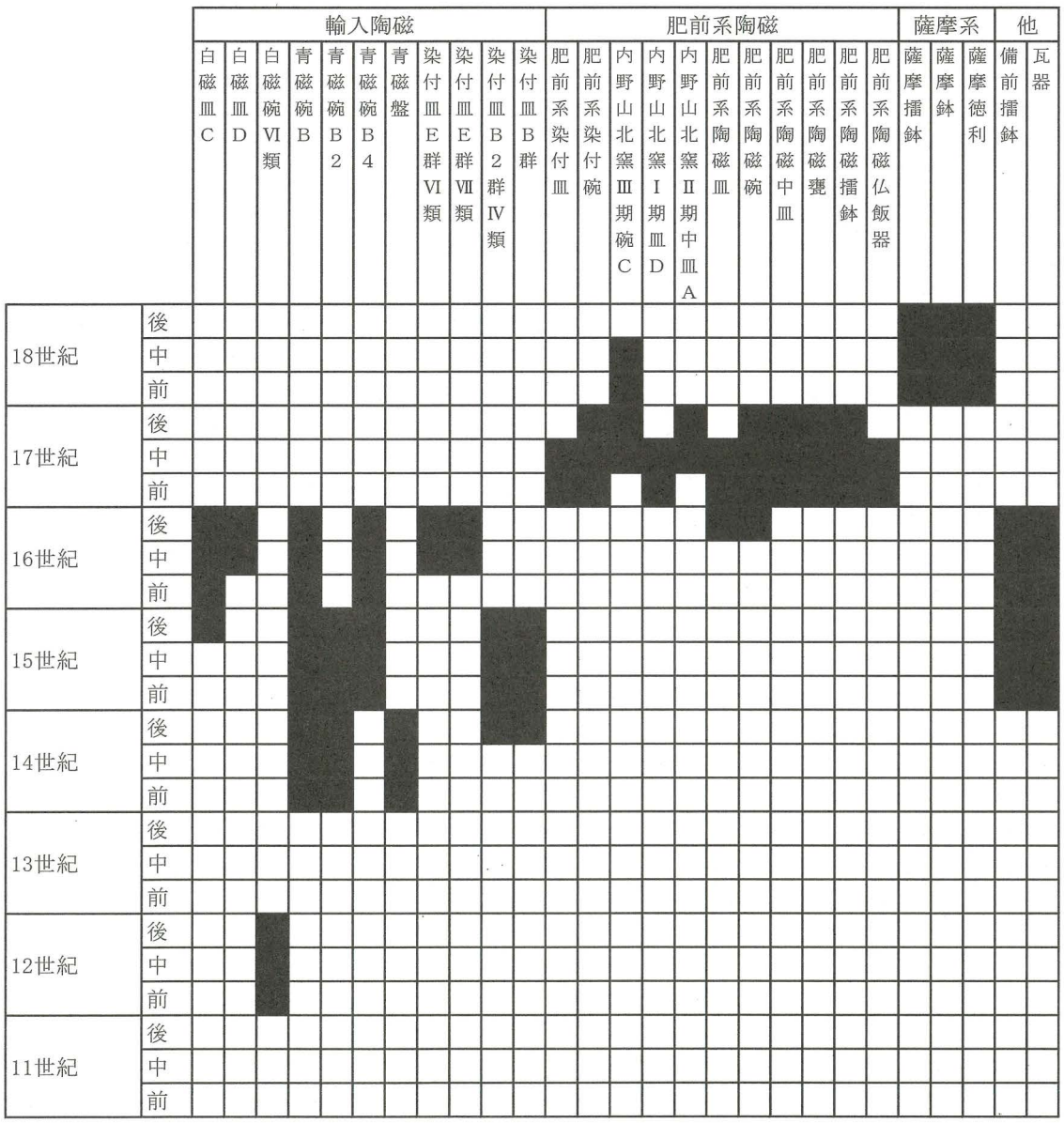
南迫田遺跡は，消費地であるので，消費者の需要を反映した遺物組成となると考えるとき，南迫田遺跡付近に生活していた消費者の指向について概略として次のことが言える[1]。

下図は南迫田遺跡出土の陶磁について生産地と消費時期をまとめたものである。これを見ると，11世紀から12世紀頃に輸入陶磁類が若干認められたあと，14世紀から多くの遺物が出土する。

14世紀～16世紀に至る期間では，碗，皿などの供膳器については，輸入陶磁器が主に占める。しかし，調理具などの生活雑器については，備前系あるいは瓦器などを用い，補完関係にあることを見て取れる。

中世前期においてすでに山川港は鹿児島湾中継港としての役割があったと考えられており，中世後期においても継続した機能を想定できる。従って，指宿において遠隔地陶磁の消費が可能であったことも考えられる。

しかし17世紀を中心として16世紀末から18世紀前半期までは肥前系陶磁が席巻し，供膳器だけではなく，茶陶，生活雑器まで肥前系で占められる。ただし，若干17世紀に至る輸入陶磁も見られることから，17世紀前半期まで混在した状況があったものと考えられる。



※本図における遺物の消長は，実測した資料に基づくものであり，出土遺物全てを反映しない。
　従って，各系の存続期間は厳密にはこれほど明瞭には分かれないと考えられる。

薩摩系陶磁の生産が本格的に開始されるのは17世紀からであるが，この遺跡の場合，18世紀になって主に薩摩系陶磁が出現する。そして，薩摩系陶磁を補完する形で18世紀前半の段階では肥前系陶磁が混在している状況が見て取れる。

これは，薩摩系陶磁の生産量が消費量に追いつかなかったことも考えられる。

肥前系陶磁については，肥前陶磁編年Ⅰ期に該当する時期から供給されていたと考えられ，碗，皿などの供膳器が多い。ⅡないしⅢ期に該当する時期においては，生活雑器も多く認められるようになり，備前系擂鉢の供給はほぼなくなる。

17世紀の生活雑器類は，肥前系でも特に武雄系の甕や擂鉢，壷類に偏っている傾向が見られることから，陶磁の供給体系において，消費者主体でさまざまな生活雑器を多様に求めたものではなく，むしろ供給体系に左右されていたことも考えられることから，この地域の他の遺跡においても同様の傾向が見られる可能性がある。

以上をまとめると，概ね14世紀～16世紀において供膳器は輸入陶磁器に，生活雑器については備前や瓦器などの国内生産地の組み合わせにより，器種組成が形成されていたものが，17世紀に肥前系陶磁の生産体系が成立すると同時に，ほぼそれに呼応して肥前系陶磁が概ね席巻する。しかし，18世紀に至り，薩摩系陶磁の生産が本格化すると同時に，一部の器種は薩摩系に漸次的に変化する。しかし，肥前系陶磁は18世紀前半段階では薩摩系陶磁と混在する状況が見られるという変化が見える。

さて，これら陶磁器の変化を見るとき，南迫田遺跡の中世後期において，継続して輸入陶磁を供膳器として消費できた階層の存在を想定することができるが，その性格をどのように位置付けるかという課題がある。

具体的な遺構などとの関係を考慮する必要があるが，残念ながら，遺構と遺物の関係については，十分な資料が得られていないようで推測の域を出ないが，地元有力者の存在は素描できる。

中世該当層から，溝状遺構が検出されていることから，中世居館あるいは集落の可能性も指摘できるかもしれない。そして、本遺跡では溝状遺構廃絶後，道が敷設されている。したがって，中世居館あるいは集落のあと，その区割りを踏襲しながら近世の段階で小規模な町として成立していた可能性がある。

中世後半から近世初期段階には鍛冶なども行われていたと考えられる，椀形鍛冶滓や鞴羽口などが出土している。また，仏具の出土も認められたことから，近世段階において，末寺などの施設があったことも想定しうる。

なお，18世紀以降の陶磁についてはほとんど出土せず，南迫田遺跡の当地点は廃れていた可能性がある。

そもそも南迫田遺跡の状況は，溝，そして道などの生活の場の周辺の状況であり，遺跡の性格については，更なる発掘調査の成果を待って判断する必要があると考えられる。生活周辺地における状況であっても中世後半から近世前期にいたる多様な遺物の状況をみるとき，今後，比較的情報の乏しかった当該当期の状況が明らかになる可能性を秘めた遺跡であると評価しておきたい。

なお，南迫田遺跡の発掘調査には筆者は直接担当しなかったが，報告書作成段階において担当者の鎌田洋昭氏から陶磁器関係の執筆および報告書の編集を行なって欲しいとの要請がありそれに答えた。従って，本節では所掌分野である遺物の側面から見た成果を越えないことをここで明記しておく。

なお，本節及び陶磁の報告をまとめるにあたり(2)，上田耕，宮下貴浩，渡辺芳郎，橋口亘諸氏の協力・教示を得た，記して感謝したい。

文責　下山　覚

参考文献
橋口　亘　2002　鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相－鹿児島県地域の近世陶磁器流通－，鹿児島地域史研究，1，『鹿児島地域史研究』刊行会

(1)　消費地遺跡の場合，陶磁器類はしばしば伝世することが知られている。南迫田遺跡の場合は，それも含めて，概ね14世紀～18世紀代の遺物が主体を占め，18世紀以降の遺物が極めて少ないことから，その範囲内での伝世を考慮する必要がある。しかし，各遺物の年代は，生産後どこかで長い期間貯蔵していない限り，南迫田遺跡に活動していた人々の入手時期を反映していると考えられることから，図における時期は，概ね入手時期を反映したものと考えられよう。実際の使用時期については，入手時期～18世紀代を考えておきたい。

(2)　発掘調査成果のまとめのみ。2002年９月に筆者が本報告書に付加挿入したもので，校了日は2002年９月９日であり，引用についてもそれに準拠されたい。

No1

平成７年度調査区近景
(左側に市道があり，その西側には土手がある)

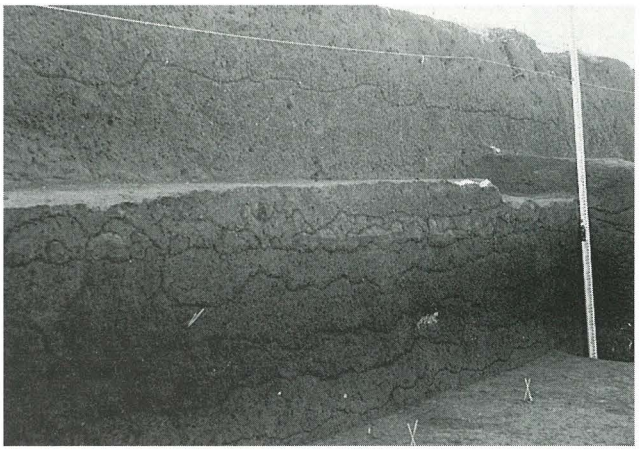
No2

平成９年度調査区近景
(第３層遺物出土状況)

No3

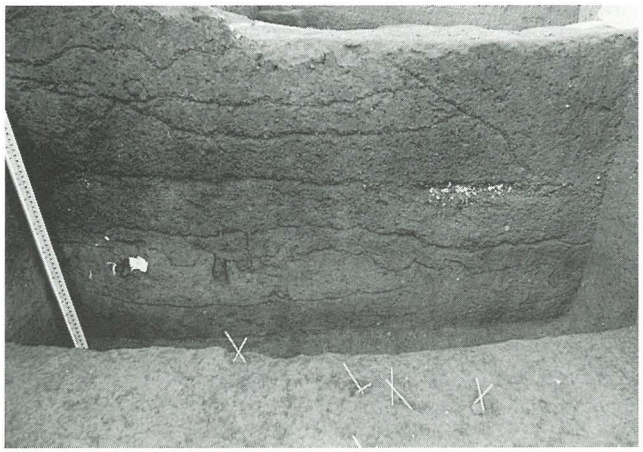
平成７年度調査区西壁土層堆積状況
(最下層は第11層)

No4



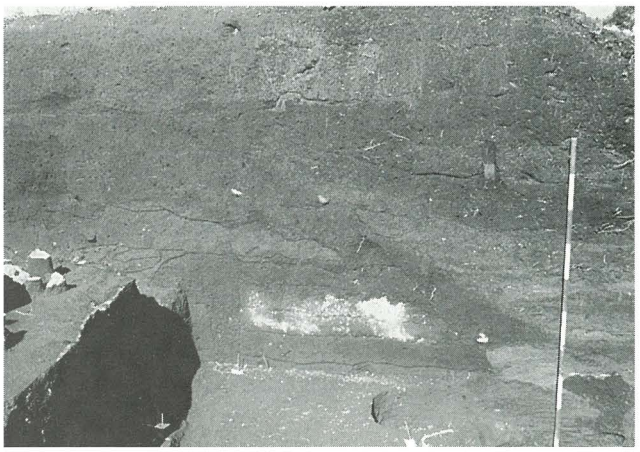
平成７年度調査区西壁土層堆積状況
(第１層～第11層)

No5



平成７年度調査区先行トレンチ 北壁土層堆積状況
(竹串は第11層出土遺物，最下層は第12層)

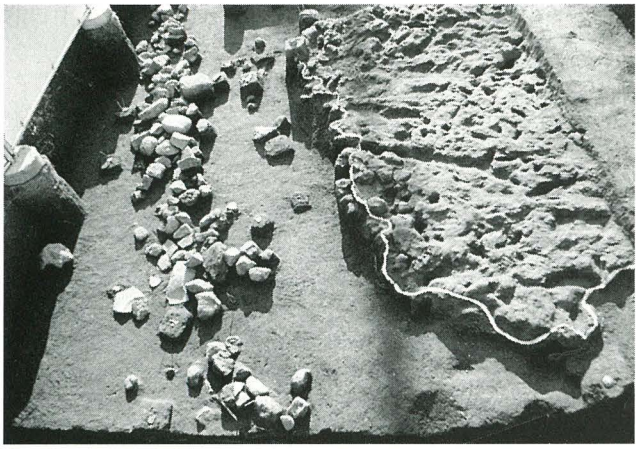
No6



平成９年度調査区北壁土層堆積状況
(第１層～第11層)

PL.2　調査区近景・層位断面写真

No7



平成７年度調査区礫分布検出状況(北側より)
(右側は第５層〔紫コラ〕検出範囲)

No8

平成７年度調査区礫分布検出状況(東側より)
(凹石や陶磁器が周辺より出土)

No9

平成９年度調査区礫分布検出状況(西側より)

No10

平成９年度調査区礫分布検出状況(東側より)

No11

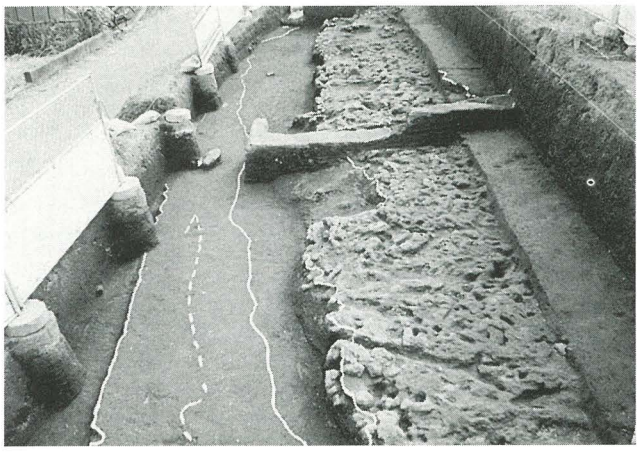
平成９年度調査区礫分布・配石検出状況(東側より)

No12

平成９年度調査区配石検出状況

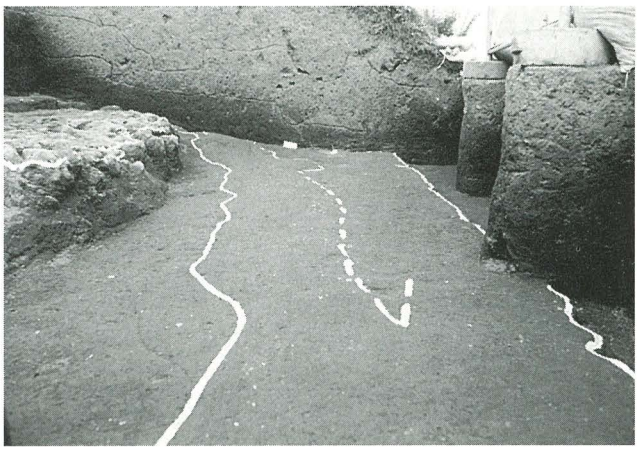
PL.3　礫分布検出状況写真

No13



平成７年度調査区道跡Ｂ検出状況(北側より)
(右半分は，第５層〔紫コラ〕検出範囲)

No14

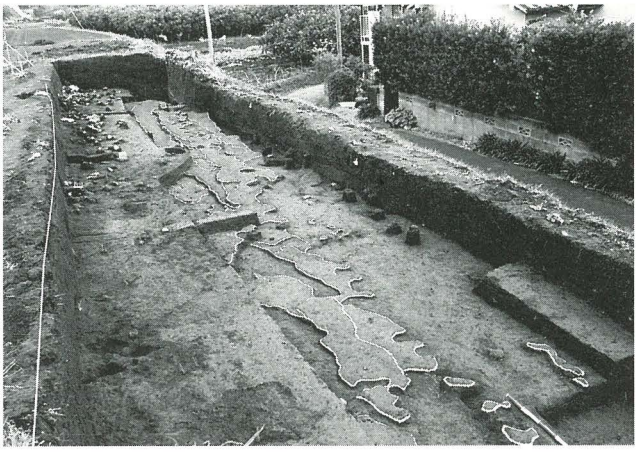


平成７年度調査区道跡Ｂ検出状況(南側より)
(遺跡Ａは，西側と北側に伸びる道に分岐する)

No15

平成７年度調査区道跡Ａ検出状況(南西側より)

No16



平成９年度調査区道跡検出状況(南側より)

No17

平成９年度調査区道跡南半分検出状況(北側より)

No18

平成９年度調査区道跡北半分検出状況(北側より)

PL.4　道跡検出状況写真①

No19

道跡　検出状況(南側より)

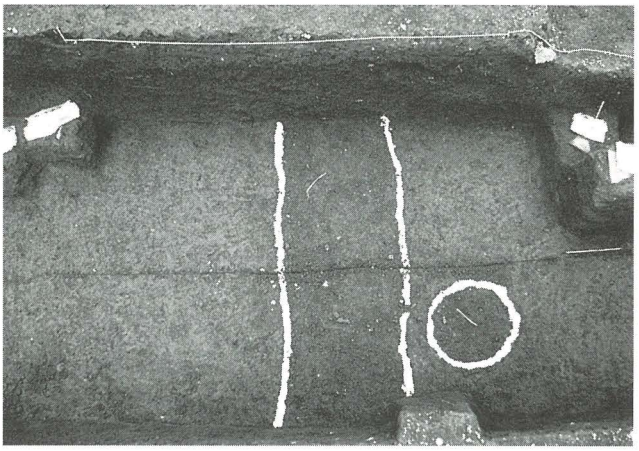
No20

道跡　硬化面堆積状況(南側より)

No21

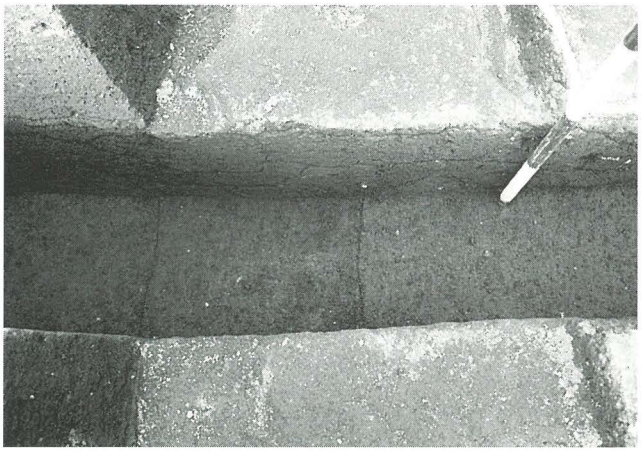
道跡　硬化面堆積状況(北側より)
(小礫・パミスを混在する部分が硬化面)

No22



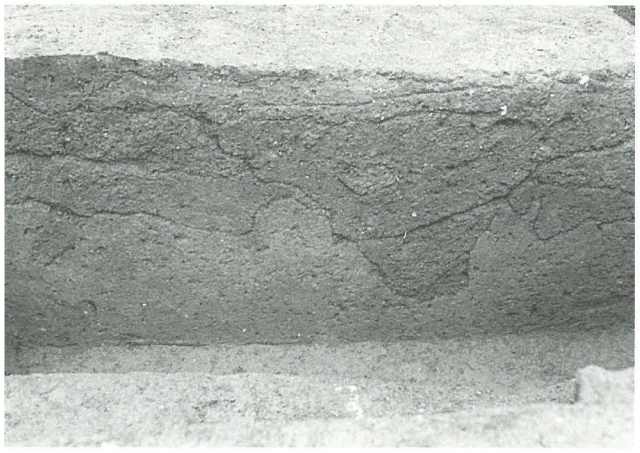
平成7年度調査区先行トレンチ 溝状遺構検出状況(北側より)
(隣接するピットは，第12層上面検出の弥生時代中期に帰属するピット)

No23



平成９年度調査区先行トレンチ
溝状遺構検出状況(南側より)

No24



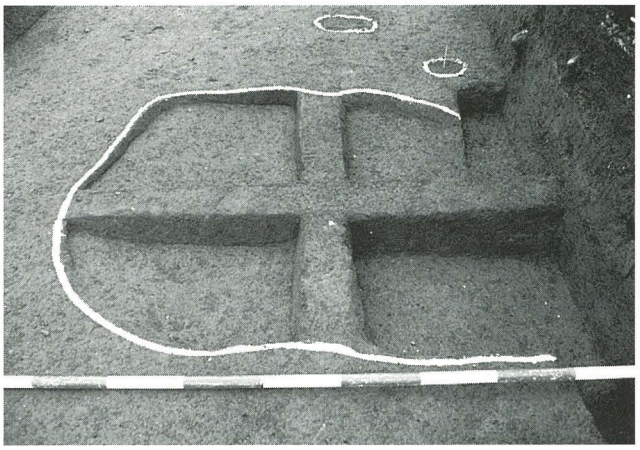
平成７年度調査区　溝状遺構断面検出状況
(最上面は道跡Ｂ・間層をはさみ道跡Ａの硬化面がある)

PL.5　道跡検出状況写真②

No25

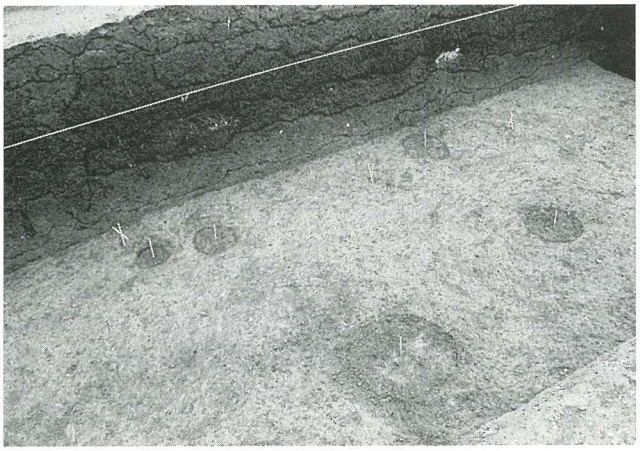
平成９年度調査区弥生時代中期遺物出土・ピット検出状況
(南側より)

No26



平成９年度調査区弥生時代中期の土坑完掘状況
(南側より)

No27



平成7年度調査区弥生時代中期のピット検出状況(東側より)
(第12層上面検出)

No28

ピット断面観察状況(東側より)
(最下層は第13層)

No29

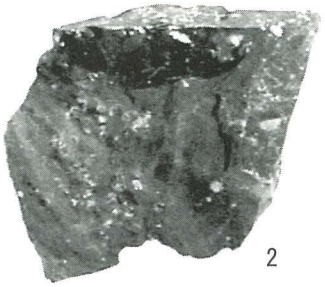
平成７年度調査区弥生時代中期遺物出土状況・平面
(北側より)

No30

同左・断面(北側より)

PL.6　弥生時代遺構検出・遺物出土状況写真

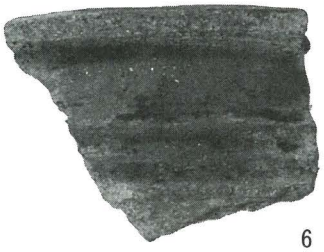
1

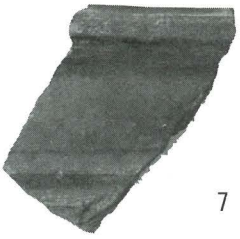

2

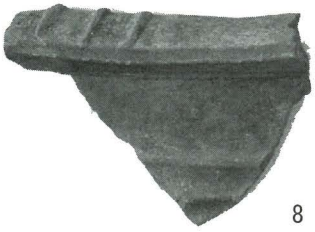
3

4

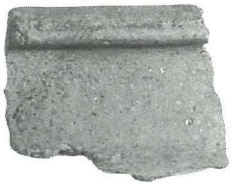
5

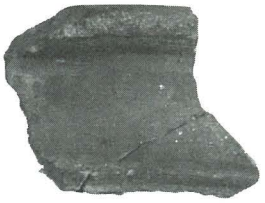

6


7


8

9


10

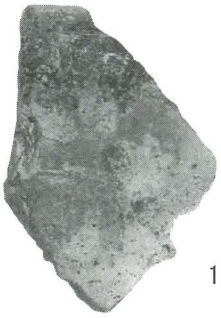

11

12

13

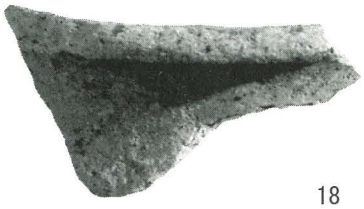
14

15


16

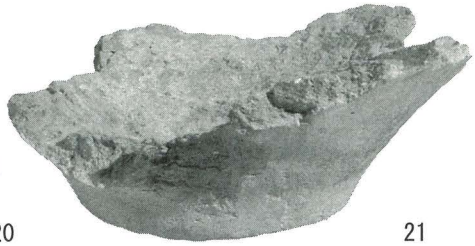
PL.7　出土遺物写真①

17

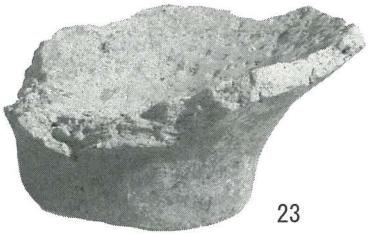

18

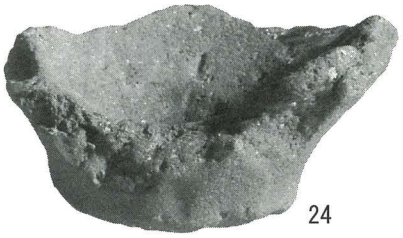
19

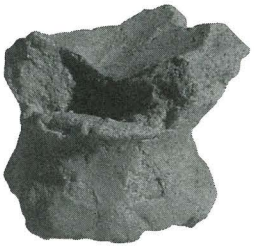
20


21

22


23


24

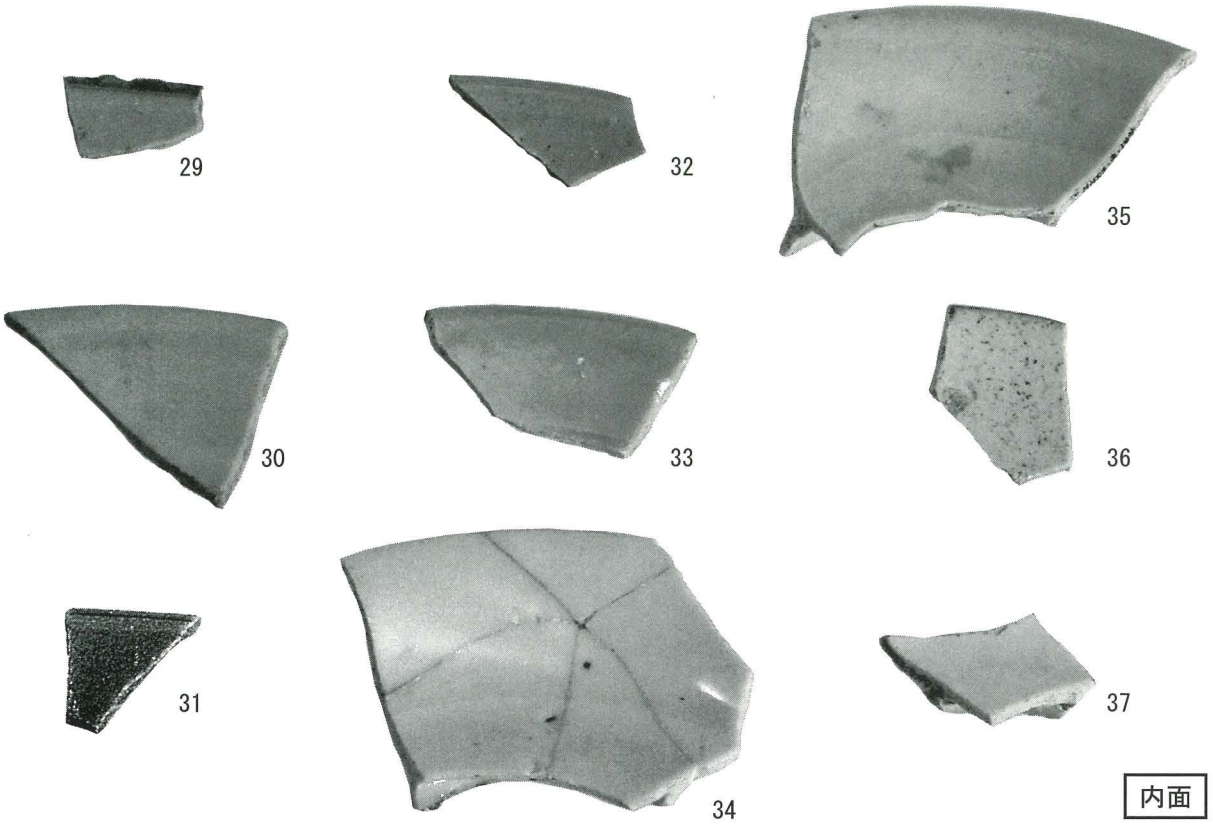

25

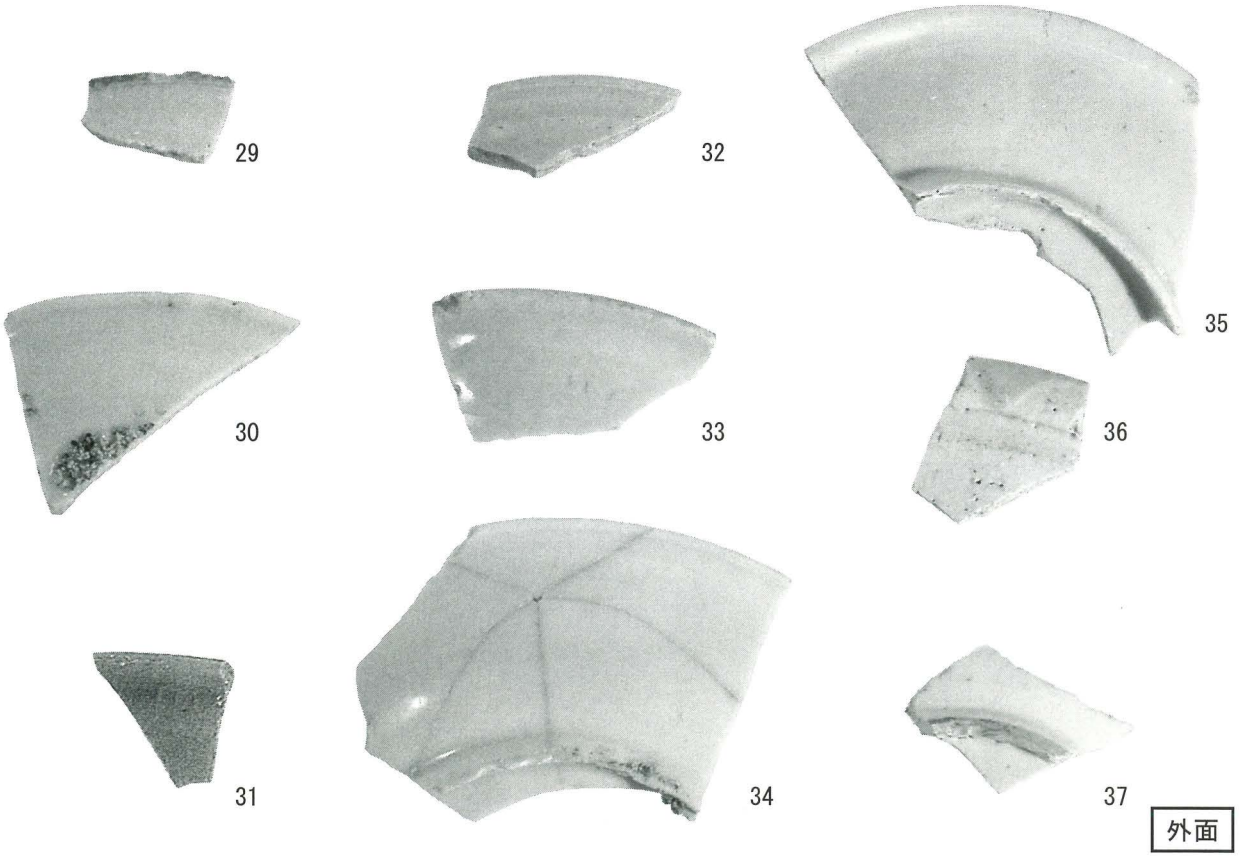
26

27

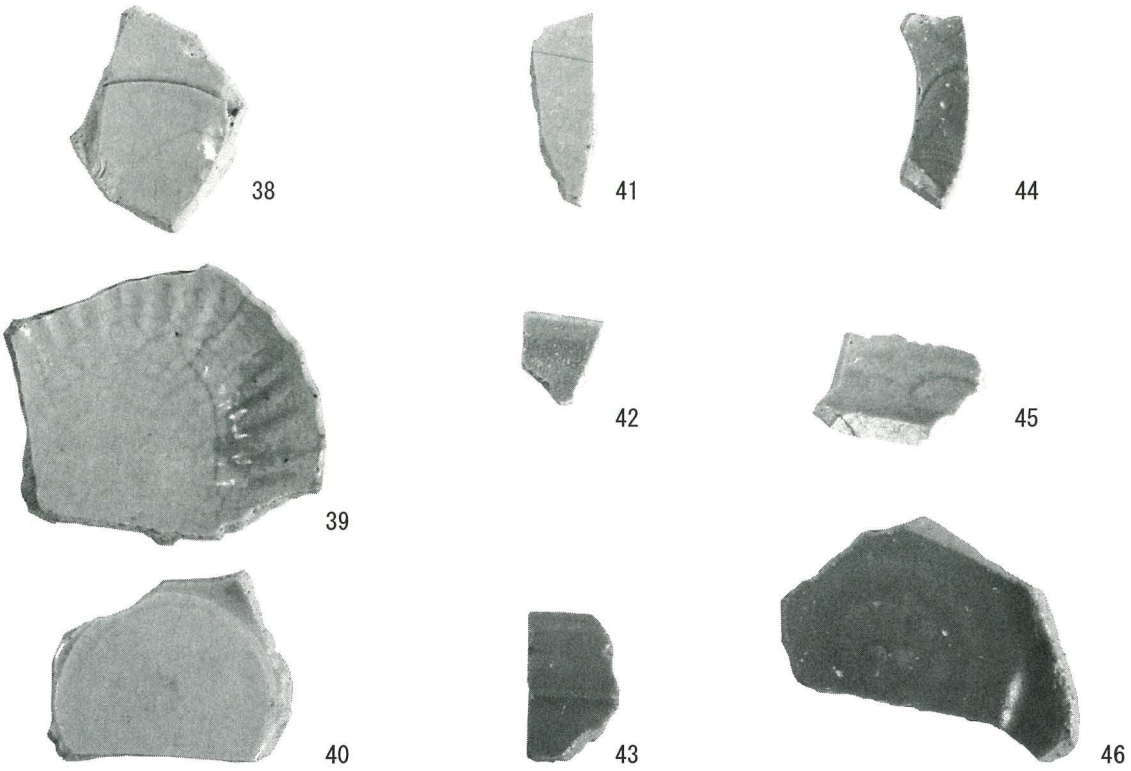
28

PL.8　出土遺物写真②

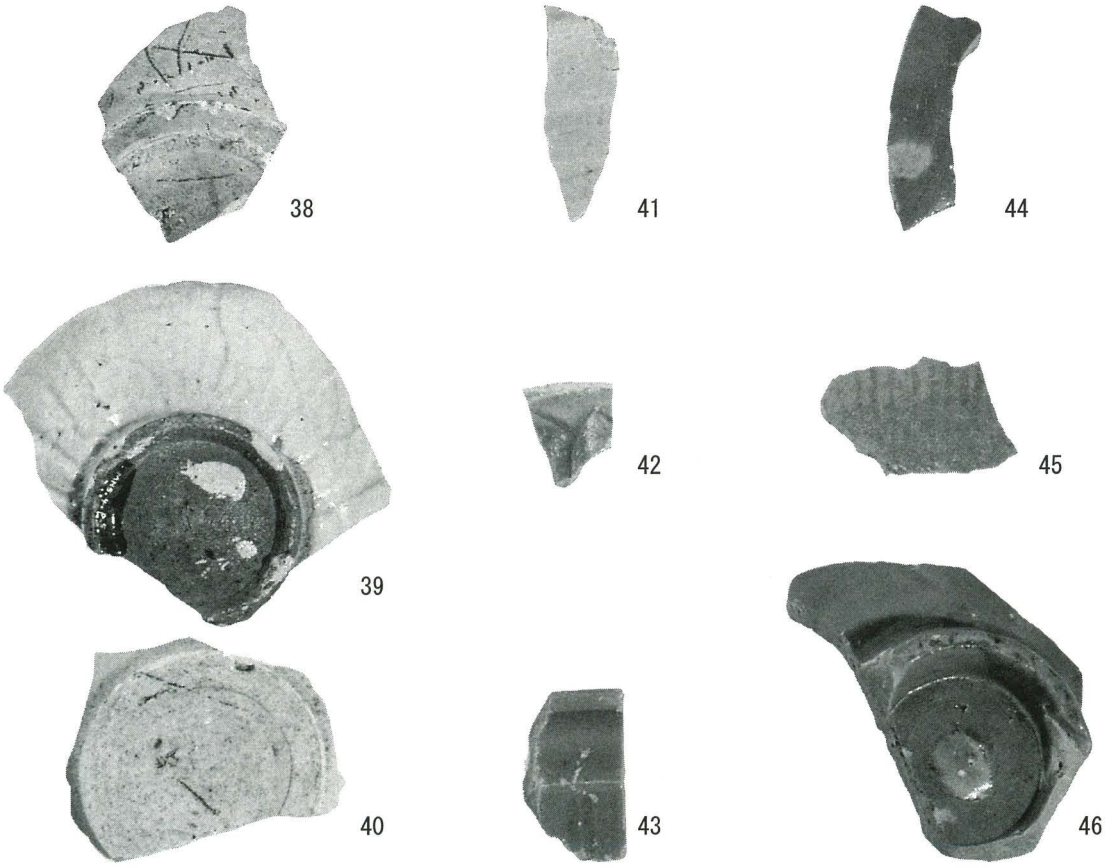




PL.9　出土遺物写真③

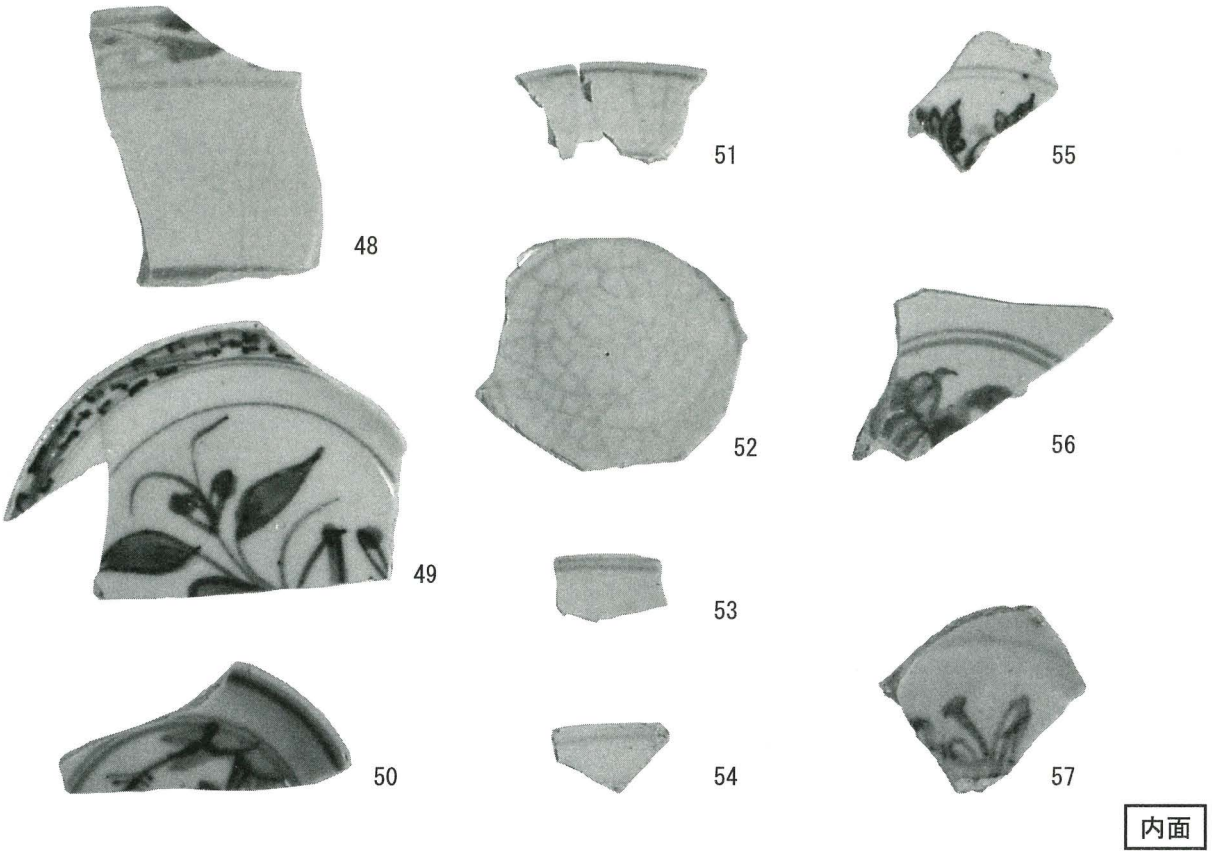


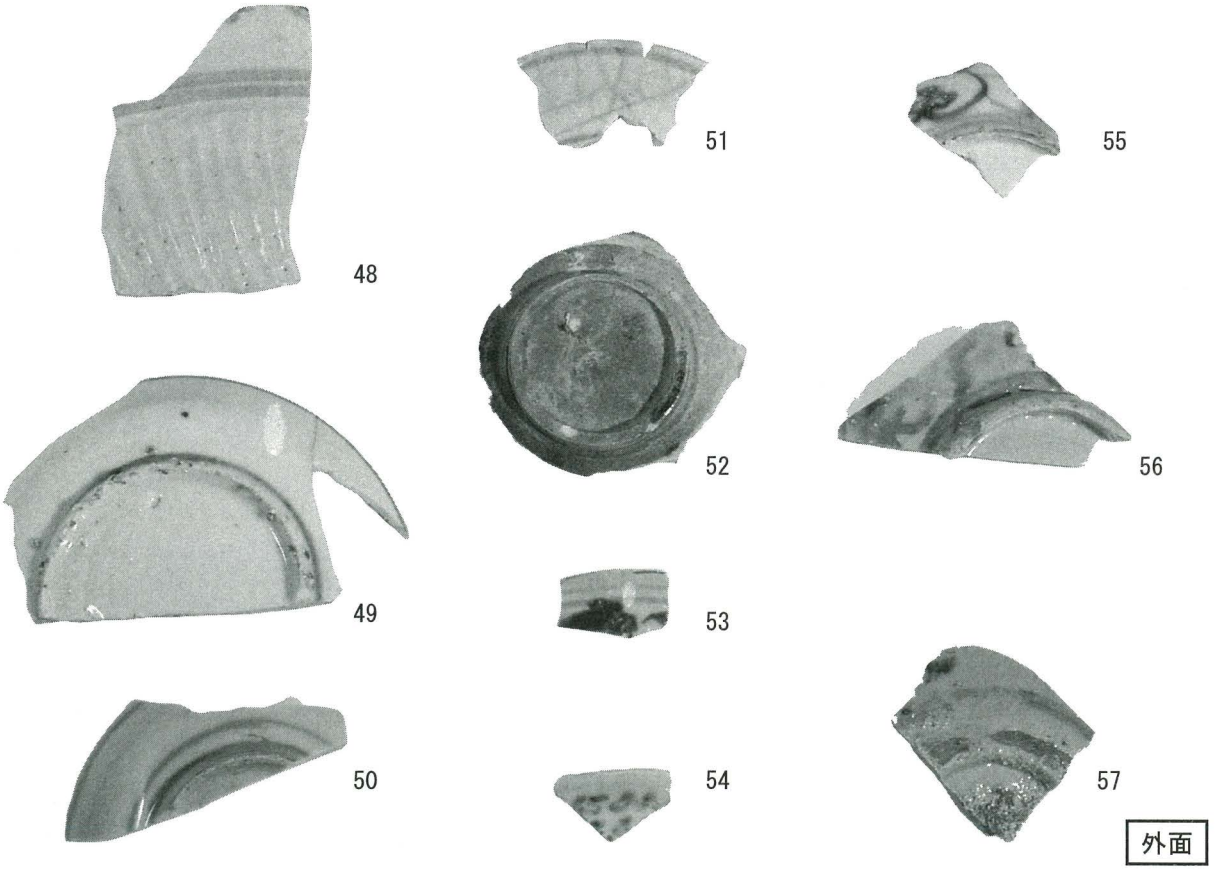
内面



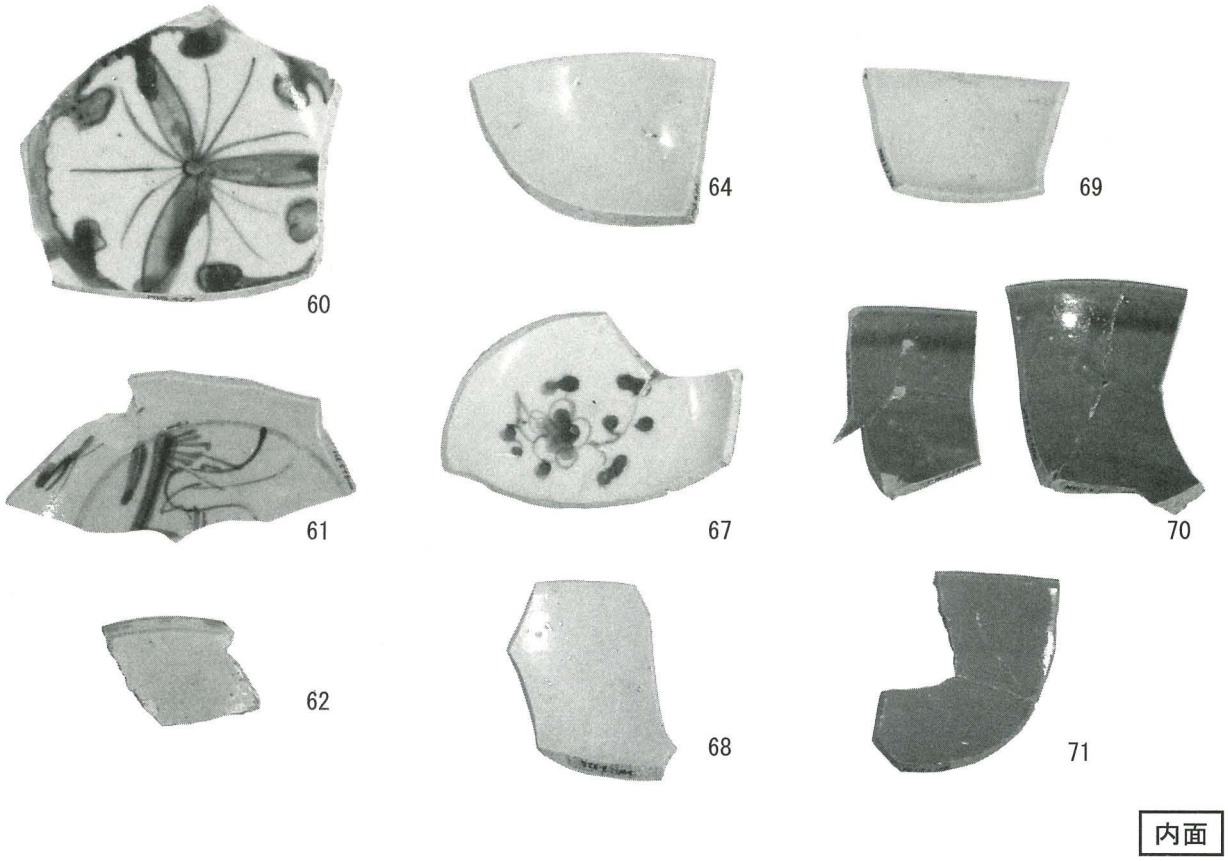
外面

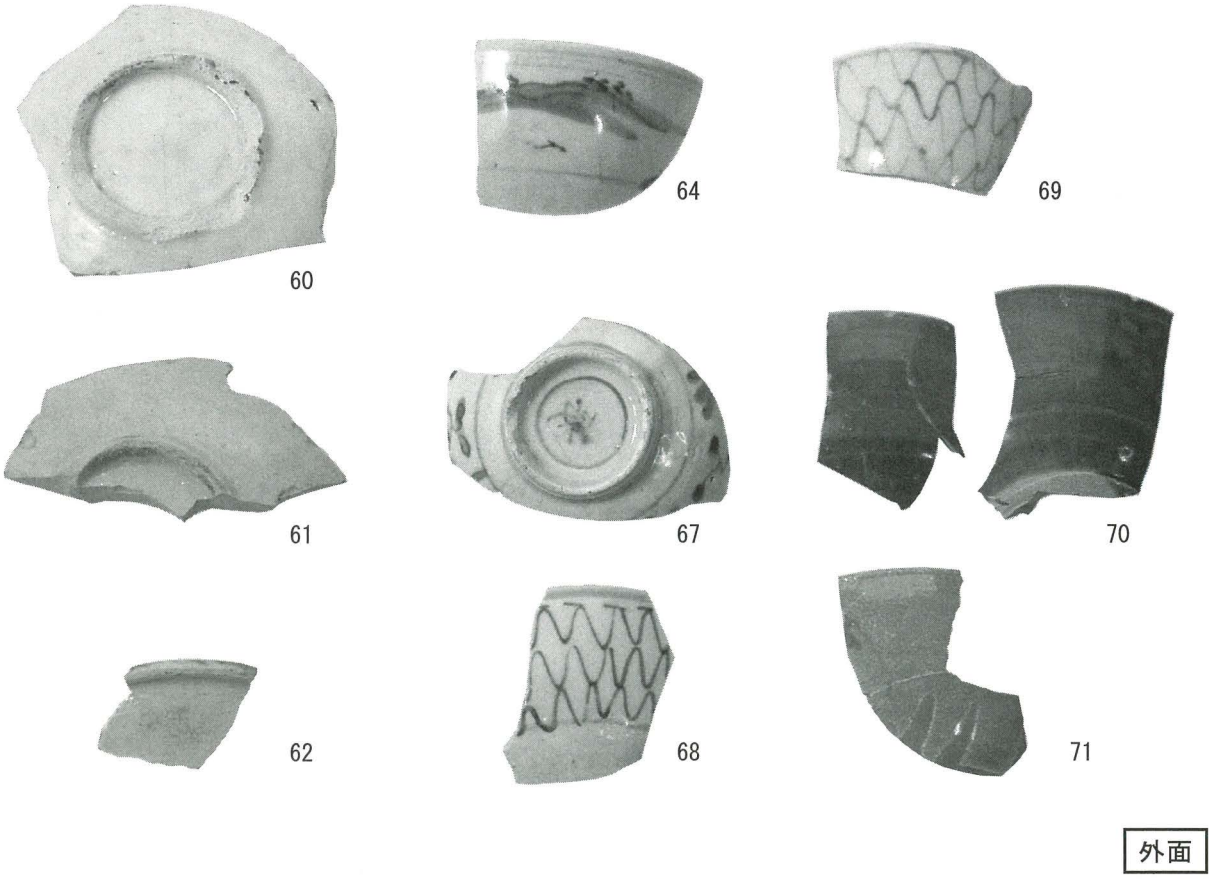
PL.10　出土遺物写真④



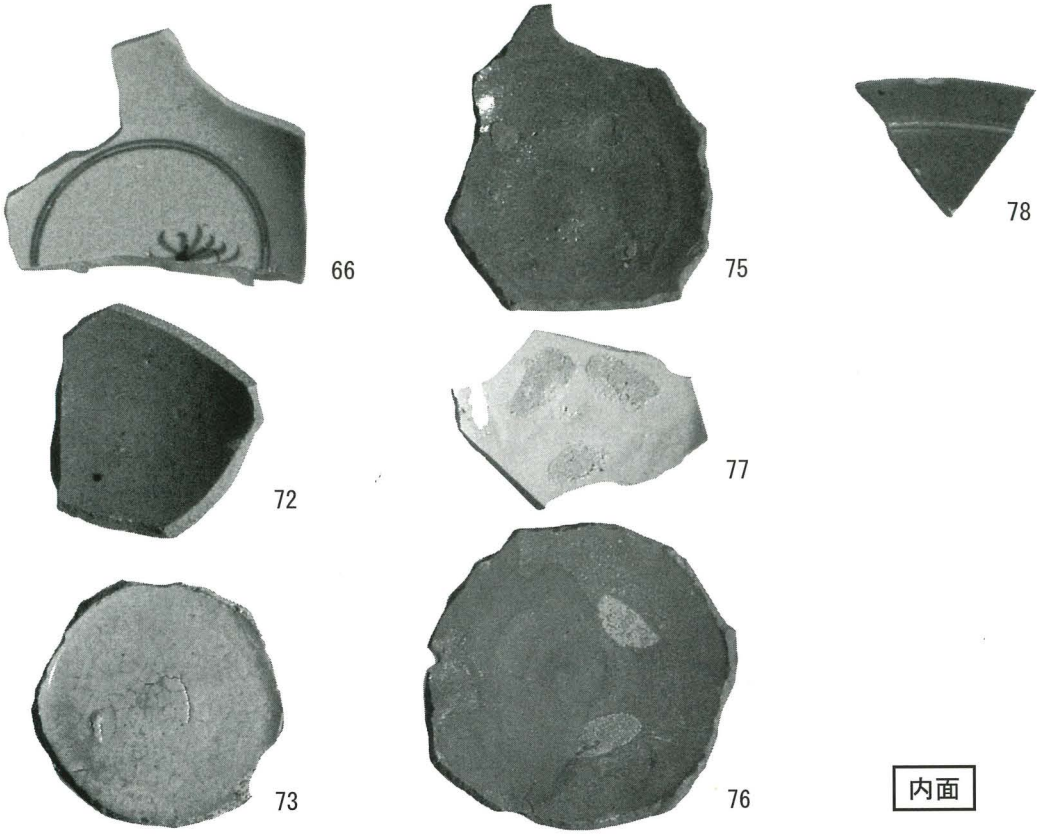


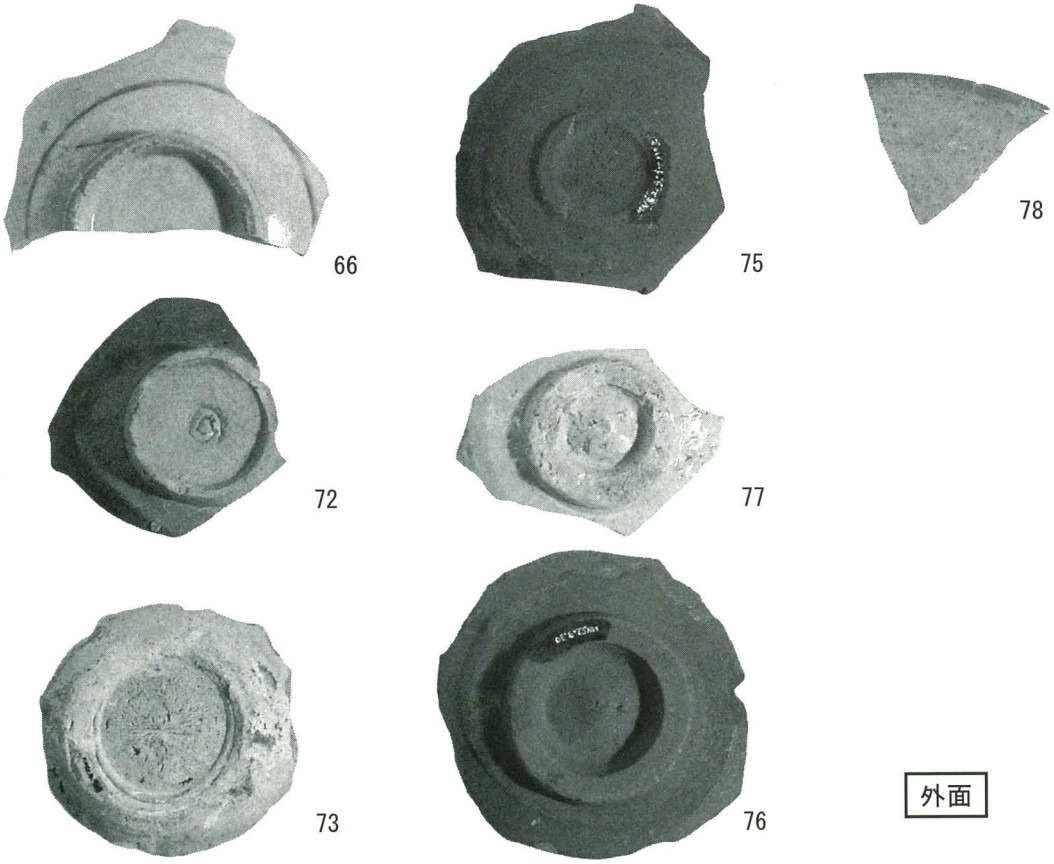
PL.11　出土遺物写真⑤





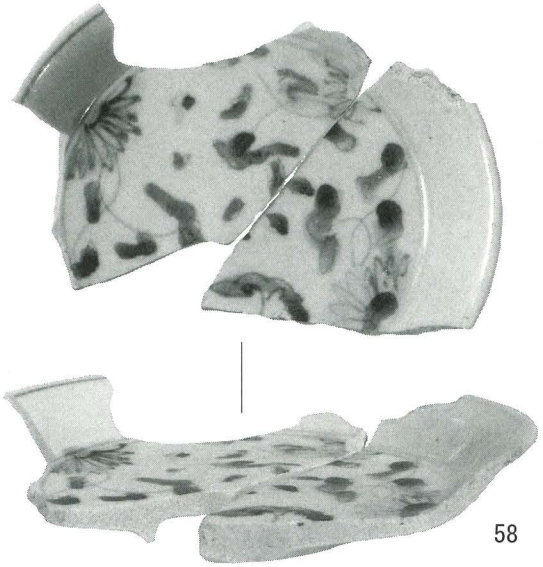
PL.12　出土遺物写真⑥

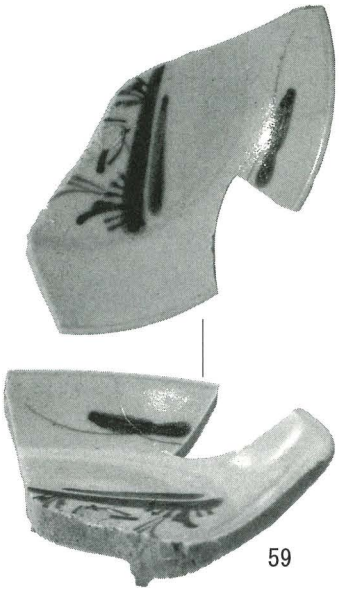


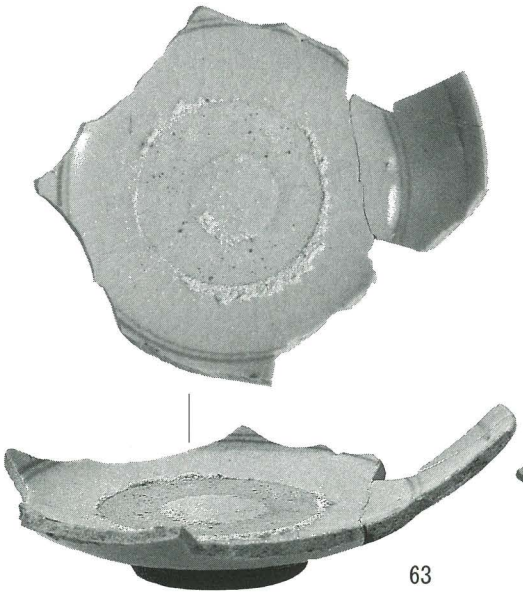


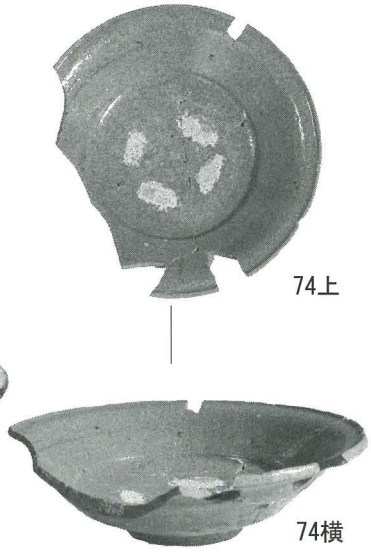
PL.13　出土遺物写真⑦

47


58


59


63


74上

74横

65

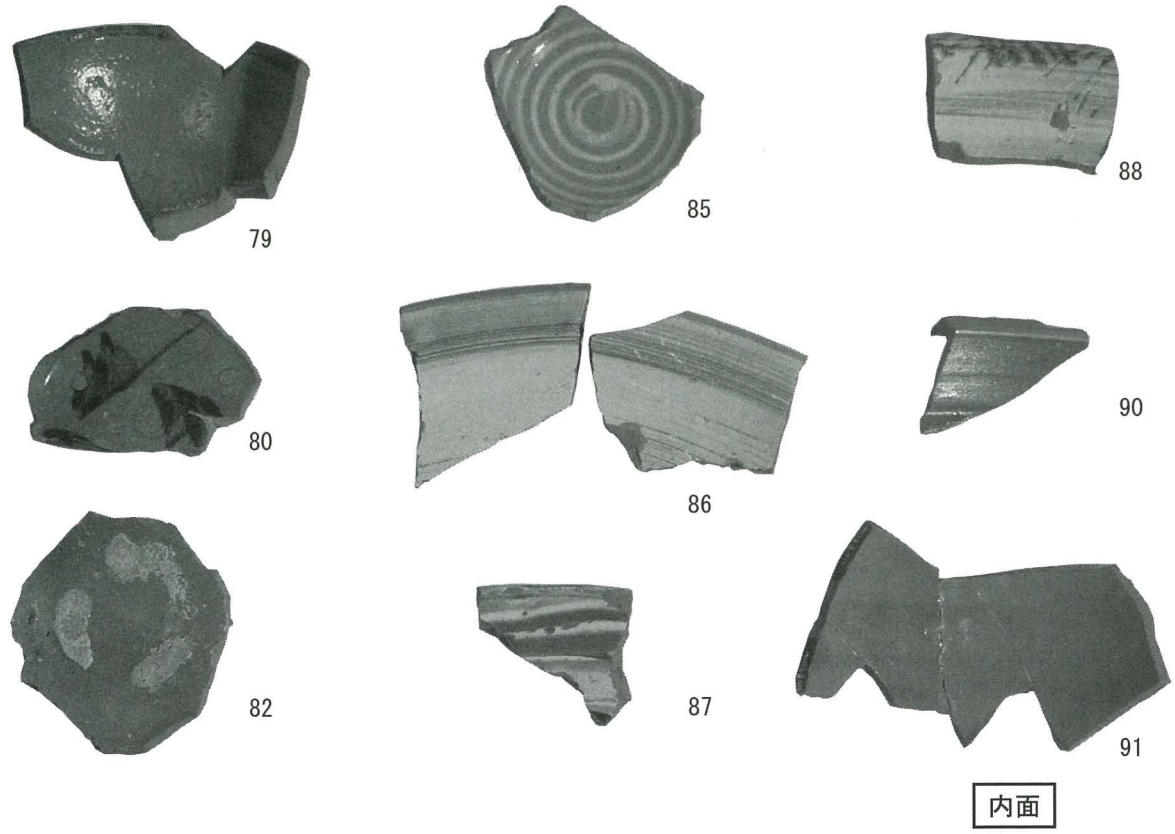
81

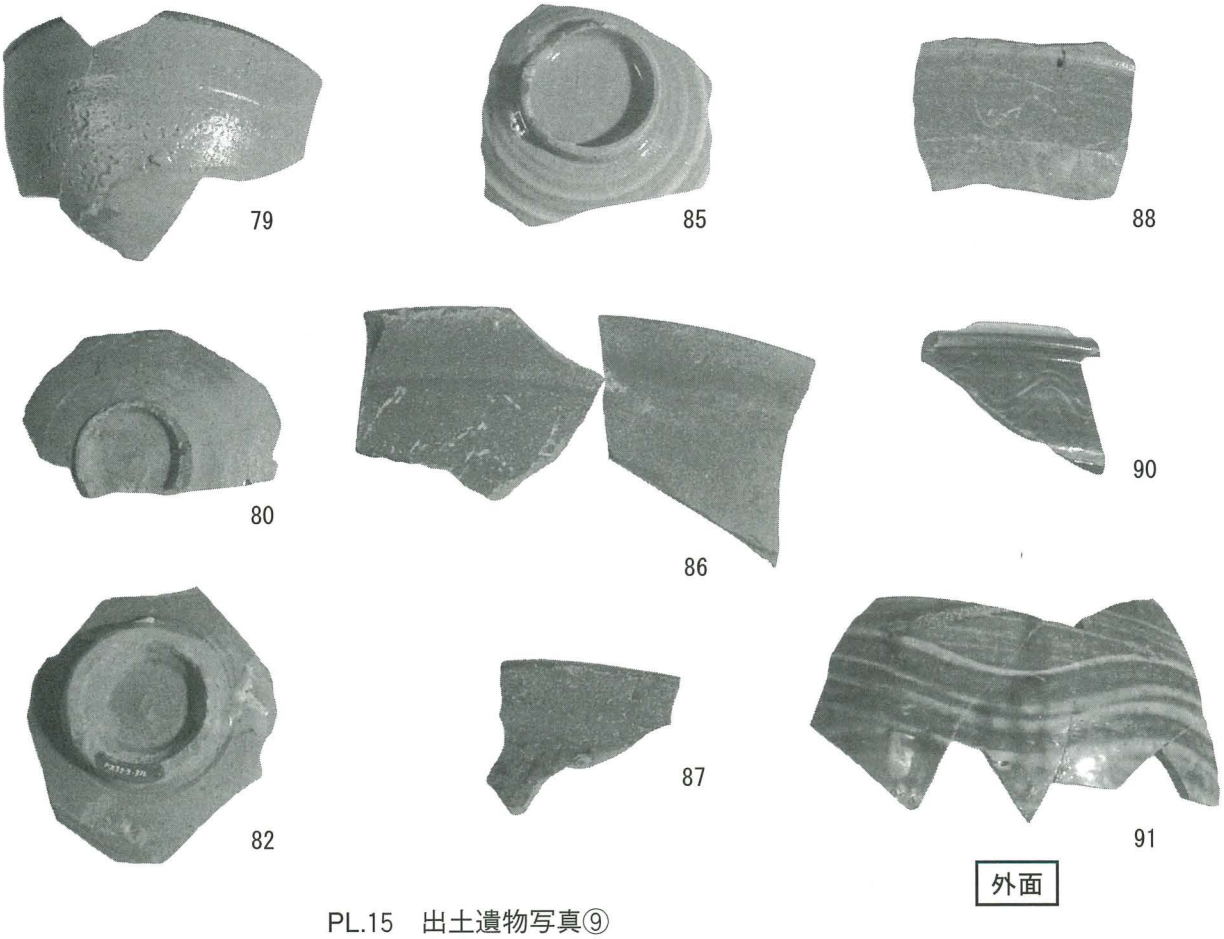
84

83

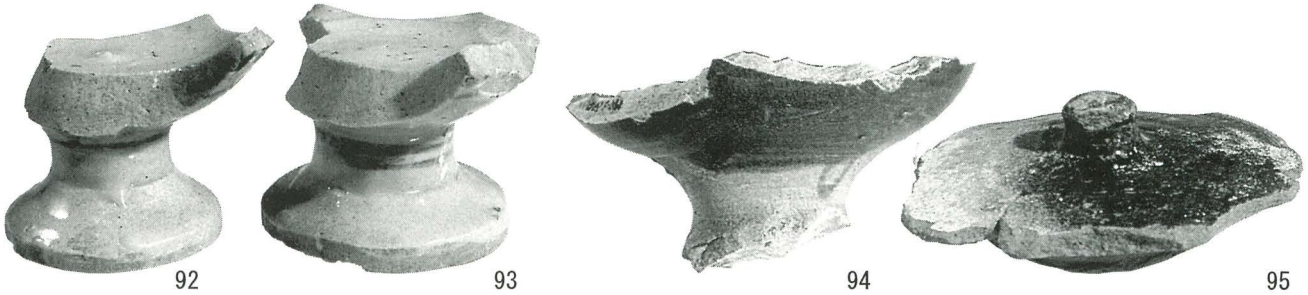
89

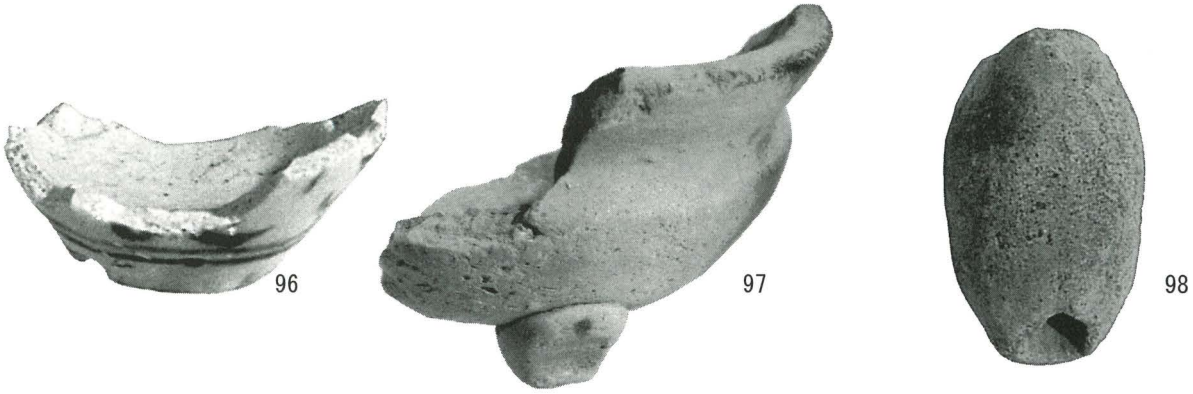
PL.14　出土遺物写真⑧

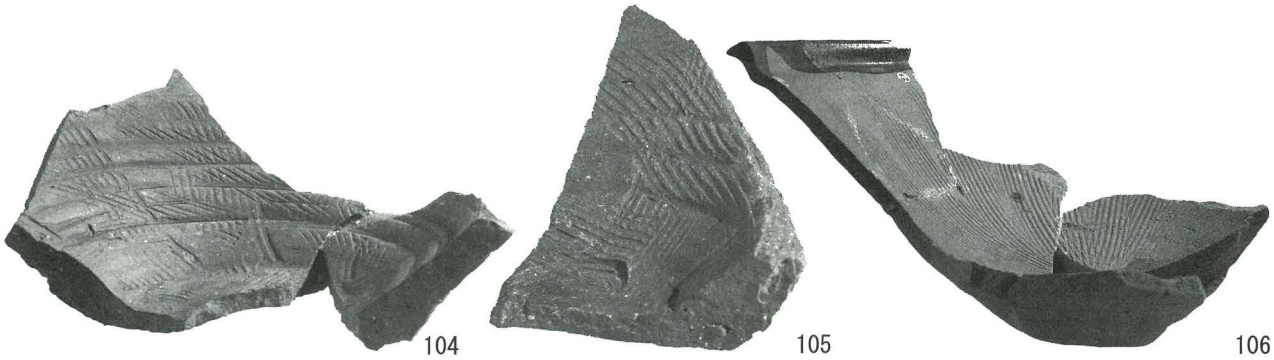


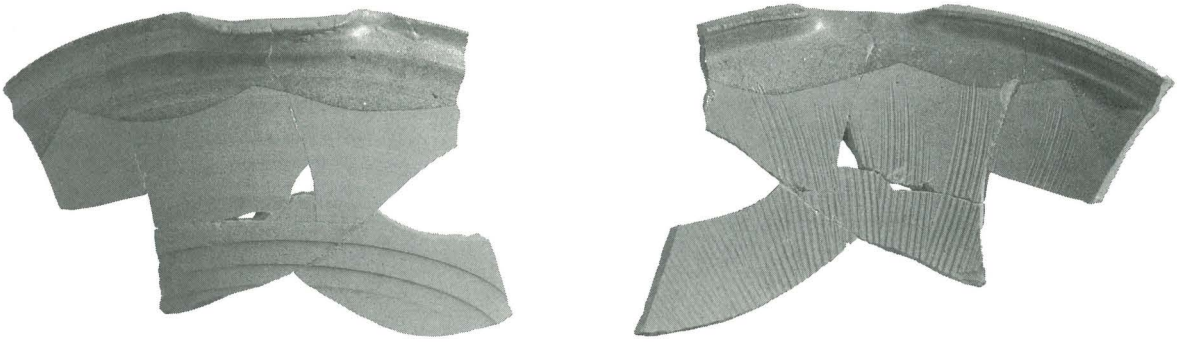


PL.15　出土遺物写真⑨


92 93 94 95


96 97 98


104 105 106

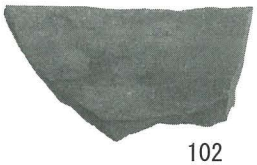

107表 107裏

PL.16　出土遺物写真⑩

99

100

101


102

103

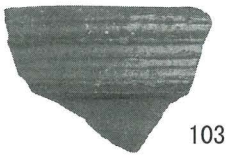
内面

99

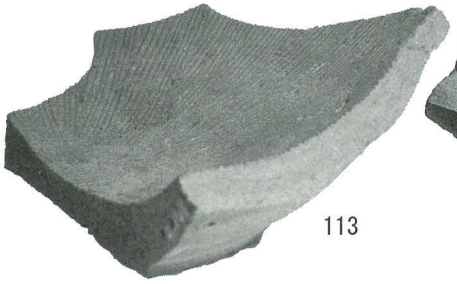
100

101

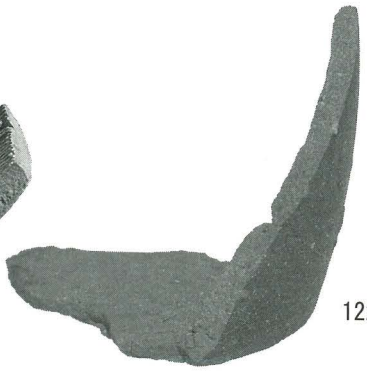
102


103

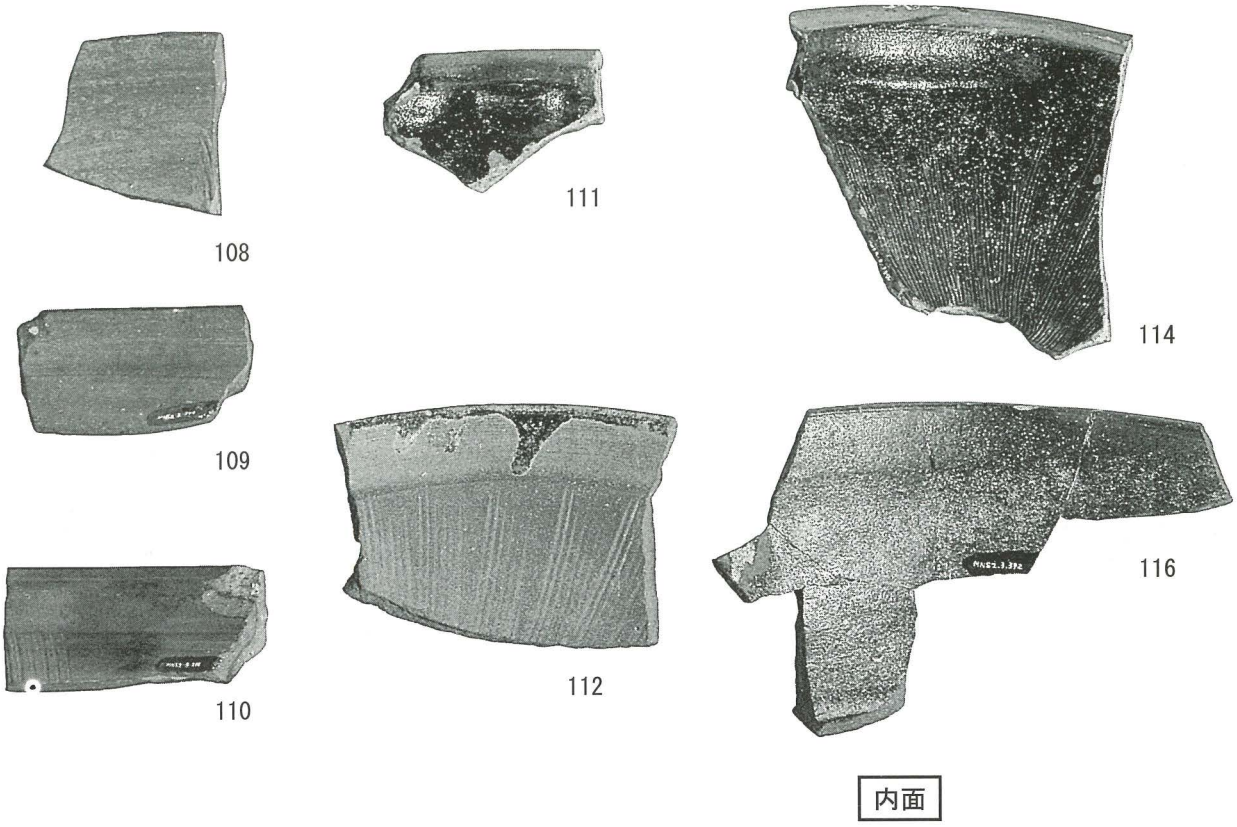
外面

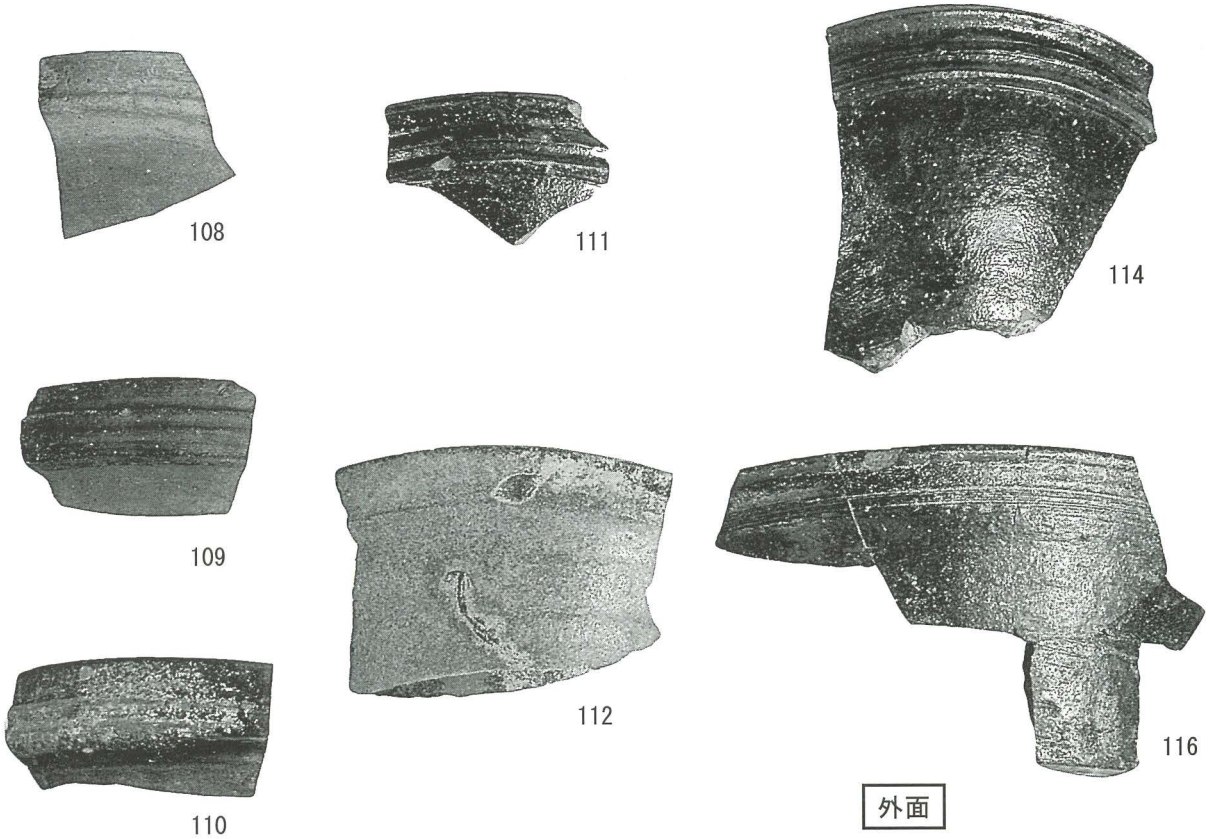

113

115


122

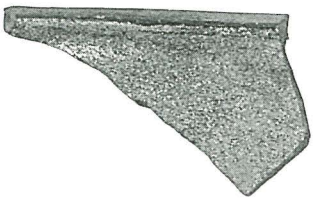
PL.17　出土遺物写真⑪





PL.18　出土遺物写真⑫

117



118

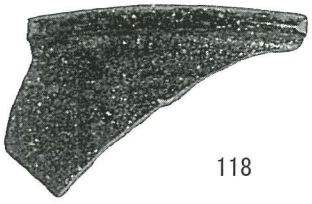
120

119

121

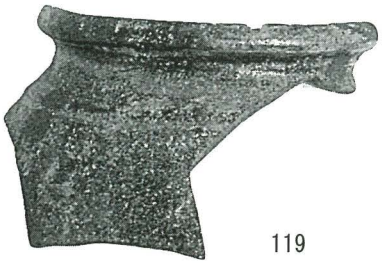
内面

117



118

120

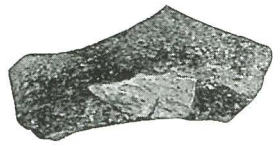


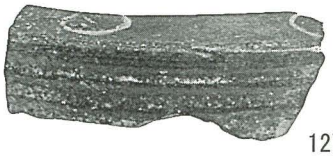
119

121

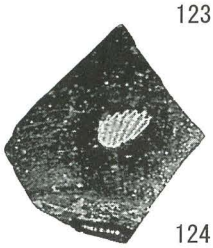
外面

PL.19　出土遺物写真⑬

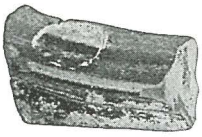

123

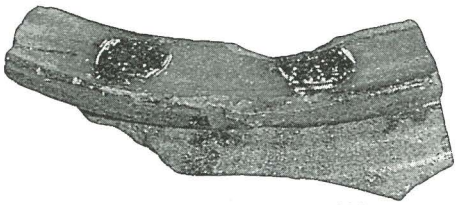

127

130

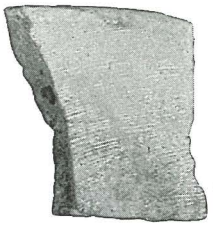

124

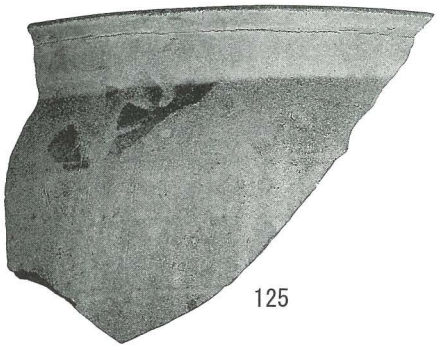
128

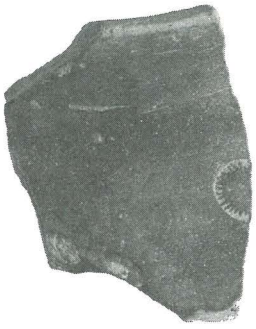

126

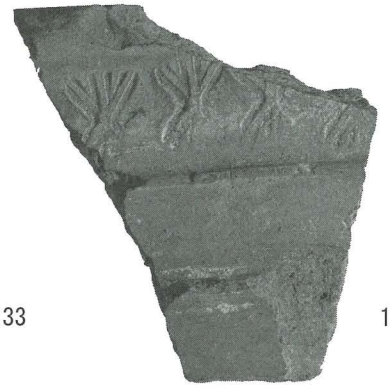

129

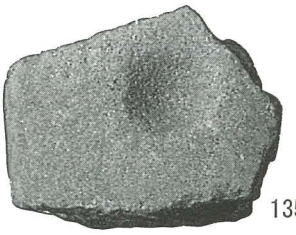
131

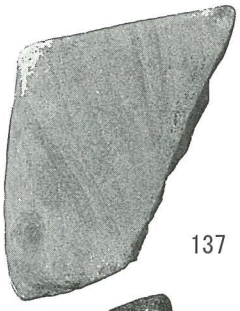

132

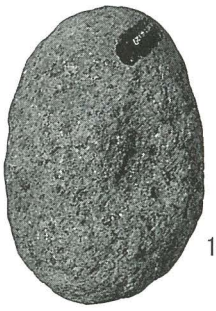

125

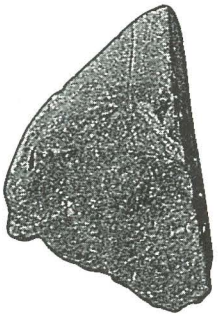

133

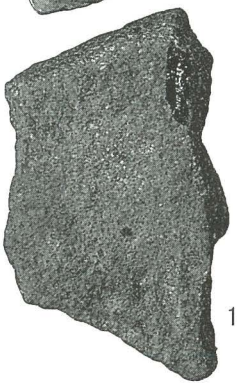

134

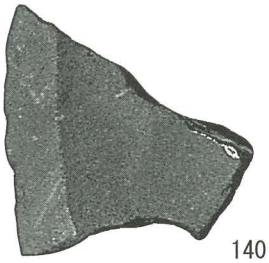

135


137

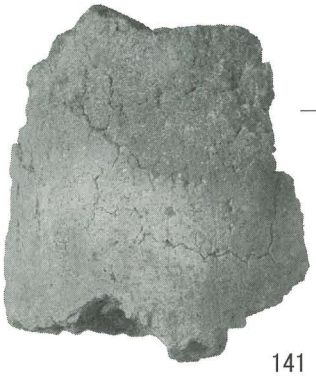

139

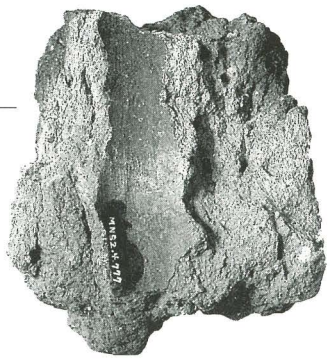

136


138

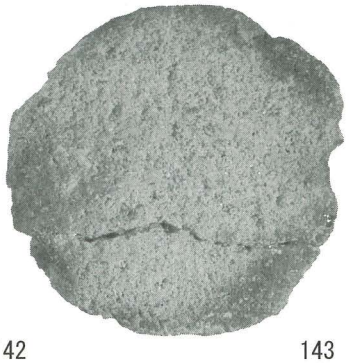

140

PL.20　出土遺物写真⑭


141



142


143

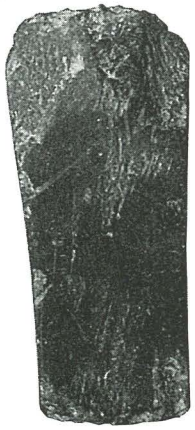
144

146

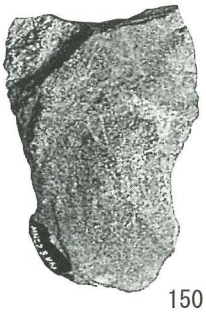
148

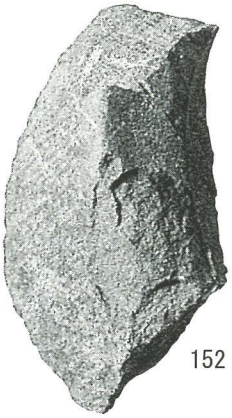
145

147


149

151


150


152

PL.21　出土遺物写真⑮

PL.22　出土遺物写真⑯

報告書抄録

ふりがな	みなみさこだいせきⅡ
書名	南迫田遺跡Ⅱ
副書名	県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	下山　覚・中摩浩太郎・渡部　徹也・鎌田　洋昭
編集機関	指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）
所在地	鹿児島県指宿市十二町2290
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみさこだ 南迫田遺跡	指宿市十二町 字野村（あざのむら）	46210	18			1994. 6. 1～ 1994.11.10 1997. 4.11～ 1997. 4.27	120 170	農道新設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南迫田遺跡	集落	中世～近世	道跡・溝状遺構	近世陶磁器・輸入陶磁器 鍛冶関連遺物	
	集落	古墳時代		成川式土器	
	集落	弥生時代	ピット・土坑	入来式土器(弥生時代中期～末)	

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集

南迫田遺跡Ⅱ

発　　行　指宿市教育委員会
発行年月日　平成1998年３月31日
発行場所　指宿市考古博物館
　　時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ
印　　刷　㈱中央印刷